羽場丸山地区土地区画整理事業第１工区羽場―大瀬木線
建設に伴う　埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

丸　山　遺　跡

1988. 3

飯田市建設部都市計画課
飯田市教育委員会

羽場丸山地区土地区画整理事業第１工区羽場―大瀬木線
建設に伴う　埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

丸　山　遺　跡

1988. 3

飯田市建設部都市計画課
飯田市教育委員会

序

近年、飯田市の中心街地では宅地需要が飽和状態に達しており、宅地の周辺地区への拡散化が進行しつつあります。中心市街地に隣接する羽場・丸山地区においても、今後一層市街地化が進むものと思われます。しかし両地区の公共施設等の設備は十分でなく良好な居住環境を実現するために道路・公園などの整備改善が求められ、両地区の土地区画整理が実施されることになりました。

一方その両地区には私達の先人が残した足跡、埋蔵文化財包蔵地があり、こうした価値ある文化財はできるかぎり現在の姿のまま後世に残していくことが大切です。しかし本事業のもつ高い公共性を考慮する時、次善の策ではありますが、発掘調査による記録保存をはかることは止むを得ないことと言えましょう。

発掘調査によって弥生時代から古墳時代にかけての集落跡がたくさんの遺物とともに発見され、この時期の集落を研究する上で貴重な知見が得られました。今後本発掘調査の成果が広く市民の皆さんや研究者の方々に活用されてこそ今次の調査が有意なものになるといえます。

本報告書の刊行にあたり、発掘調査・整理作業に深く理解と協力をいただいた飯田市建設部都市計画課、様々な気象条件の下で発掘調査に従事いただいた作業員の方々、並びに関係各位に心から感謝申し述べ、刊行の辞といたします。

昭和63年 3 月

飯田市教育委員会
教育長　福島　稔

例　　言

1. 本書は、羽場丸山地区土地区画整理事業第１工区羽場－大瀬木線建設に伴う埋蔵文化財包蔵地丸山遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、飯田市教育委員会が飯田市建設部都市計画課より委託を受け実施した。
3. 発掘調査は、昭和62年５月から12月にかけて断続的に実施し、昭和62年度中に整理作業及び報告書の作成を行なった。
4. 発掘調査及び整理作業においては一貫して遺跡名に略号ＭＲＹを用いた。
5. 本書の記載は、調査区Ｂ～Ｅ区の順に行なった。遺構図は本文と合わせ挿図とし、遺物及び写真図版は本文末に一括した。
6. 本書は、小林正春・佐々木嘉和・佐合英治・吉川豊・馬場保之が分担執筆し、それぞれの分担は文末に記した。なお本文の一部について小林が加筆・訂正を行なった。
7. 本書に掲載した図面類の整理は佐合・馬場が、遺物実測は佐合があたった。なお整理作業実施にあたり佐々木・吉川が補佐した。
8. 本書の編集は、調査員全体で協議の上、佐々木・佐合・馬場が行ない、小林が総括した。
9. 本書に掲載した遺構図の中に記した数字はそれぞれの穴の深さ（単位cm）を表わしている。
10. 本書に関連した遺物及び図面類は、飯田市教育委員会が管理し、飯田市上川路飯田市考古資料館で保管している。

本　文　目　次

序

例　言

目　次

Ⅰ　経　　過 …… 1

1.　調査に至るまでの経過 …… 1

2.　調査の経過 …… 1

3.　調査組織 …… 2

Ⅱ　遺跡の環境 …… 3

1.　自然環境 …… 3

2.　歴史環境 …… 3

Ⅲ　調査の結果 …… 9

1.　B区 …… 9

(1)　柱　穴 …… 9

(2)　その他 …… 10

2.　C区 …… 10

(1)　竪穴住居址 …… 10

①　1号住居址　②　2号住居址　③　3号住居址　④　4号住居址

⑤　5号住居址　⑥　6号住居址　⑦　7号住居址　⑧　8号住居址

(2)　土　坑 …… 21

①　土坑59　②　土坑60　③　土坑61　④　土坑62　⑤　土坑63

(3)　柱　穴 …… 21

(4)　暗渠排水 …… 23

(5)　その他 …… 23

①　焼土散布地　②　たたき状生活面

3.　D区 …… 24

(1)　その他 …… 24

4.　E区 …… 25

(1)　土坑 …… 25

①　土坑1　②　土坑2　③　土坑3　④　土坑4　⑤　土坑5

⑥　土坑6　⑦　土坑7　⑧　土坑8　⑨　土坑9　⑩　土坑10

⑪　土坑11　⑫　土坑12　⑬　土坑13　⑭　土坑14　⑮　土坑15

⑯ 土坑16　⑰ 土坑17　⑱ 土坑18　⑲ 土坑19　⑳ 土坑20
㉑ 土坑21　㉒ 土坑22　㉓ 土坑23　㉔ 土坑24　㉕ 土坑25
㉖ 土坑26　㉗ 土坑27　㉘ 土坑28　㉙ 土坑29　㉚ 土坑30
㉛ 土坑31　㉜ 土坑32　㉝ 土坑33　㉞ 土坑34　㉟ 土坑35
㊱ 土坑36　㊲ 土坑37　㊳ 土坑38　㊴ 土坑39　㊵ 土坑40
㊶ 土坑41　㊷ 土坑42　㊸ 土坑43　㊹ 土坑44　㊺ 土坑45
㊻ 土坑46　㊼ 土坑47　㊽ 土坑48　㊾ 土坑49　㊿ 土坑50
(51) 土坑51　(52) 土坑52　(53) 土坑53　(54) 土坑54　(55) 土坑55
(56) 土坑56　(57) 土坑57　(58) 土坑58

(2) 溝　址 …… 35
① 溝址1

(3) 柱　穴 …… 37

(4) 暗渠排水 …… 37

(5) その他 …… 37
① 遺構外出土遺物　② その他

Ⅳ まとめ …… 39

挿　図　目　次

挿図1 調査遺跡及び周辺遺跡位置図 …… 4
挿図2 調査位置及び周辺地図 …… 7
挿図3 丸山遺跡遺構全体図 …… 8
挿図4 ＭＲＹ B区柱穴平面図 …… 9
挿図5 ＭＲＹ 1号住居址 …… 11
挿図6 ＭＲＹ 2号住居址 …… 12
挿図7 ＭＲＹ 3号住居址 …… 13
挿図8 ＭＲＹ 4号住居址 …… 14
挿図9 ＭＲＹ 5号住居址 …… 16
挿図10 ＭＲＹ 6号住居址 …… 17
挿図11 ＭＲＹ 7号住居址 …… 18
挿図12 ＭＲＹ 8号住居址 …… 20
挿図13 ＭＲＹ C区土坑59・61・62・63、柱穴平面図 …… 22
挿図14 ＭＲＹ C区土坑60 …… 23

挿図15　ＭＲＹ　Ｅ区土坑１・２・３・４・５・６・７・８・９・10・11・12・17・
18・40・46・52・53・54・55・56・57・58、柱穴平面図 …… 26
挿図16　ＭＲＹ　Ｅ区土坑13・14・15・16・19・20・21・22・23・24・25・26・27・
28・29・30・31・32・33・34・35・36・37・38・39・41・
42・43・44・45・47・48・49・50・51、柱穴平面図 …… 28
挿図17　ＭＲＹ　溝址１ …… 36

図　版　目　次

第１図　ＭＲＹ　１号住居址出土遺物 …… 42
第２図　ＭＲＹ　１・２号住居址出土遺物 …… 43
第３図　ＭＲＹ　２号住居址出土遺物 …… 44
第４図　ＭＲＹ　４・６号住居址出土遺物 …… 45
第５図　ＭＲＹ　６・７号住居址出土遺物 …… 46
第６図　ＭＲＹ　出土鉄製品、石製品、石器 …… 47
第７図　ＭＲＹ　土坑１・２・３・11・12・15・29・32・33・35・36・41・45・46・
52出土遺物 …… 48
第８図　ＭＲＹ　土坑53・56、溝址１、Ｂ・Ｃ区遺構外出土遺物 …… 49
第９図　ＭＲＹ　Ｅ区遺構外出土遺物 …… 50
第10図　ＭＲＹ　〃 …… 51
第11図　ＭＲＹ　４号住居址、Ｅ区遺構外出土遺物 …… 52

写　真　図　版　目　次

図版１　丸山遺跡全景
図版２　Ｂ区全景、Ｃ区全景
図版３　１号住居址・遺物出土状況
図版４　２号住居址・遺物出土状況
図版５　２号住居址遺物出土状況、３号住居址
図版６　４号住居址、同炉址・断面
図版７　５号住居址
図版８　６号住居址・入口施設
図版９　６号住居址カマド・断面
図版10　７号住居址

図版11　８号住居址、土坑59
図版12　土坑60・61
図版13　Ｃ区暗渠排水
図版14　Ｄ区全景、ＤＫ99暗渠排水
図版15　Ｅ区全景、Ｅ区土層堆積状況
図版16　土坑１・２・52～56
図版17　溝址１・断面
図版18　ＥＡ95暗渠排水、Ｅ区遺構外出土遺物
図版19　Ｅ区遺構外出遺物
図版20　１号住居址出土遺物
図版21　１号住居址出土遺物、２号住居址出土遺物
図版22　２号住居址出土遺物
図版23　２号住居址出土遺物、４号住居址出土遺物
図版24　６号住居址出土遺物、７号住居址出土遺物
図版25　土坑出土遺物
図版26　溝址１出土遺物、Ｂ・Ｃ区遺構外出土遺物
図版27　Ｅ区遺構外出土遺物
図版28　Ｅ区遺構外出土遺物
図版29　Ｅ区遺構外出土遺物、丸山遺跡出土鉄製品・石器
図版30　調査風景
図版31　調査風景、見学風景

Ⅰ　経　　過

1．調査に至るまでの経過

飯田市における市街地の形成は、天竜川を望む段丘突端部に構築された飯田城によるものである。段丘上における飯田城の位置は段丘最先端にあるため、近世における城下町の形成は同一段丘面上の西方一帯に展開され、標高的には城より高位に立地している。現在、市街地化している範囲は、近世の城下に加え、近代の鉄道敷設によって区切られた現在のＪＲ飯田線以東が主体となっている。

しかし、近年飯田市においても小規模ながら都市形態の変化が現われつつあり、特に住居地域の市街地からの拡散 ── ドーナツ化現象が顕著になりつつある。そうした中で、市街地と同一段丘面上にあり、市街地西方に広がる風越山麓に至る東野・丸山・羽場地区の宅地化は加速度的に進行しつつある。また、急速に展開する宅地化現象は、無秩序な開発に至る危険性を含んでおり、行政の対応による計画的でより有効な土地利用の姿が求められるに至った。そこで、昭和40年代の後半から飯田市による都市計画事業が推進され、まず東野地区の土地区画整理が実施され、現在の整備された土地景観がある。引き続いて、丸山地区・羽場地区における土地区画整理事業が計画され、当面丸山地区の事業実施がなされることとなった。

事業実施計画が具体的に進行する中で、事業実施範囲内に埋蔵文化財の包蔵地が所在するため事業実施者である飯田市建設部都市計画課と、文化財保護者である飯田市教育委員会とで再三にわたる協議を経て、現地での試掘調査を実施し、その結果により本格的な発掘調査実施の要否を決することとなった。

一方、事業実施にあたっては、都市計画課による地元への説明等の経過を経て昭和62年度に具体的に現地での作業着手となり、それに先立って本書に関する試掘調査・発掘調査実施となった。

なお、その間、飯田市教育委員会は文化財保護のため、長野県教育委員会からの指導・助言を得ながら具体的な方向付けを行なった。　　（小林正春）

2．調査の経過

関係者の諸協議に基づき、昭和62年５月６日、試掘調査に着手した。

まず羽場大瀬木線の路線基準杭を基準に調査区を設定した。№４杭をＡ・Ｂ区の、№９杭をＣＤ区の、№14杭をＥ・Ｆ区の境界とし、各区を南側からアルファベット順に２ｍ間隔に区切った。東西方向は西から２ｍ毎に94～105列とし、路線センターを99列と100列の境界とした。グリッ

ド名は例えばＢＡ99となる。

調査の結果、Ｂ区で柱穴、Ｃ区では２軒の竪穴住居址、Ｅ区で多数の弥生時代から古墳時代にかけての遺物が検出された。

試掘調査の結果に基づき、長野県教育委員会文化課の指導を受け、６月５日よりＢ・Ｃ・Ｅ区について本調査を実施した。この結果、Ｃ区で弥生時代後期から古墳時代後期にかけての竪穴住居址４軒、中世に属すると思われる遺構及び土坑５基を検出し、またＥ区では土坑58基と溝址等を検出した。これらについて写真撮影・測量調査を行ない、６月23日一旦調査を終了した。

この際竪穴住居址検出地区に隣接する宅地について調査が未了であったため、都市計画課と再度協議を行ない、改めて９月21日から10月14日、12月21日から25日の両度にわたり、Ｃ区の発掘調査を実施した。その結果、弥生時代後期から古墳時代後期にかけての竪穴住居址４軒が確認された。

調査終了後引き続き飯田市考古資料館において、遺物水洗・注記・接合・復元・実測作業ならびに現地で記録された写真・図面類の整理を行ない、昭和63年３月末まで報告書作成作業にあたった。

３．調 査 組 織

(1) 調査団

調査担当者　小林正春

調査員　佐々木嘉和　佐合英治　吉川豊　馬場保之

作業員　木下当一　細田七郎　高橋収二郎　木下傳　藤本幸吉　小室幸充
木下和子　横井近枝　溝上清見　大島利男　平沢今朝光　高木義治
森章　窪田多久三　松下真幸　吉川正実　向田一雄　正木実重子　武田恵美
佐々木啓　福沢トシ子　村沢愛蔵　柳沢謙二　池田幸子　大日方富士子
唐沢古千代　川上みはる　木下玲子　櫛原勝子　小平不二子　吉沢佐紀子
丹羽由美　牧内八代　松本恭子　宮内真理子　吉川悦子　吉川紀美子

(2) 事務局

飯田市教育委員会社会教育課

塩沢正司　（社会教育課長）
池田明人　（社会教育課文化係長）
小林正春　（　同　上　文化係）
吉川　豊　（　同　上　）
馬場保之　（　同　上　）
土屋敏美　（庶務課）　（馬場保之）

Ⅱ　遺跡の環境

1．自然環境

飯田市はもちろん、伊那谷全体にわたる地形は、東西を伊那山脈と中央アルプスにはさまれ、その中央部を天竜川が南流し、その両岸は発達した段丘により構成されるといえる。それぞれの段丘は両側の山脈から流出する大小の天竜川の支流により分割され、支流から支流の間は独立した地形を成している。

本書に関連する丸山遺跡及び飯田市街地の立地する場所は、南を飯田松川により、北を野底川により区切られた段丘上に立地する。また、伊那谷の一般的な地形としては数段の段丘面により構成されるが、飯田市街地の立地する位置は伊那谷の他所と若干様相が異なり、飯田城跡のある段丘東端から西端の風越山麓裾部までが一連の面となっている。このことは、本来の段丘地形が存在しないわけではなく、市街地化の進行により微地形の判断が困難であることに合わせ、風越山麓からの扇状地形が発達したことによっており、上位の段丘地形はこの扇状地に覆われているためである。それらの要因により、現状では東端の段丘端部の標高500ｍから風越山麓裾の標高600ｍまでの比高差100ｍの間が一連の面としての地形を示している。全体として一連の地形を成す飯田市街地の立地する段丘上において丸山遺跡の位置は、段丘面上のほぼ中央部で若干風越山麓寄りの、風越山麓から発達した扇状地上にある。段丘上における位置からみて、丸山遺跡周辺は標高530ｍ前後であり扇状地の先端部付近と考えられ、段丘上にみられる王竜寺川、源長川など小谷川により微地形が複雑に変化する部分である。

丸山遺跡は王竜寺川と源長川の谷にはさまれた間にあり、全体的には起伏に富んだ微地形となり、丘陵部と凹地が連続して認められ、凹地部においては小湿地の発達した場所もあり、断続的に湧水地の存在も知られる。

また丸山遺跡は扇状地上に立地することは先記のとおりであるが、風越山麓裾部からの距離は500ｍ前後あり、自然災害は通常受けにくい場所といえ、総合的な自然条件下においては、古くからの生活適地であったといえる。

2．歴史環境

本遺跡周辺にかかわる歴史環境としては、近世幕藩制の中で発展した飯田城下に隣接し、かつそれと直結した農村地帯としての位置づけが最も強く示される。

しかし、自然環境で記したとおり、丸山遺跡一帯の自然条件下においては、原始・古代におい

1 丸山遺跡　A 押洞遺跡　B 正永寺原遺跡　C さつみ遺跡　D 権現堂前遺跡
E 古屋垣外遺跡　F 赤坂遺跡　G 宮崎A遺跡　H 宮崎B遺跡　I 大門原B遺跡
J 大門原D遺跡　K 飯田城跡

挿図1　調査遺跡及び周辺遺跡位置図

て連綿と続く人々の生活があったことは否定できず、市街地化の進行する中で遺跡の具体的な状況を判断できる材料は少ないが、飯田市街地の立地する段丘上の随所にその痕跡を見い出すことができる。

考古学分野における飯田市街地の立地する段丘上で最も古い人々の生活痕跡としては、昭和61年に行なわれた飯田城跡の発掘調査により発見された細石核であり、将来において更に古い先土器時代まで遡る可能性もある。

縄文時代としては、風越山麓の山裾部に点在する正永寺原・押洞などの諸遺跡から早期の押型文土器も出土している。また、前期以降晩期に至る縄文時代全体を通じて微地形の変化によりその立地条件は多種・多様であるが、ほぼ全域に分布している。縄文時代の遺跡分布の主体は、本遺跡も含む風越山麓寄りにあるが、古くからの市街地の一画である大門町にも縄文時代中期中葉の住居址が確認された事実もあり、古くからの市街地の地下にも縄文時代の人々の生活した痕跡の存在する可能性は強いといえる。

続く弥生時代から古墳時代にかけては、自然環境で触れたように風越山の裾部及び扇端部付近で発達する湧水に拠る水田経営が随所にあったことが予想され、羽場地区の権現堂前遺跡や本遺跡ではかなりの規模で集落が形成されていた事実もあり、既出の断片的な資料によっても上飯田地区のほぼ全域が弥生時代から古墳時代における安定した生活地であったといえる。

なお、古墳時代については、その時代の最も特徴的な事象として古墳の築造があり、上飯田地区内にも数基の古墳の存在したことが伝えられており、市街地化の進行により残存するものは無いが、古墳時代の総合的な様相としては、市内竜丘地区や座光寺地区などと同様の姿があったと考えられる。

続く奈良時代から平安時代の状況はまったく不明であるが、古墳時代に立脚した集落の存続は当然考えられる。

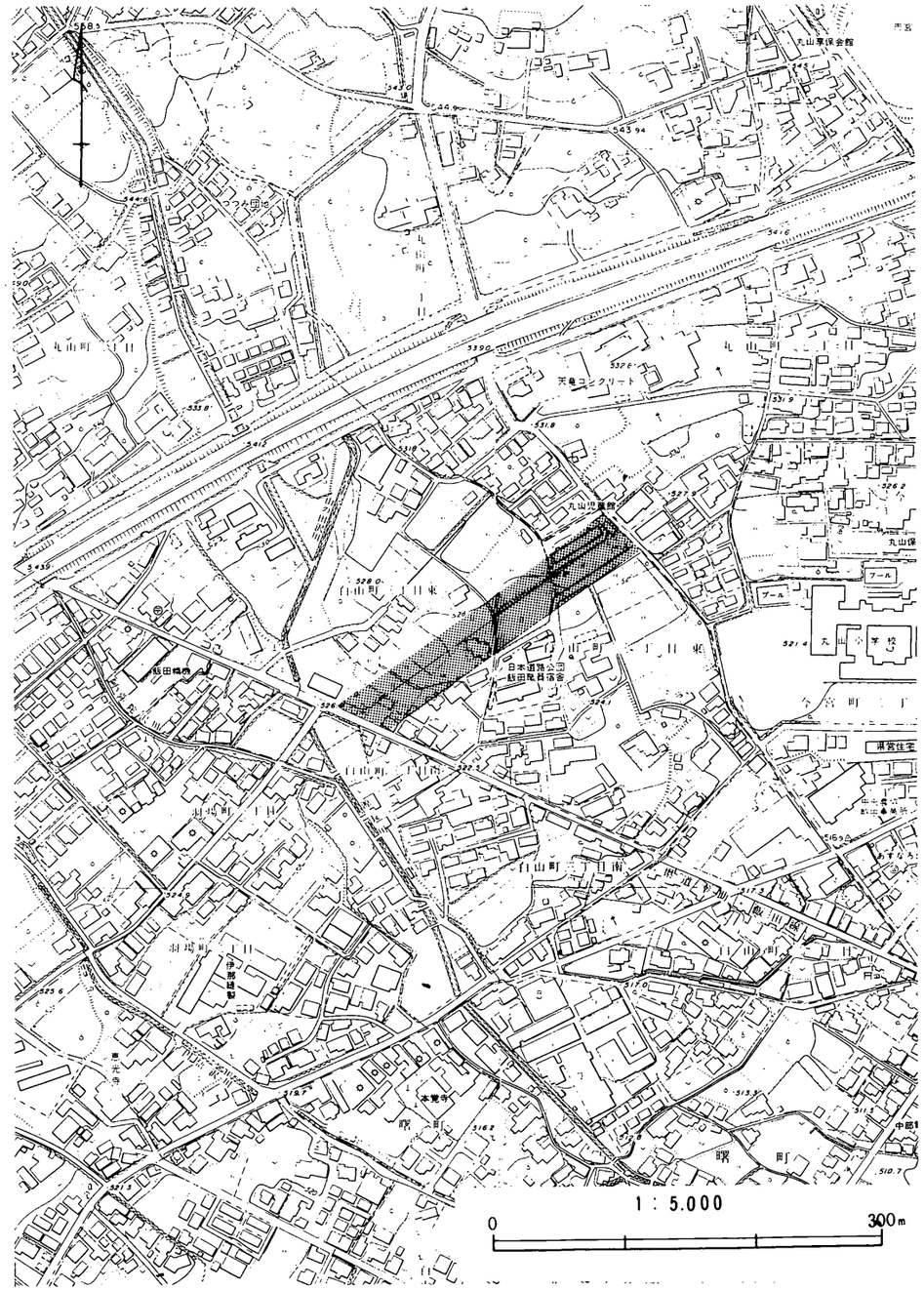
中世に至って、それぞれの詳細な初源期は不明ではあるが、飯田城・愛宕城・上飯田の城山・虚空蔵山頂などに山城が造られ、一定の集団による生活の営みがあったことを推し計ることができる。

なお、現在ある飯田市の成因は、近世における飯田藩主京極・脇坂・堀氏の居城である飯田城に起因した城下町の形成によるわけであるが、その地形的な特色である段丘地形により、一般的な城下町とは異なったあり方を示している。飯田城は段丘東端の最も標高の低い部分に位置し、標高の高い西方部分に城下町が形成されている。

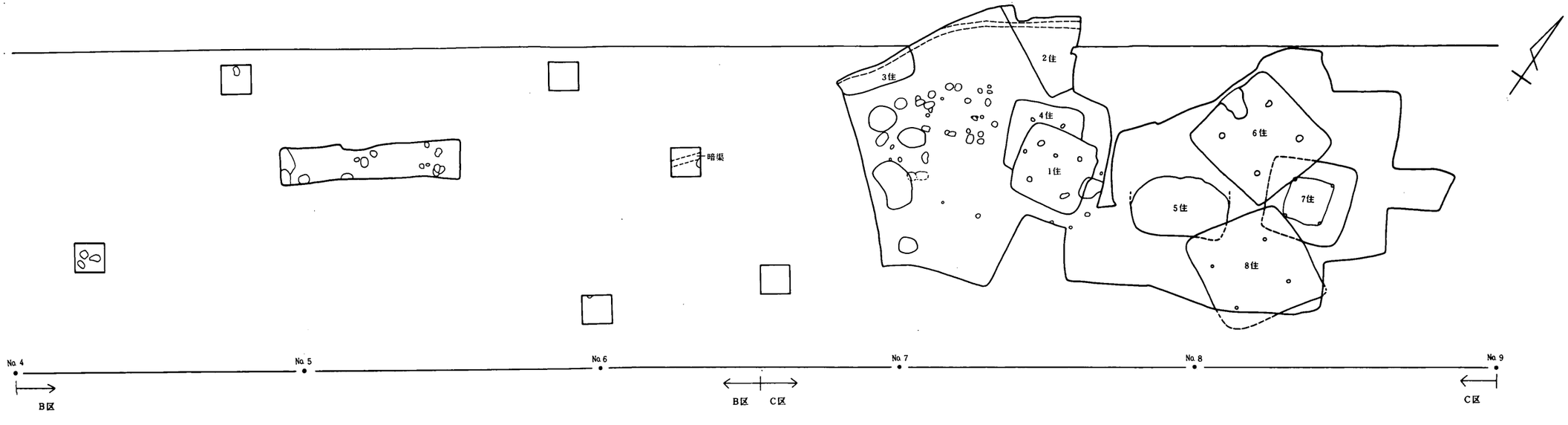
飯田城に関する城下町が西方に発達したのは、東方の段丘下段までの比高差が約70ｍと急激であり、かつその部分は天竜川支流の飯田松川と谷川の合流点であり、常に水害等の影響を受ける氾濫原であったためと考えられる。

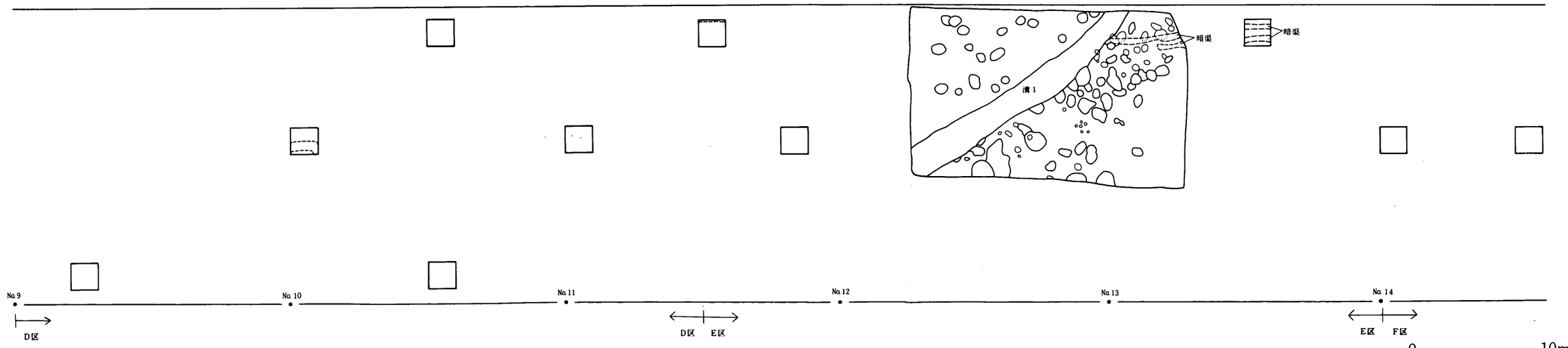
以上のように丸山遺跡周辺は、近世以降においては飯田市街地を主とすればその従的な位置づけがされがちであるが、縄文時代から中世に至る人々の生活した大半の時代において飯田台地上

における主体的な役割を果して来た地であるといえる。　（小林正春）



挿図２　調査位置及び周辺地図





挿図3　丸山遺跡 遺構全体図

Ⅲ　調査の結果

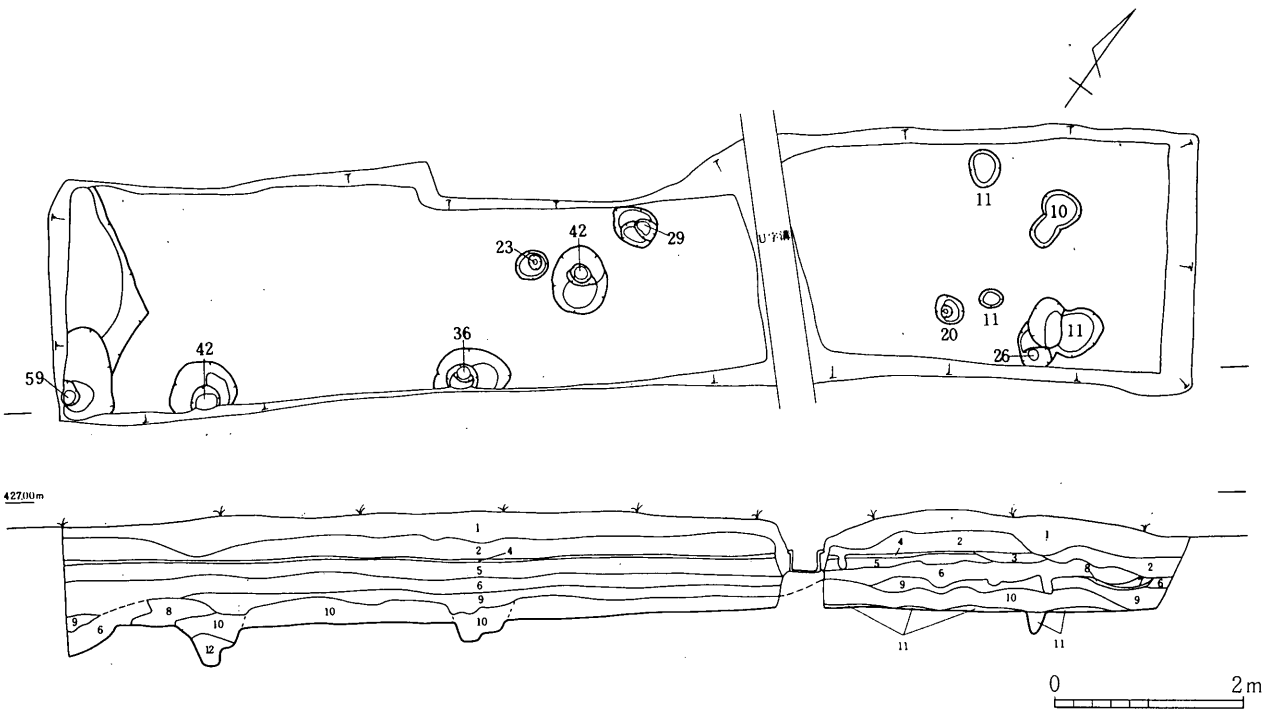
1．B　区

1）柱　穴

ＢＪ98からＢＯ98の幅２ｍ、長さ12ｍのトレンチ内に不規則ではあるが小穴がみとめられたためＢＮおよびＢＯを西北側へ拡張した。

検出した小穴は11個、どれも楕円形から円形を呈し、中には底部に柱痕とみられる凹みを持つものもある。深さは10～51㎝と差があり、それぞれの関連性も不明であり断言できないが、建物址に関係する柱穴と考えられる。

黒色砂土の覆土からは遺物の出土はなく、時期の特定は困難であるが、Ｃ区にみられる中世の



1	表土	5	暗褐色土	9	茶褐色土
2	耕土	6	黒色土	10	黒色砂質土(砂混じり)
3	黄味をおびた暗褐色土	7	黒色砂土	11	灰色砂土
4	鉄分沈澱層	8	砂層(白色礫)	12	砂礫土

挿図４　MRY　B区柱穴平面図

生活面との関連も考えられる。

2) その他

ＢＷ98で乱雑に石を入れた暗渠排水を確認した。これはＣ区３号住居址の上部で確認したものへ連続する可能性が強い。

形態は、灰白色砂層を掘り凹めその中に石を投げ込んだだけのものであり、他の暗渠が石を組んだものであるのに比べ、雑な作りである。

遺物としては、ＢＨ95から灰釉陶器片と土師器片が出土しているが、遺構に伴なう遺物とは考えられない。（吉川　豊）

２．Ｃ　区

1) 竪穴住居

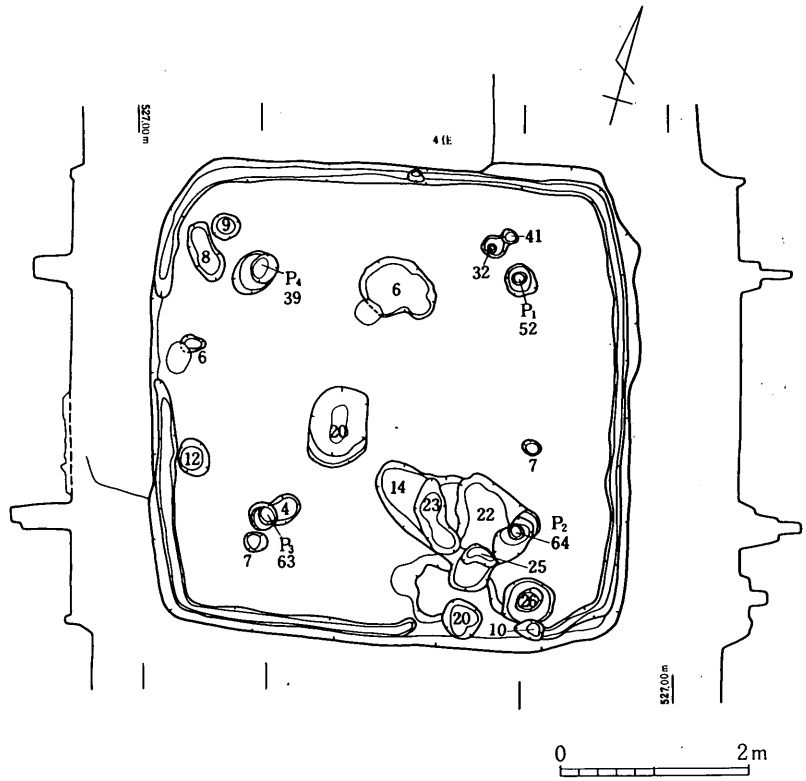
①　１号住居址（挿図５、第１・２・６図）

ＣＪ98中心に検出し、弥生時代の４号住居址を切っている。５×５ｍの隅丸方形竪穴住居址で主軸はＮ 16°Ｗ と推定される。覆土は黒褐色砂土であったが、表土から検出面まで浅く覆土中に撹乱があり、中世から現代の陶器片が入っていた。壁高は20～35㎝あり下部は比較的急に立ちあがる。上部の傾斜が緩いのは砂質土の為に崩れたと考えられる。床面は土質が軟らかく締っていない。主柱穴は４本であり、不整円形で直径30～40㎝とやや小形である。穴の深さは40～60㎝でP_4 がやや浅い。炉址は確認できなかったが、北側主柱穴間中央床面に炭の散布が見られ、やや凹んでいた。焼土の確認はできなかったが、位置から炉址と推測される。周溝はほぼ全周し、深さは３～９㎝であった。

遺物は土師器壷・甕・高坏・坏・鉢・須恵器壷、石器は打製石斧・有肩扇状形石器・砥石が出土している。土師器壷には精製と粗製があり、甕は粗製のみである。大形の甕には内外に刷痕が残っている。高坏には精製と粗製があり、第2図4は精製で、坏部に凸帯の稜が付き脚部が八の字に開く。坏部内外に暗文があり脚部は箆ミガキがなされる。 6 は粗製で坏部がやや外反し、脚部は細く下部が平らに折れ、箆ミガキは施されていない。器台７は４孔で脚部は八の字に開く。鉢形土器（第１図９）は精製で粘土も良く薄く仕上げられており、内外面に箆ミガキされており、内面に暗文が施されている。坏は３個体あり、内面に箆ミガキがあるが成形は雑である。須恵器壷は胴上部片だけであり、全体形が確認できない。有肩扇状形石器の刃部にはロー状光沢がある。器台及び有肩扇状形石器は４号住居址に属する可能性が強い。

時期は出土土器から古墳時代前期から後期への移行期に位置づけられ、須恵器が当地方へ伝えられた頃と判断される。また、地床炉と判断され、カマド出現前の段階であり、土師器の時代と一致した様相がうかがえる。

（佐々木嘉和）



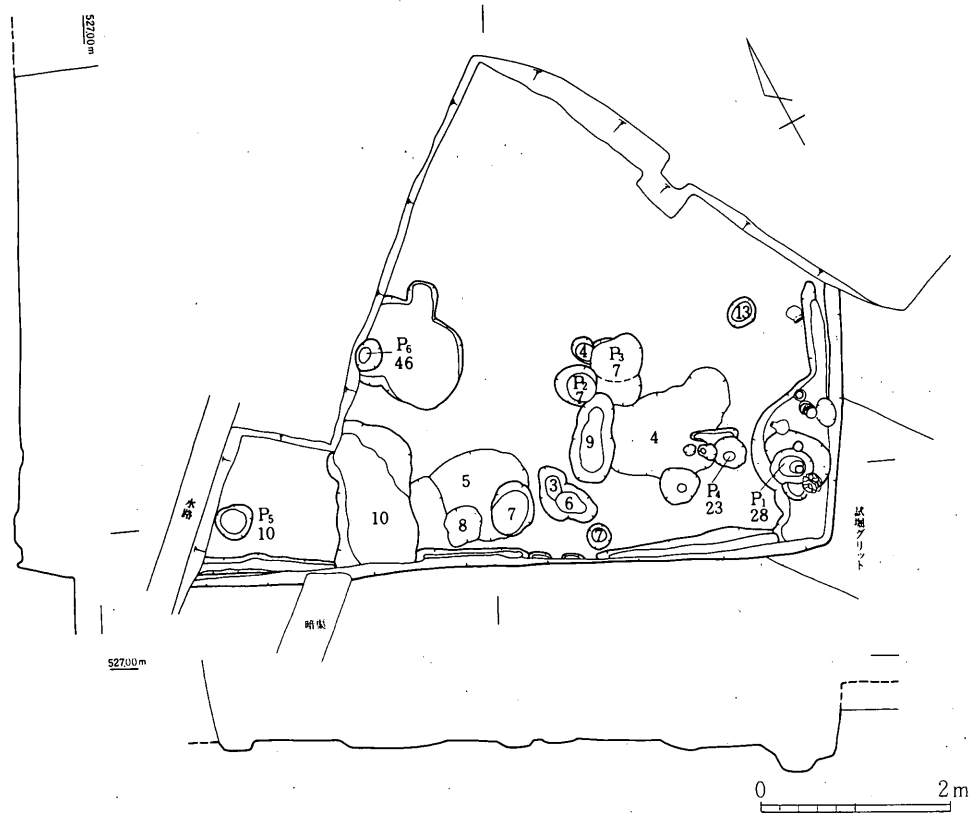
挿図５　MRY　１号住居址

②　２号住居址（挿図６、第２・３・６図）

Ｃ区調査範囲の西側ＣＪ49グリットを中心に検出した。１号・４号住居址の北西に位置し、暗渠排水が覆土中に存在した。北側が調査範囲外となるため規模は不明であるが全体の1/4 程が調査できたと思われ、方形竪穴住居址と考えられる。南東壁 2.7 m南西壁 6.8 mを確認し両壁ともさらに調査範囲外へ延びている。カマド等が未確認のため確実でないが、確認した南西壁の中程壁下に入口施設と考えられる部分があり、南西壁一辺は 7.6 m程を測り、主軸方向はＮ 26°Ｅ を示しているものと判断される。覆土はほとんどが砂質の暗褐色土で、漆黒色土が壁面から床面上に添って認められるレンズ状の堆積を成している。南隅を中心に炭化材が出土し火事の住居址である。壁は深さ50～60㎝を測り、垂直に立ち上がる。隅の部分も直角に検出され当時の掘り込みを状態良く残している。周溝は壁直下に確認され深さ２～16㎝を測る。床面は砂質土中に造られているためきわめて軟弱である。住居址内に検出した穴は P_6 を除いて浅く精査したが主柱穴は確認できなかった。本址に伴う穴として南隅の周溝が幅広くなった部分に確認された深さ28㎝を測るものがある。本址より出土した完形品のうち甕１個を除いてすべてこの穴からで、坏４個は

重なったままの状態で出土した。また長さ40㎝・幅11㎝・厚さ10㎝のカマボコ状の黄色粘土も出土しているが焼かれたものではなく用途は不明である。南西壁下のほぼ中央に確認された深さ5㎝の凹み部は周囲に2・3㎝の低いが土手状の高まりが認められ入口施設と考えられる。

遺物の出土量は多い。土師器甕4個のうち第2図8と9は完形品で前者はヘラミガキ後者はナデ整形で仕上げられ、両者とも外面にススが付着している。10は二次焼成を受け外面が剥離しており、口縁部で¼残存している。13は½残存する底部でリング状の粘土をはり付けて底部を作っている。いずれも胎土中に小石粒、雲母を含み焼成は良好で、色調は薄い茶色を呈している。壷は2点ある。11はいわゆる坩型の完形品でヘラミガキにより仕上げられ胎土中に小石粒を含み雲母が混入する。焼成は良好で色調は茶色を呈している。12は有段口縁の頸部で¼残存する。小石粒を含み、薄い橙色を呈するもので軟らかい土器である。14は**埦**の完形品で口縁部をつまみ上げている。底部にクシ状工具の調整痕を残しナデ整形である。焼成は良好、色調は茶色を呈し、胎土中に石粒、小石粒、雲母が含まれている。坏は5点ありみな完形品である。第3図3は底部をクシ



挿図6　MRY　2号住居址

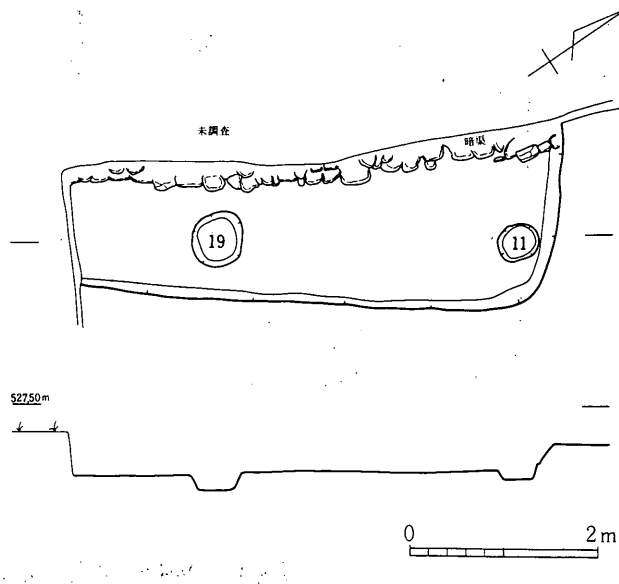
状工具で調整し口縁部に稜を持つ。5は底部をヘラ調整し短く外反する口縁部で内面に暗文が施されている。3・5とも胎土中に小石粒・雲母を含み焼成は良好、色調は明るい茶色を呈している。4は器高が低く口縁部に稜を持ち端部を丸く仕上げ内面に暗文を施す。胎土中に小石粒、雲母が混入し焼成は良好、色調は茶色である。1はヘラミガキ整形で胎土中に小石粒を含み色調は薄い橙色を呈する。2は明るい茶色の色調を呈している。1・2とも焼成は普通であるが1は器壁の厚さが均一でなく2は胎土中に石粒が多量に混入しほかの坏に比べ粗い造りのものである。9は須恵器**瑞**の模倣品で頸部中程に稜を持ち暗文を施している。胎土中に小石粒、雲母を含み色調は茶色である。高坏は3点あり8は⅙残存する坏部で、胎土中に石粒、小石粒を含み焼成は良好である。6の坏部は内外面とも暗文が施され微小石粒を含む7の脚部と同一個体の可能性があるが坏部に含まれない赤粒が認められるため別個体とした。高坏はみな薄い茶色の色調で焼成は良好である。須恵器には¼残存する**瑞**(10)が1点あるのみで破片すら出土しなかった。頸部に稜が二段あり稜の下部を細かな波状文で埋めている。肩部に有孔を持ち浅い沈線と波状文が見られる。胎土中に黒粒を含み、焼成は良好、色調は灰色を呈している。石器として砥石5点があり12は両面に突孔痕があるが破損し貫通していない。ほかの4点は自然石をそのまま利用したもので図化しなかった2点は編み物石状のものである。ほかに臼玉1点と鎌と思われる鉄器1点がある。また第2図14の**埦**内の土に炭化米1粒が残っていた。

出土土師器及び須恵器から1号住居址と同時期かそれに続く位の古墳時代前期から後期への移行期と考えられる。（佐合英治）

③　3号住居址

（挿図7）

C区調査範囲の西隅CD96を中心に検出した。西側は調査範囲外となり調査地の境で暗渠排水に切られている。北西側がほとんど用地外となるため全体規模は不明の隅丸方形竪穴住居址である。確認した壁は北東1.7ｍ南東4.8ｍを測り、南東壁方向軸N38°Eを示す。



挿図7　MRY　3号住居址

覆土は砂質の暗褐色土の一層で堆積層は把握できなかった。壁面は比較的ゆるやかに立ち上がり25cmを測る。床面はいわゆるタタキ状の面は確認されず砂利混りの砂土層が露出した。主柱穴、周溝等は確認されず、検出した穴も浅く遺物の出土もないため本住居址に伴なう施設であるかも不明である。

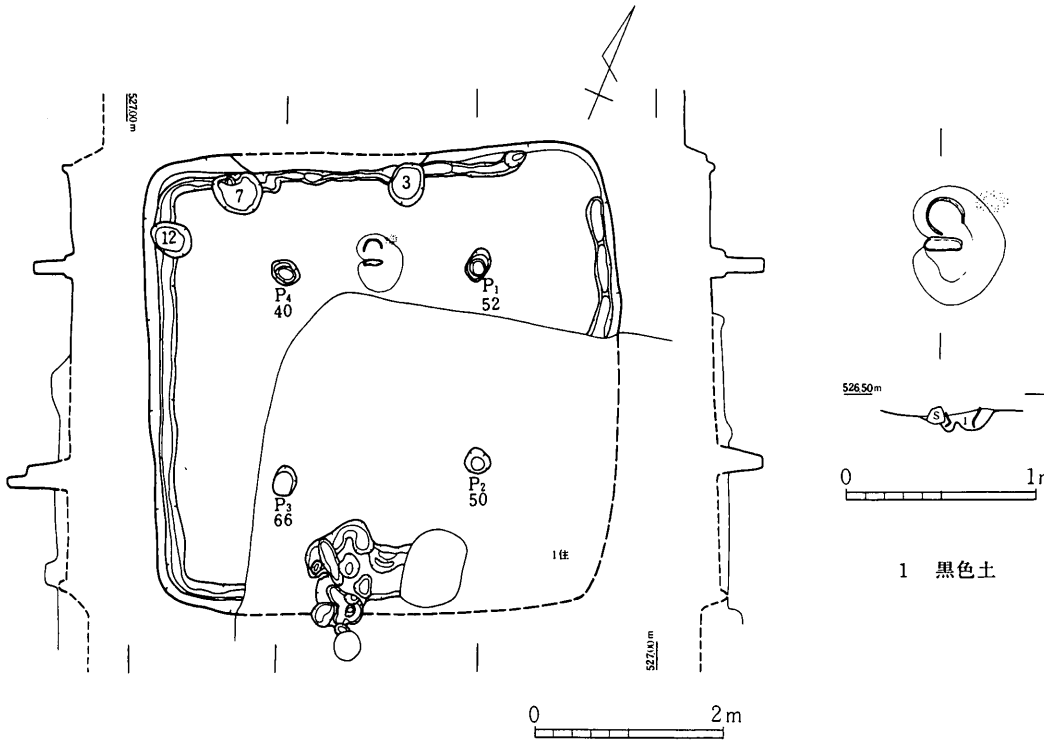
遺物の出土量はきわめて少ない。図化できない小破片が数点のみで土師器片のほか陶器、磁器片もある。

時期は遺物から判断できないが確認された周囲の遺構、住居址形態から考えると古墳時代と思われるが確証は得られなかった。

（佐合英治）

④　4号住居址（挿図8、第4・11図）

CJ97を中心に検出した。東側約½を1号住居址に切られるため確認できない部分があるが、



挿図8　MRY　4号住居址

推定5.0×4.8mの隅丸方形の竪穴住居址で主軸方向はN24°Wを示す。壁は13cmで比較的急角度に掘られており、北隅をのぞく壁直下に幅8～20cm・深さ1～9cmのU字形に掘られた周溝が確認された。北東の周溝は小さな穴を伴なっている。床面は1号住居址に切られた部分以外は、良好な貼床がなされていた。柱穴は4個を確認、うち2個は1号住居址の床下から検出した。4個いずれも長径30cm前後の楕円形でP_2を除いてはすべて二段の掘り込みになっており、最深部は床面から40～60cmを測る。炉はP_1とP_4のほぼ中間部やや壁よりにあり、甕上部½を逆位に埋めた土器中にも、周辺にも焼土はみとめられなかった。1号住居址に切られた東南の壁と考えられる部分中央部で、1号住居址の床下に不整形の落ち込みがあり、入口施設と考えられる。

出土遺物としては、炉に使用されていた甕（第11図12）の他内外面ヘラみがきを施した甕の胴部やS字状口縁を持つ台付甕の口縁部（第4図2）と脚部（同3）、土師器甕の口縁部、土師器の手づくね（同4）、有抉打製石庖丁2点が出土している。また1号住居址内から出土した遺物中にも本址に関連するものがある可能性も強い。

時期は弥生時代終末ないし古墳時代前期初頭に位置づけられ後者に属する可能性が強い。

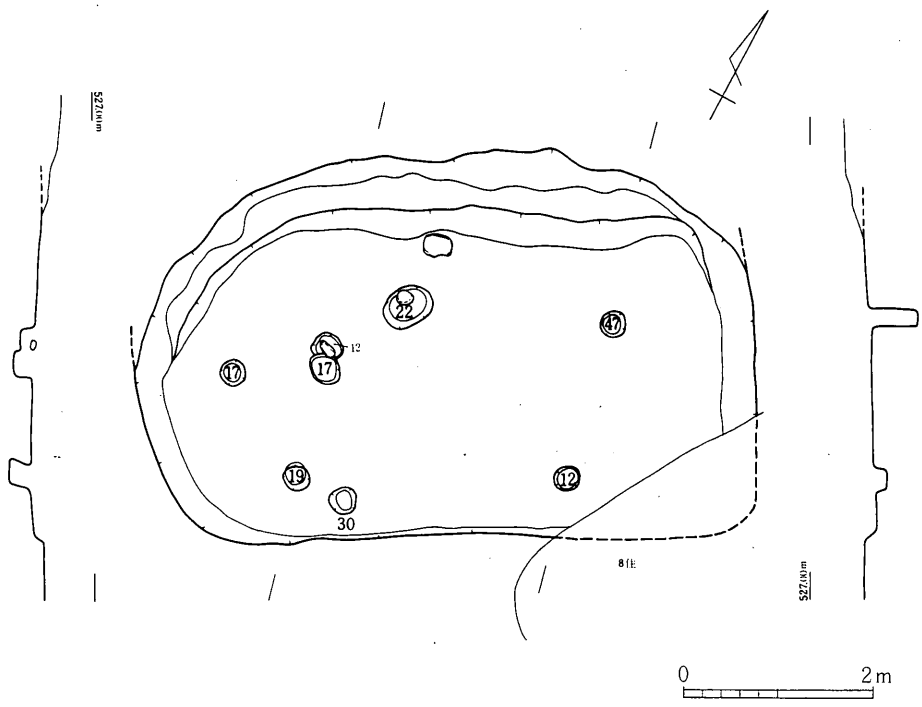
（吉川　豊）

⑤　5号住居址（挿図9、第6図）

CO99を中心に8号住居址に切られ、1・6号住居址に隣接して検出された。全体が調査されたが、二度にわたる調査の結果、検出状況に差がある。平面プランは不鮮明であるが、不整隅円方形を呈すると思われる竪穴住居址で、規模6.5×（4.0）mを測る。しかし東西方向の規模が著しく短く、両壁の検出状況に疑問が残る。主軸方向は不明であるが長軸方向に関してはN62°Eを示す。検出面から床までは浅く、壁はだらだらと落ち込み、壁から床にかけ全体を叩いている。周溝は検出されず、また本址に付属する小穴8ケのいずれが主検穴であるか特定することは困難であった。炉址や入口施設等に関しても不明である。覆土はほとんど単一の黒色砂土で全体がかなり柔かい。遺物は古墳時代前期のものがほとんどであるが、陶磁器がわずかに出土している。

本居址出土遺物は図示できるものはなく、S字状口縁の台付甕の他、土師器甕・坏・高坏・器台の破片、鉄製品（第6図10・11）等少量の遺物がある。

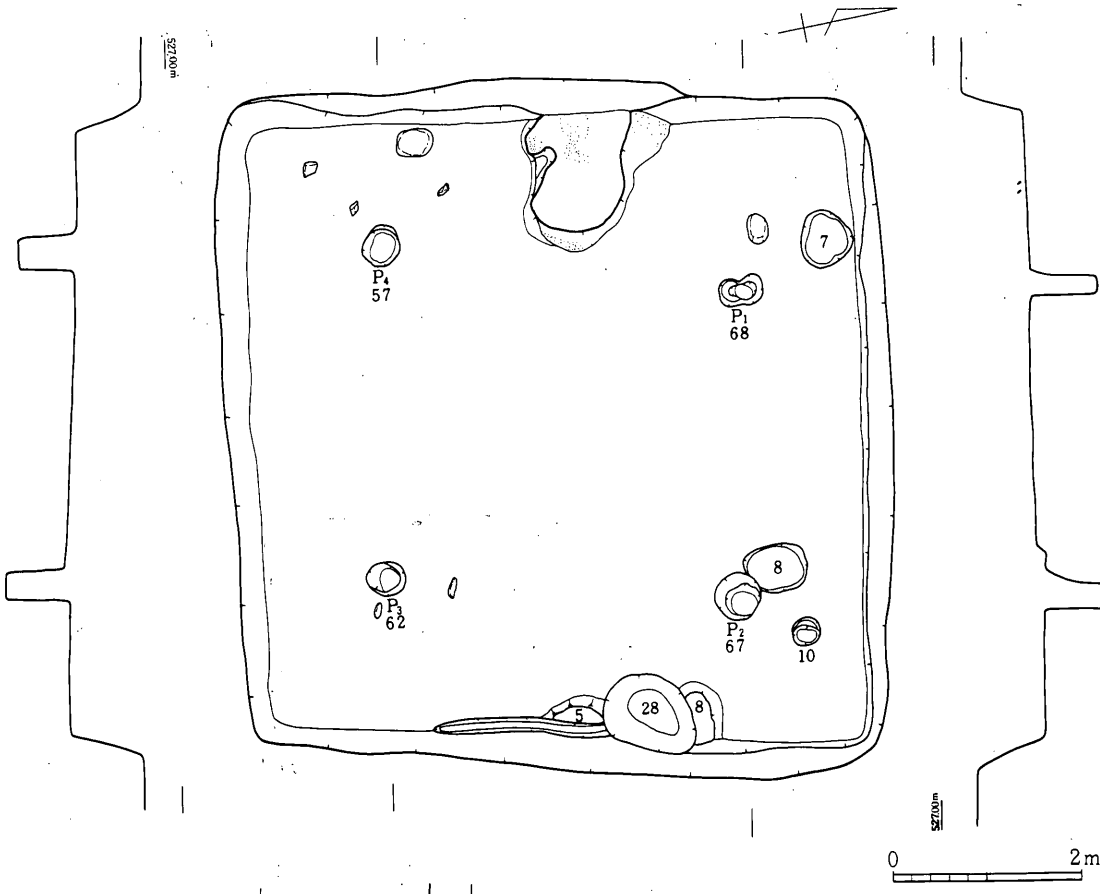
覆土の状況から比較的新しい時代の遺構と考えられ、出土遺物の大半は古墳時代のものであるが、当地方他遺跡の調査例に長方形で浅い掘り込みの中世に属する遺構が類例としてあり、断定はできないが本址も中世に属する可能性がある。

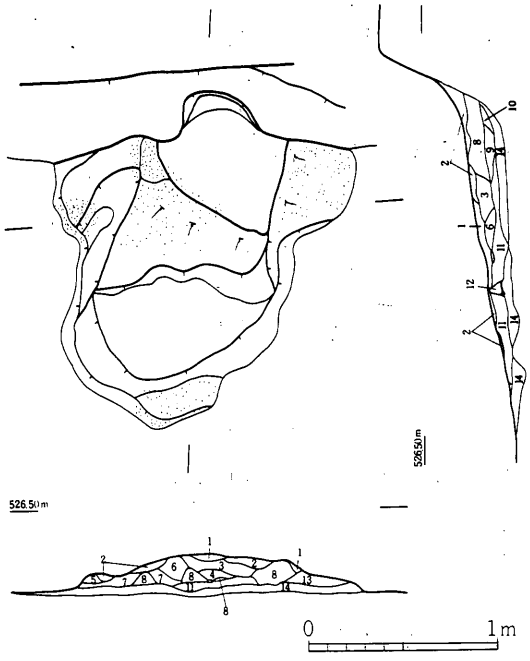


挿図9　MRY　5号住居址

⑥　6号住居址（挿図10、第4～6図）

ＣＱ97を中心に、7号住居址を切り、5・8号住居址と近接して確認され、全体を調査した。隅丸方形を呈する規模6.9×7.0ｍの大型の竪穴住居地で、主軸方向Ｎ78.8°Ｗを示す。床面は全体的に柔らかく掘り方を確認したのみで貼り床等本来の床面は一部確認したのみである。なお、カマド断面から灰褐色砂利層まで掘り込んだ後黒色砂礫土の貼り床がなされたことが判明した。壁高は検出面から60～70㎝を測り、急に立ち上がる。北壁中央は図上ではややなだらかになっているが、掘りすぎによるもので本来急な立ち上がりを示す。周溝は貼り床での確認ができず掘りすぎたため、東壁中央壁下のみ検出したにとどまるが、幅15㎝程のものがほぼ全周していたと考えられる。主柱穴はP_1～$_4$の4本で柱掘り方は径40～50㎝の円形を呈し、深さ57～68㎝を測る。東壁中央やや北寄りには深さ約30㎝の楕円形の穴が掘り込まれ、さらに土手状縁部が検出され入口施設にあたると思われる。西壁中央に位置するカマドの原形は不明であるが、壁の中程以下に焼土・粘土があり、石を用いない粘土カマドと考えられる。左袖に土師器甕・高坏片等が敷かれており、カマドを修復したものと考えられる。西壁を幅40㎝、奥行20㎝掘り込んで煙道が確認された。南西隅付近に高坏・甕等が集中しており、また壁際に粘土塊が残されていた。南東隅から砥石・高坏脚部が、北壁下やや西寄りから鉄鎌が出土した。また入口部穴内に土師器甕片の他7号住居址から打製石庖丁が落ち込んでいた。



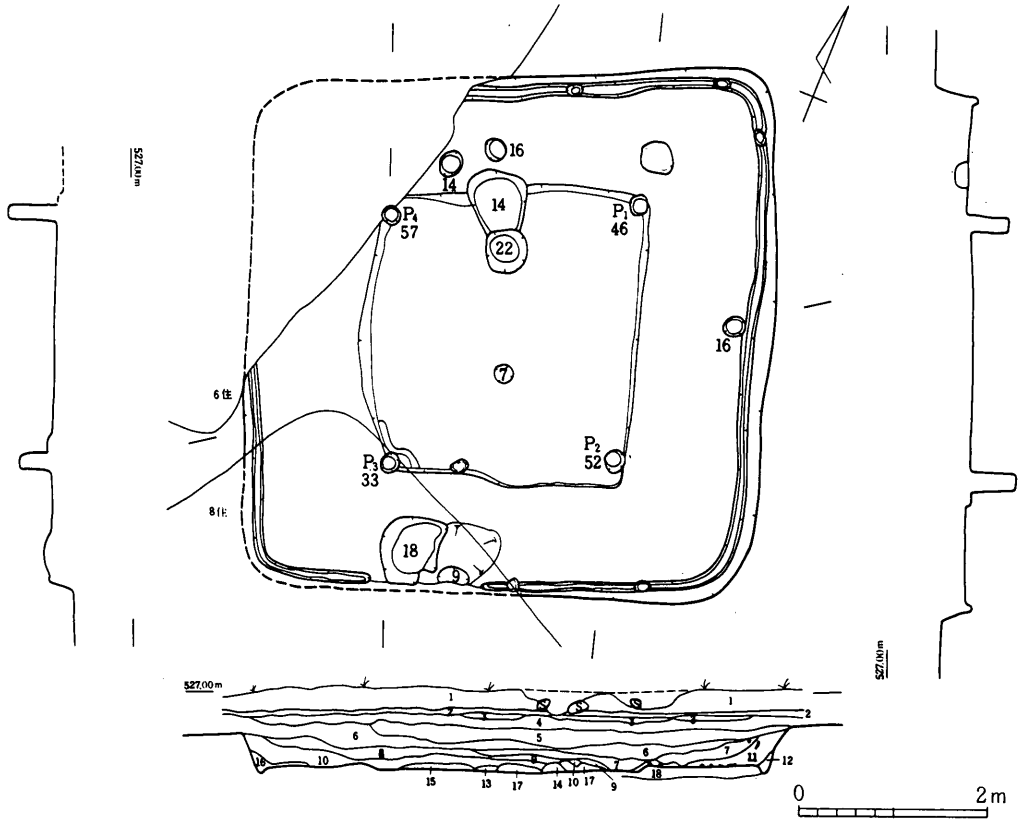


1　暗褐色土
2　黒色土
3　黒褐色土(焼土混じり)
4　黒色砂質土
5　黄褐色粘質土
6　暗褐色土(焼土混じり)
7　暗黄褐色土
8　黄褐色粘質土
9　暗褐色砂礫土
10　黒褐色砂質土
11　褐色土
12　褐色粘質土
13　黒褐色土
14　黒色砂礫土

挿図10　MRY　6号住居址

本住居址出土遺物には、土師器壷・坩・甕・坏・台付甕・高坏、砥石、鉄鎌の他、覆土上層遺物として、須恵器**碗**・土師器高坏脚、中近世の陶磁器片、チャート製石鏃、打製石庖丁等がある。第4図12の坩は横ナデの後縦位の細かい箆ミガキが施される。13は箆ケズリで整形後ナデが施されている。6は口縁部に横ナデ、以下クシ状工具による調整が施される。口縁部にススが付着し内面に接合痕を残している。第5図1はクシ状工具による整形後ナデが施され、脚内部にハケ調整痕を顕著に残す。3・5・6・9には箆ミガキが施される。

出土遺物及び初源期と考えられるカマドの存在等から本住居址は古墳時代後期前半に位置づけられる。



1	灰黒色土(表土)	7	暗褐色土(炭混じり)	13	暗黄褐色土
2	褐色砂礫混じり土	8	暗褐色土	14	黒色土
3	黒褐色砂礫混じり土	9	褐色土(炭・白色岩片混じり)	15	暗褐色土(炭・白色岩片混じり)
4	黒色土	10	黒褐色土(炭混じり)	16	黒色土(炭混じり)
5	灰褐色土	11	褐色土(炭・焼土混じり)	17	焼土
6	褐色土	12	灰黒色の砂質土	18	貼床

挿図11　MRY　7号住居址

⑦　7号住居址（挿図11、第5図）

ＣＳ99を中心に、6・8号住居址に切られて検出され、全体を調査した。規模5.4×5.5ｍの隅丸方形を呈する竪穴住居址で、主軸方向Ｎ20°Ｗである。堅いたたき状の貼り床で、壁から100～120㎝内側でさらに10㎝程深く方形に凹むが、東壁側は若干浅い。黒褐色砂質土まで全体を掘り込んだ後、厚さ10㎝程の床が貼られている。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高はおよそ40㎝を測る。壁下に幅10㎝程度の周溝が設けられ、内部に4個の小穴が確認された。配置に規則性は見出せず、さらに複数個の小穴があった可能性もある。周溝埋土は黒色の細かい土である。主柱穴は方形凹み部の四隅に掘り込まれており、径約20㎝、深さは33～57㎝である。P_3の周辺が若干凹んでいる。東壁中央やや南寄りに二段構造状の穴が確認され、土手状縁部が存在したかどうかは8号住居址との重複関係のため不明であるが、入口施設と考えられる。中央西壁に寄った位置に不整円形を呈する2個の穴があり、双方とも焼土は検出されなかったが、位置等から地床炉と考えられる。この北側床面より壷底部・高坏の他偏平な台石が、また中央凹部から甕・高坏々部が出土している。

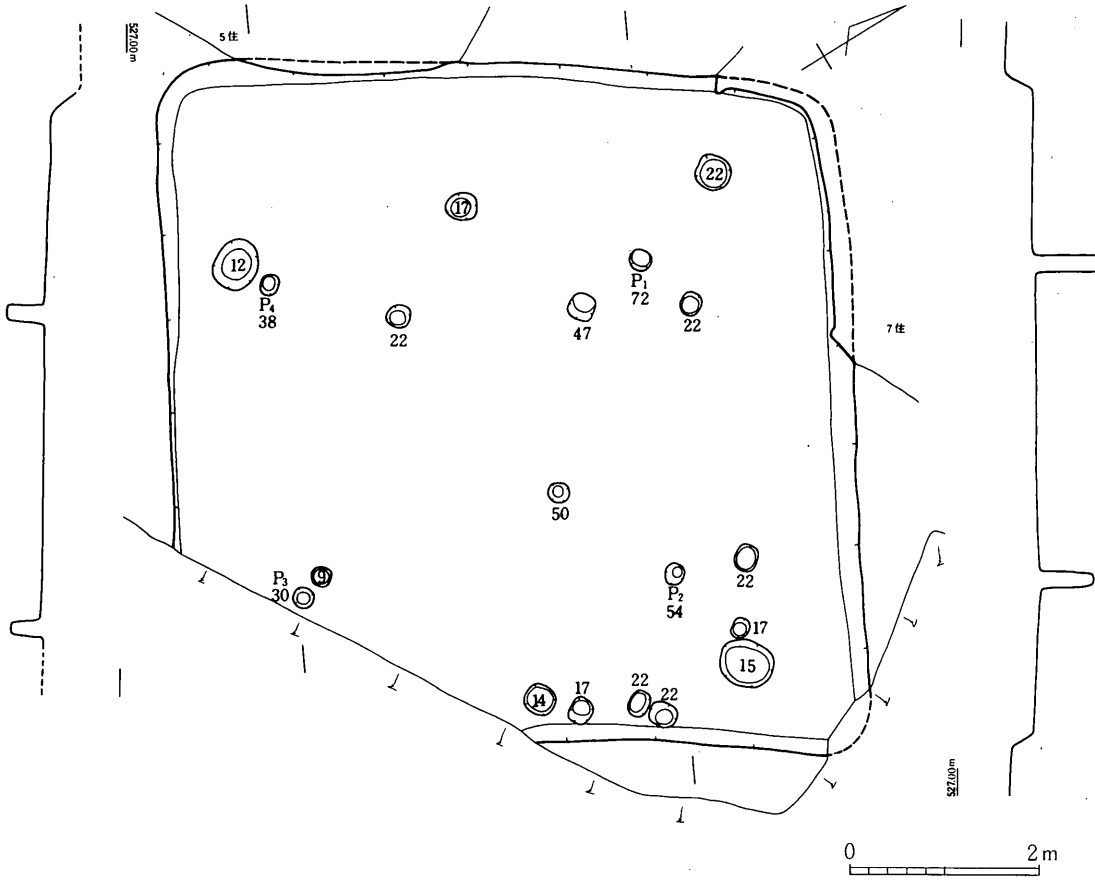
本址出土遺物には土師器壷・甕・高坏の他、縄文土器片、弥生土器壷・甕、打製石庖丁、灰釉碗底部片、中世陶器小片等が出土している。第5図12は外面にハケ調整が施される。13は外面に荒い箆ミガキが認められる。15は底部に調整痕を残し、内面が剥離している。甕16は外面に箆ミガキが施される。

本址出土遺物には他時期の混入品はあるが、弥生時代後期的な住居址形態や、出土遺物の総体的な状況から弥生時代から古墳時代への移行期に属するといえる。

⑧　8号住居址（挿図12）

ＣＲ102を中心に、5・7号住居址を切り、6号住居址と隣接して検出された。プランは不明瞭であったが、東辺両隅の一部を除いてほぼ全体を調査した。規模7.3×7.1ｍの不整隅丸方形を呈する大型の竪穴住居址で、主軸方向は不明であるが、長軸はＮ34.5°Ｅを示す。6号住居址と同様床面は柔らかく、灰褐色砂利層まで掘り込んだ後、黒色砂礫土の貼り床がなされている。壁高は検出面から8～37㎝を測るが、床面レベルでは高低差はさほどでなく、わずかに東壁側にゆるやかに傾斜している。壁体はあまりしっかりしておらず、ややゆるやかに立ち上がる。主柱穴はP_1～$_4$の4本で、径約20㎝の円形を呈し、深さは30～70㎝を測る。柱穴埋土は黒色土ないし暗黄褐色砂質土である。土師器甕小片の他、縄文時代後期浅鉢小破片が混入出土した。

時期は出土遺物等から古墳時代前期終末から後期初頭が考えられるが、炉址・カマドが確認されておらず、出土遺物もきわめて少なくかつ小破片であり、詳細時期は不明である。



挿図12　MRY　8号住居址

2) 土　坑

① 土坑59（挿図13）

土坑61の南東に検出された。規模125×110㎝の不整円形を呈する土坑で深さ40㎝を測る。壁はやや急に立ち上がり、断面逆台形の掘り方である。

土師器甕等が出土しているが、いずれも小破片で、詳細時期は不明である。

② 土坑60（挿図14）

1号住居址を切って検出された。規模140×110㎝で不整方形を呈し、深さ21㎝を測る。壁はややゆるやかな立ち上がりを示し、断面逆台形を呈する。

1号住居址北側の中世と考えられるたたき状の面を切っており、中世以降の時期が考えられるが、詳細時期は不明である。

③ 土坑61（挿図13）

柱穴に切られて確認された。確認した一辺は330㎝、深さ116㎝を測るが、調査の結果いわゆるローム マウンドであることが判明し、完掘しなかった。縄文時代晩期の条痕文土器片、土師器甕片等が出土している。

④ 土坑62（挿図13）

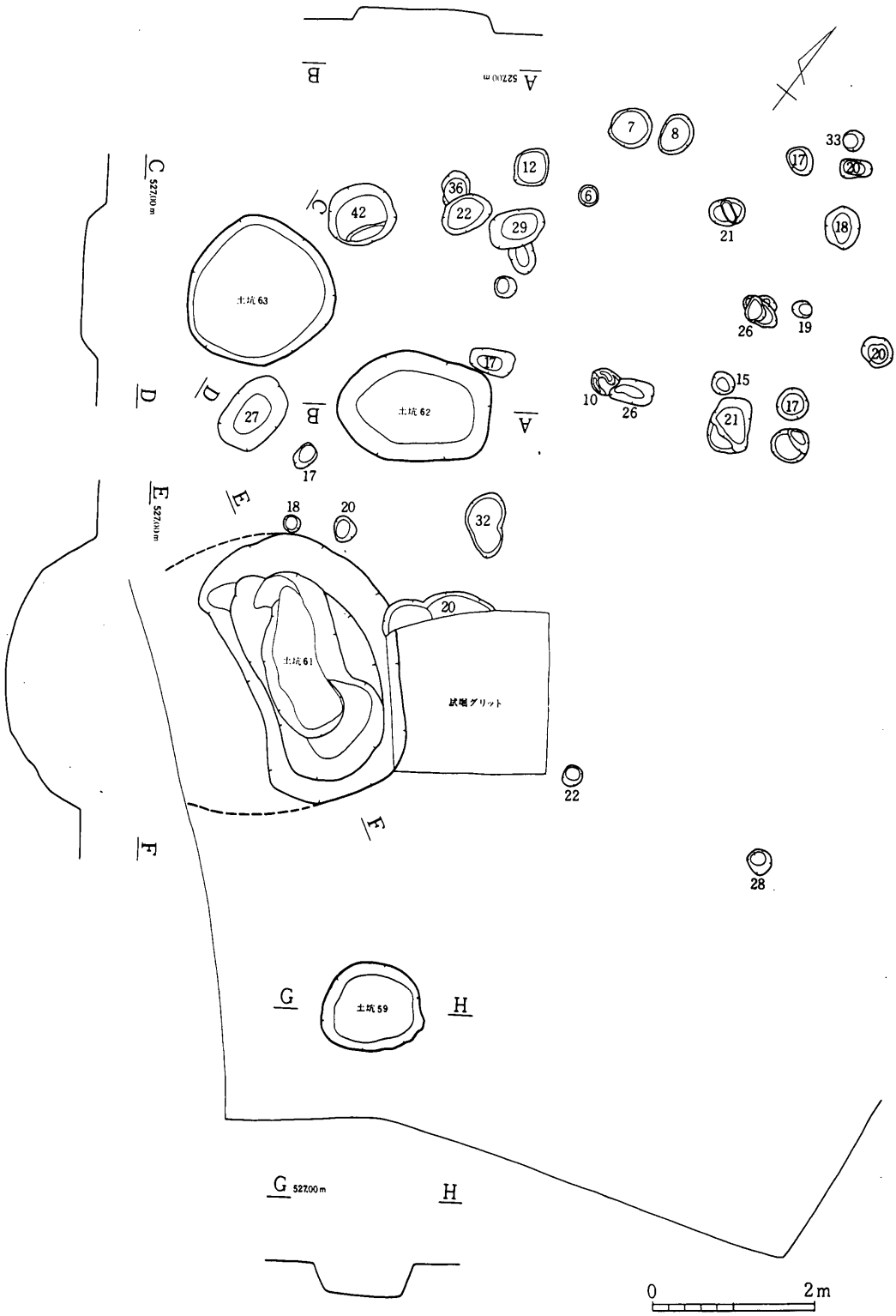
土坑61の北側で検出された。190×135㎝の平面舟形を呈する土坑で、主軸方向N 54.5° Eを示す。深さ27㎝を測り、断面逆台形をなす。詳細時期は不明である。

⑤ 土坑63（挿図13）

土坑62の西側で確認された不整円形を呈する土坑である。規模180×175㎝、深さ21㎝を測り断面逆台形で壁はゆるやかに立ち上がる。本址の時期決定は困難である。

3) 柱　穴　（挿図13）

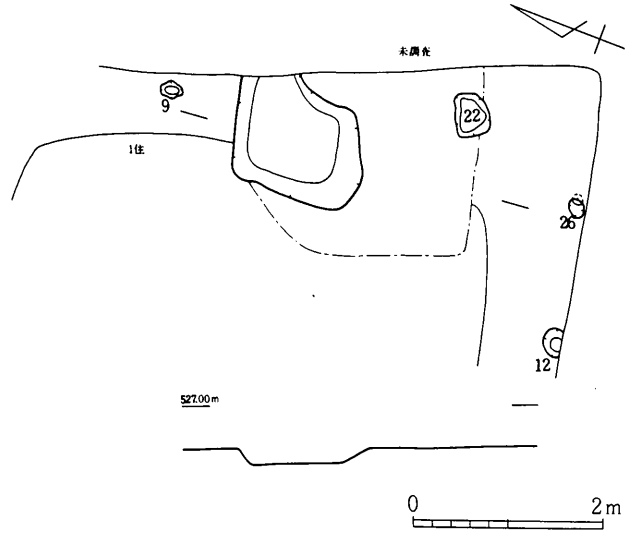
1～4号住居址の南側に隣接して径20～40㎝程度、深さ10～30㎝の柱穴が検出された。殊にCF96、CH96・97付近に集中がみられ、中に平面形・埋土等が類似するものがあることから、掘立柱建物址などの何らかの施設を構成した可能性もある。いずれの柱穴からも遺物は出土しておらず、詳細時期等不明である。　（馬場保之）



挿図13　MRY　C区土坑59・61・62・63，柱穴平面図

4） 暗渠排水（挿図４）

C区調査範囲の西側ＣＣ95～ＣＫ93グリットに検出した。２号・３号住居址を切る。北東・南西方向に長さ16ｍを確認した。現在の畑と水田の境にある用水路にそって曲がっており、南西に向かって傾斜している。用地外にかかるため調査できたのは８ｍ程である。幅45㎝、深さ20～30㎝の掘り方内に径20～30㎝程の花崗岩自然石を２列にていねいに並べ割石を蓋石にしている。側面及び上部を小拳ほどの石で補強しているが粘土は確かめられない。暗渠内の覆土は泥と砂が層を成していた。



挿図14　MRY　C区土坑60

本址の時期を決定する遺物の出土はなかったが現在の田畑の用地境にほぼそって造られており近世から現代までに位置付けられるが詳細時期は不明である。　（佐合英治）

5） そ の 他

① 焼土散布地

１号住居址の南東側約２ｍ離れた暗褐色土中に径50㎝位の範囲に厚さ５㎝程の焼土が検出されその周囲に径２㎝程の範囲に焼土粒の散布する場所があり、住居址等の遺構が存在すると予想された。遺構検出時に山茶碗の約⅔個体の出土があり遺構の把握に努めたが、竪穴住居址等の把握はできなかった。西側に隣接して検出された柱穴群となんらかの関連を持つ中世の生活面があったと判断される。

出土遺物は遺構検出時に出土した山茶碗１点（第８図14）があり、他は縄文時代晩期・古墳時代後期土師器の小破片のみで、山茶碗により時代が特定される。山茶碗の胎土は良好であるが焼成は悪い。糸切底部に高台を貼った痕跡があるが、高台はすべて剥落している。

② たたき状生活面

1号住居址の上部及び東側に、竪穴住居址の床面にみられるような硬い面が連続し、中世陶磁器の小破片が出土した。全体が砂層中にあり、硬い面の把握可能な部分も断続的であり、具体的な性格の特定はできなかった。先記焼土散布地同様に中世の生活面の一画であると判断され、更に推測すれば、礎石建物などに関連する土間部分である可能性も強い。（小林正春）

3．D　区

1) その他（挿図4）

D区はC・E区が微高地状になっているのに対し、低く凹んでおり、旧流路にあたるためか水はけが極めて悪い。このため、明治・大正年間には幾度かにわたって暗渠排水が敷設されたようであり、試掘調査の結果一部が検出された。

DK99では暗渠排水の屈折部が確認され、東及び南側へ伸びている。表土から第三層目の黒色土を掘り込んでおり、構造的には溝状に掘り凹めた両側に扁平な小児頭大の河原石を立て、上部に同様の石を架けてさらにこの上を拳大の円礫で敷きつめている。また暗渠上部の旧耕作土の上に、厚さ65cmの近年の造成に伴なう盛土が確認された。

DC・DP 104付近は地表に若干の遺物の散布が認められたが、調査区東側の日本道路公団アパート建設時に削平された土砂が盛土されたとのことで、試掘結果でも1m以上に及ぶ盛土が確認された。

D区からは弥生時代後期から近世にかけての遺物が少量出土した（第6図13）が、関連する遺構等は検出されなかった。

C区・E区にはさまれた凹地状であり、本来湿地と考えられ、弥生時代以降水田として利用されていた地区である可能性が強い。（馬場保之）

4．E　区

1）土　坑

①　土坑１（挿図15、第７図）

土坑９の北東で検出された。規模 120×70㎝、長軸方向N 15.8°E を示す楕円形の土坑である。検出面からの壁高は22㎝でゆるやかな立ち上がりを示し、底はほぼ平坦である。本址からの遺物出土はやや多く、弥生土器甕片（第７図１）、土師器壷口縁部４片・底部１の他壷片が多い。

出土遺物等から弥生時代後期ないし古墳時代前期に比定される。

②　土坑２（挿図15、第７図）

土坑９の南側で確認された不整楕円形の土坑である。規模 120×75㎝、深さ34㎝、長軸方向N 64°W を示す。内部は一段深くなっており、ややゆるやかに立ち上がる。土師器壷（第７図２）甕（同３）の他壷・甕の小破片が多いが、他に弥生の壷１片も出土している。

出土遺物等から古墳時代前期に比定される。

③　土坑３（挿図15、第７図）

土坑２の南側で検出された。規模55×50㎝の不整円形を呈する土坑で、深さ14㎝を測る。内部で一段低く凹んでおり、壁はゆるやかに立ち上がっている。土師器壷底部（第７図４）の他遺物は少なく、詳細時期は不明である。

④　土坑４（挿図15）

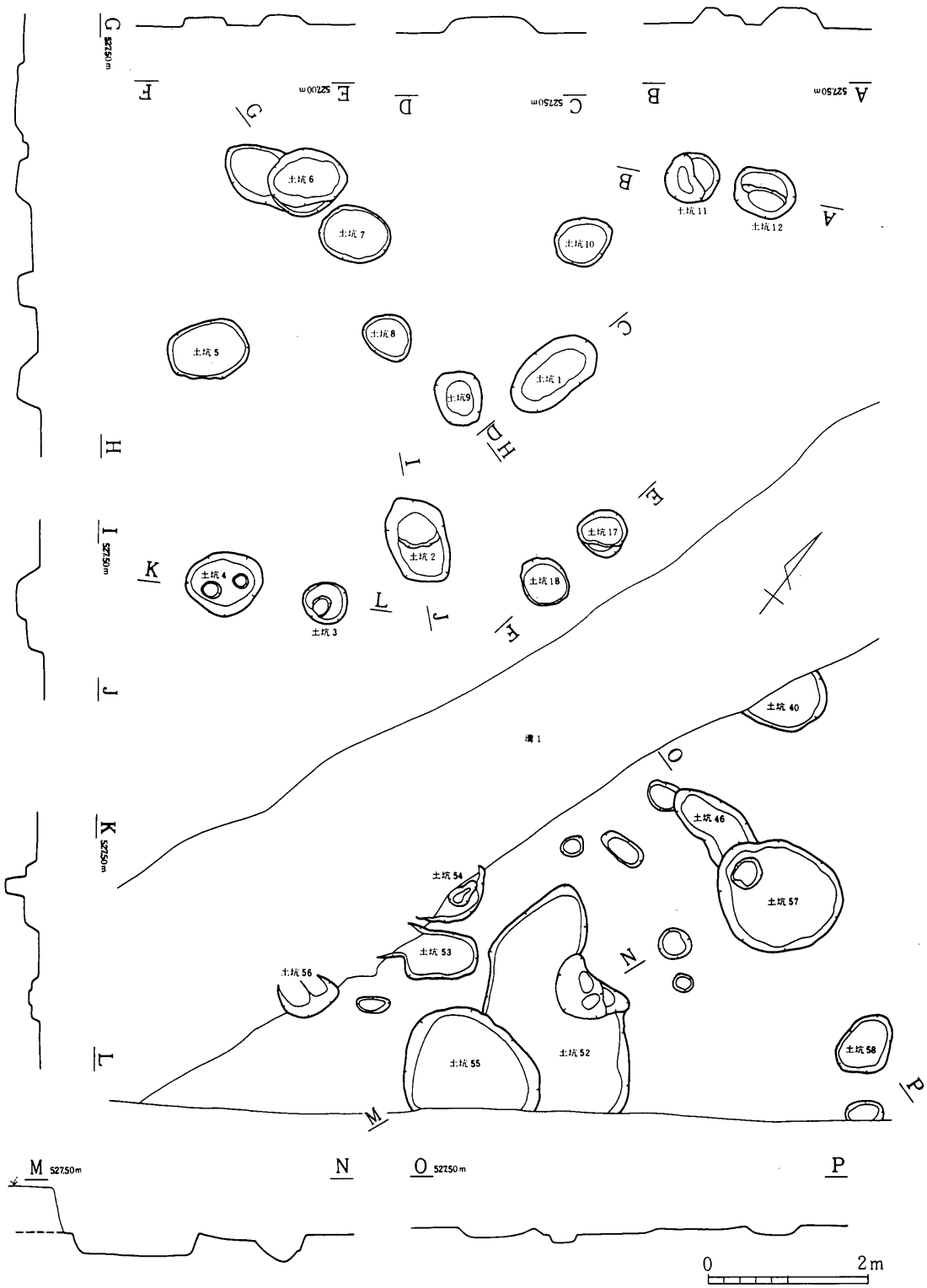
土坑３の南西で確認された規模95×80㎝の不整楕円形を呈する土坑である。土坑内に２つの小穴が掘り込まれており、径約20㎝で深さは38・55㎝を測る。出土遺物は少なく、時期決定は困難である。

⑤　土坑５（挿図15）

土坑８の南西側で検出された。規模 100×70㎝の不整楕円形を呈する土坑で、深さは６㎝を測る。壁はゆるやかに立ち上がり、また底部はほぼ平坦である。坑内から土師器甕小片・内黒の坏等少量の遺物が出土しており、古墳時代後期に比定される。

⑥　土坑６（挿図15）

規模 155×85㎝の不整楕円形を呈する土坑であり、深さ13～15㎝を測る。壁はゆるやかな立ち



挿図15　MRY　E区土坑1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12・17・18・40・46・52・53・54・55・56・57・58，柱穴平面図

上がりを示し、東側はやや低く凹んでいる。底の状態から二つの土坑が切り合っている可能性がある。土師器甕片等3片の出土をみたにとどまり、詳細時期は不明である。

⑦　土坑7（挿図15）

規模85×75㎝、深さ14㎝の楕円形を呈する土坑で、東側が低く凹んでおり、壁はやや急に立ち上がる。遺物出土は少なく詳細時期等不明である。

⑧　土坑8（挿図15）

規模65×55㎝、深さ27㎝の不整楕円形を呈する土坑である。急な立ち上がりを示す壁をもつ断面逆台形の土坑である。本址からは弥生土器壷片1が出土したが、詳細時期は不明である。

⑨　土坑9（挿図15）

土坑8の東側で確認された。規模75×60㎝の不整楕円形を呈する土坑で、検出面からの壁高は26㎝を測る。底部は平坦で、壁はやや急な立ち上がりを示す。弥生時代後期終末と思われる壷底部・坏片が覆土から出土しており、本址の時期も該期に比定できよう。

⑩　土坑10（挿図15）

土坑8・11の間に確認された規模75×60㎝、深さ9㎝の不整楕円形を呈する土坑である。底部は北側に向ってゆるやかに凹む。出土遺物は極めて少なく、時期は不明である。

⑪　土坑11（挿図15、第7図）

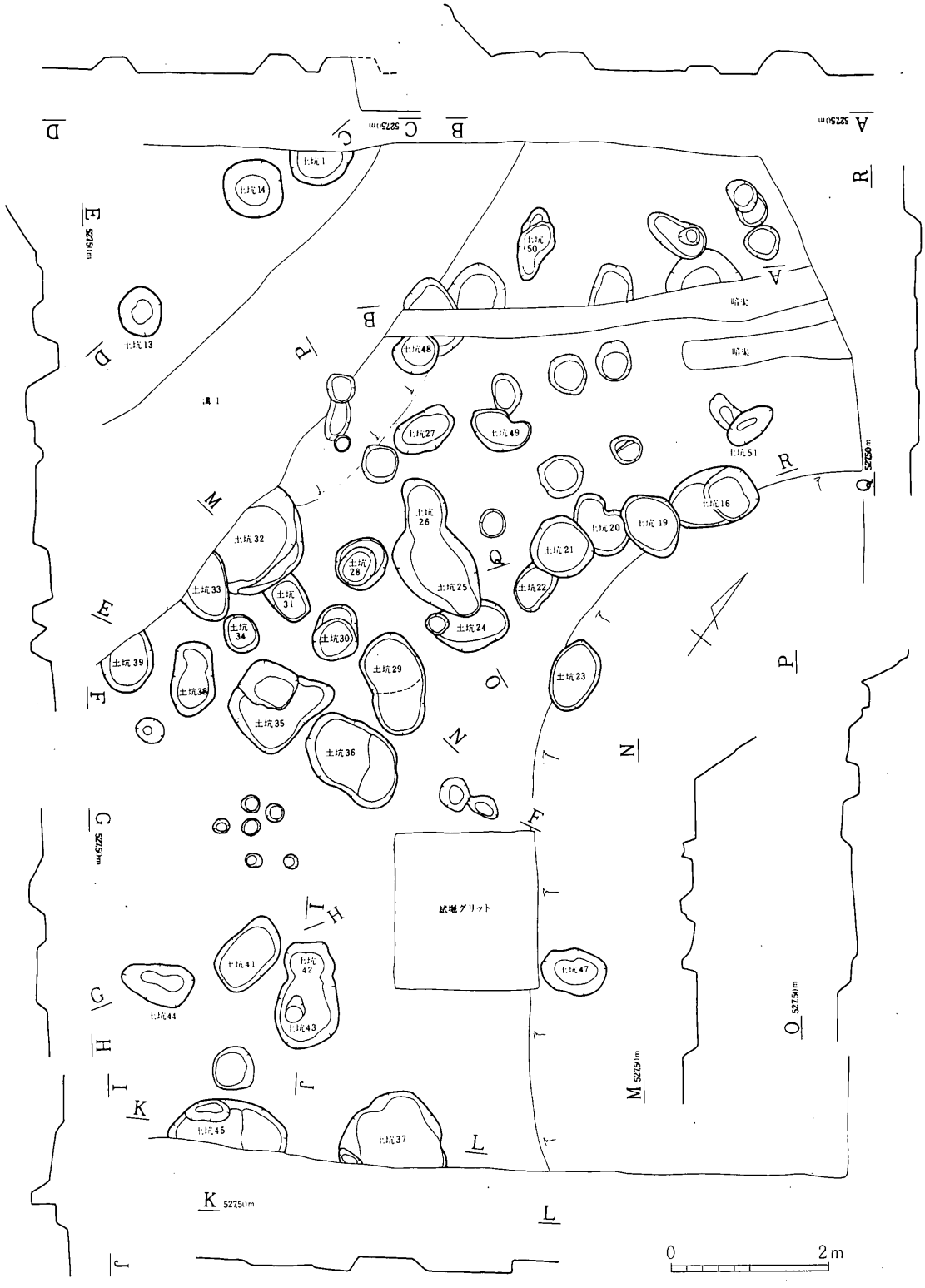
規模65×65㎝、深さ20㎝の不整円形を呈する土坑である。断面はややゆるやかな立ち上がりを示し、底部が一段低くなっている。弥生時代後期の壷胴部及び土師器壷底部（第7図5）が各1片出土しているのみで、詳細時期は不明である。

⑫　土坑12（挿図15、第7図）

土坑11の北東に検出された規模80×60㎝、深さ21㎝の土坑である。平面不整楕円形を呈し、ゆるやかに掘り凹められ、さらに底部が一段低くなっている。坑内から土師器甕口縁部片（第7図6）、弥生土器壷小破片1片が出土した他出土遺物はなく、時期は不明である。

⑬　土坑13（挿図16）

土坑12の東側で検出された。規模60×55㎝の平面不整円形で、検出面からの深さは19㎝を測る。断面形は摺鉢状を呈す。壷の他、壷・甕の小破片が多く、遺物の大半は弥生時代に属するが、詳細は不明である。



挿図16　MRY　E区土坑13・14・15・16・19・20・21・22・23・24・25・26・27・28・29・30・31・32・33・34・35・36・37・38・39・41・42・43・44・45・47・48・49・50，柱穴平面図

⑭　土坑14（挿図16）

土坑13・15の間に確認された。規模75×75㎝、深さ21㎝を測り、平面形・断面形とも土坑13に類似する。本址からは、壷片１・土師器甕片１の他小破片が出土した。

⑮　土坑15（挿図16、第７図）

土坑14の北側で検出されたが、未調査区にかかり½を調査をしたにとどまる。判明した一辺の規模は80㎝を測り、検出面からの深さ14㎝である。平面不整円形を呈すると思われ、断面逆台形の急な立ち上がりを示す。土師器器台（第７図７）の他、出土遺物は少なく、詳細時期は不明である。

⑯　土坑16（挿図16）

規模115×70㎝、長軸方向Ｎ 33° Ｅを示す不整楕円形の土坑で、土坑19に切られる。底部はさらに一段低く凹んでおり、検出面からの深さは最深部で27㎝を測る。若干の遺物の出土をみたが時期決定は困難である。

⑰　土坑17（挿図15）

土坑１の南東に確認された65×55㎝の不整円形を呈する土坑である。全体的にゆるやかに凹み内部は一段低くなっている。遺物は少なく、詳細時期は不明である。

⑱　土坑18（挿図15）

規模65×55㎝の平面不整楕円形を呈し、深さ15㎝を測る。壁はやや急な立ち上がりを示し、底部は平坦である。出土遺物は少なく、時期不明である。

⑲　土坑19（挿図16）

土坑16・20を切ってＥＱ96・97で検出された。90×70㎝の不整楕円形を呈し、深さ11㎝を測る。断面皿状を呈する。坑内より土師器甕２片が出土した。

⑳　土坑20（挿図16）

土坑19・21に切られた瓢箪形の土坑である。平面形から複数土坑の重複する可能性がある。規模85×65㎝、深さ12㎝を測り、底部は平坦でややゆるやかに立ち上がる。土師器壷小破片１が出土した。

㉑　土坑21（挿図16）

80×80㎝の不整円形を呈し、土坑20・22を切る。検出面からの深さは15㎝で断面皿状を示す。

本址からは土師器甕小破片1が出土したのみである。

㉒　土坑22（挿図16）

土坑21に切られた不整楕円形を呈する土坑である。規模65×45㎝、深さ18㎝を測り、断面逆台形である。出土遺物は少なく、詳細時期は不明である。

㉓　土坑23（挿図16）

土坑29の北東に検出され、規模95×65㎝、深さ34㎝の不整楕円形を呈する。壁は急な立ち上がりを示し、断面逆台形である。本址から東側に向って傾斜が認められ、なだらかに下がっていく。出土遺物はいずれも小破片であるが、土師器甕がある。

㉔　土坑24（挿図16）

規模105×65㎝、深さ20㎝の不整楕円形を呈する土坑で、土坑25に切られる。長軸方向N35.5°Wを示す。ややゆるやかに凹み、西側は径25㎝程一段低くなっている。坑内から土師器甕・坏・高坏等の遺物が出土した。

㉕　土坑25（挿図16）

土坑24を切り、また土坑26と重複するが新旧関係は不明である。規模135×90㎝、深さ24㎝の不整楕円形を呈し、長軸方向はN77°Wを示す。土師器甕口縁部等小破片が出土している。

㉖　土坑26（挿図16）

土坑25と重複するが新旧関係は不明である。平面不整楕円形を呈し、規模（70）×50㎝、深さ18㎝を測る。壁はややゆるやかに立ち上がり、底面は平坦である。出土遺物は土師器甕他いずれも小破片である。

㉗　土坑27（挿図16）

規模80×50㎝、深さ22㎝の不整楕円形を呈する土坑である。壁はゆるやかな立ち上がりを示し平底である。弥生土器壷・土師器甕等が出土している。

㉘　土坑28（挿図16）

土坑25・32の間に検出され、規模70×65㎝、深さ21㎝を測る不整円形の土坑である。底部は南側が一段低い。出土遺物には土師器甕他小破片がある。

㉙　土坑29（挿図16、第７図）

規模130×75㎝、深さ19～22㎝の草鞋形の土坑である。底面は平坦で、壁が急に立ち上がる。平面形から複数土坑の切り合っている可能性を指摘できる。本址からは弥生土器壷・甕（第７図８・９）が出土しており、いわゆる弥生時代後期に比定される。

㉚　土坑30（挿図16）

土坑28・35の間に検出され、規模70×55㎝、深さ18㎝の不整楕円形を呈する。壁はゆるやかな立ち上がりを示し、内部がさらに深くなっている。甕底部・台付甕・高坏脚等の遺物が出土しており、古墳時代前期に比定できる。

㉛　土坑31（挿図16）

土坑32に切られる規模65×45㎝、深さ15㎝の不整楕円形を呈する土坑である。断面逆台形を示す。坑内より土師器甕等小破片４が出土した。

㉜　土坑32（挿図16、第７図）

土坑33に切られ、溝址１を切る。規模145×（110）㎝の不整楕円形を呈し、また底部は一段低く凹み、深さ19㎝を測る。弥生土器甕（第７図10）、土師器坏など小破片20片の出土をみる。

㉝　土坑33（挿図16、第７図）

土坑32、溝址１を切る。規模90×60㎝、深さ21㎝を測る不整三角形の土坑である。壁は急な立ち上がりを示し、平坦な底面をなす。弥生土器壷頸部片（第７図11）・底部の他、壷・甕小破片が出土し、弥生時代後期ないし古墳時代前期に位置づくと考えられるが、詳細時期は不明である。

㉞　土坑34（挿図16）

土坑33・35の間に検出された、規模45×45㎝、深さ14㎝の不整円形を呈する土坑である。断面逆台形を示す。出土遺物は少なく、詳細時期は不明である。

㉟　土坑35（挿図16、第７図）

規模115×100㎝の不整方形を呈する土坑で、西側が一段低く、深さ30㎝を測る。壁はやや急な立ち上がりを示す。底面の状況から複数土坑の重複も考えられる。土師器甕（第７図12）高坏（同15）等の古墳時代遺物の他、弥生土師甕片（同13）等が出土している。出土遺物から古墳時代前期に比定される。

㊱　土坑36（挿図16、第７図）

平面不整楕円形を呈し、規模 135×95㎝、長軸方向はＮ 79.5°Ｗ を示す。西壁はゆるやかで、東側は低くなり立ち上がりも急である。最深部で検出面から23㎝を測る。弥生土器壷片（第７図16）の他は、土師器坏・甕等の小破片が多く出土しており、古墳時代前期の遺構である。

㊲　土坑37（挿図16）

未調査区にかかり½を調査したのみである。確認された短辺は 130㎝を測る。推定不整楕円形を呈する土坑である。平坦な底面で西壁はゆるやかに立ち上がる。検出面からの深さは16㎝を測る。弥生土器１片の他、土師器壷・甕・坏等多くの小破片が出土しており、また黒曜石製の石鏃１点もある。出土遺物等から古墳時代前期に比定される。

㊳　土坑38（挿図16）

規模90×60㎝、深さ12㎝の不整楕円形を呈する土坑で、東壁は急に立ち上がり、また底面は西側に低く傾斜している。出土遺物は少なく、詳細時期は不明である。

㊴　土坑39（挿図16）

溝址１を切って確認された。規模（85）×65㎝の不整楕円形を呈し、深さ９㎝を測る。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。出土遺物は少なく、時期不明である。

㊵　土坑40（挿図15）

溝址１と重複し、平面形は不明である。確認された一辺は90㎝で、深さ16㎝を測る。底面平底状を呈し、壁はゆるやかに立ち上がる。本址からは土師器甕等小破片が出土している。

㊶　土坑41（挿図16、第７図）

土坑42・44の間で確認された不整方形を呈する土坑で、規模 100×60㎝、深さ19㎝を測る。底部は北側に低く傾斜し、また壁はやや急に立ち上がる。壷口縁部（第７図17）及び胴部、甕片が出土しており、弥生時代後期に比定される。

㊷　土坑42（挿図16）

土坑43と重複して検出されたが、新旧関係は不明である。重複のため平面形は不明であるが、不整円形を呈すると思われる。検出面からの深さは14㎝を測る。底面は南側が低く、ゆるやかな立ち上がりを示す壁である。土師器壷・甕の小破片他、縄文土器片１が出土しており、古墳時代に属する遺構と考えられるが、詳細時期は不明である。

㊸　土坑43（挿図16）

土坑42と重複するが、新旧関係は不明である。規模（100）×80 ㎝の不整楕円形を呈すると思われる土坑で、深さ18㎝を測る。壁はゆるやかに立ち上がる。内部に35×20㎝の小穴があり、検出面との比高差は45㎝を測る。出土遺物は少なく、時期は不明である。

㊹　土坑44（挿図16）

規模90×55㎝の不整楕円形を呈し、深さ19㎝を測る。断面舟底形をなす。本址からは土師器壷・甕小破片が出土した。

㊺　土坑45（挿図16、第７図）

南側は調査区外にかかり、½を調査したにとどまる。不整楕円形を呈すると思われ、確認された一辺は、150㎝を測る。中央が高く壁際は総体的に低い。西壁側が凹み、壁はゆるやかに立ち上がる。また、東側は一段深くなっており、土坑が切り合っている可能性がある。土師器甕口縁部を含め小破片３片が出土したにとどまる。

㊻　土坑46（挿図15、第７図）

土坑57に切られ、柱穴を切っている。重複のため全体形は不明であるが、不整楕円形を呈すると思われ、確認された一辺は70㎝を測る。検出面からの深さは10㎝であるが、東側はやや高くなっており、土坑がさらに重複していた可能性がある。土師器甕（第７図20）、Ｓ字状口縁の甕（同19）及び甕小破片が出土しており、古墳時代前期に比定される。

㊼　土坑47（挿図16）

規模80×60㎝、深さ28㎝の楕円形を呈する土坑で、底面は東側が低く、壁はゆるやかに立ち上がっている。出土遺物は少なく、詳細時期は不明である。

㊽　土坑48（挿図16）

溝址１を切り、暗渠排水に切られている。規模55×50㎝、深さ24㎝の不整円形の土坑で、底部は平坦でゆるやかに立ち上がっている。坑内からの出土遺物は土師器甕１片の他、弥生時代後期の壷・甕片が多く出土しており、中島式期に比定される。

㊾　土坑49（挿図16）

土坑27の北東に柱穴を切って確認された。規模75×50㎝、深さ25㎝を測る瓢箪形の土坑で、その形態より複数遺構の重複も考えられる。平坦な底面をなし、壁が急に立ち上がる。壷破片２が出土しており、弥生時代後期ないし古墳時代前期の遺構と考えられる。

㊿　土坑50（挿図16）

暗渠排水の北側に検出され、柱穴を切る。平面プランは不整楕円形で、規模80×45㎝、深さ23㎝を測る。壁はゆるやかな立ち上がりを示し、底面は北側が低くなっている。壷底部・土師器甕片が出土した。

(51)　土坑51（挿図16）

土坑16の北側で柱穴を切って検出された。規模65×35㎝、深さ18㎝の楕円形を呈する土坑でゆるやかな立ち上がりの舟底状断面をもつ。鉢と思われる遺物等若干の小破片の出土をみる。

(52)　土坑52（挿図15、第７図）

土坑55に切られる。未調査区にかかり全体を完掘していない。張り出し部を持つ等の点から複数土坑の重複する可能性が指摘できる。確認された短辺は180㎝、深さ14㎝を測る。北東部に一段低い部分がある。本址からは土師器甕・小型鉢（第７図22）及び緑色岩剥片が出土している。

(53)　土坑53（挿図15、第８図）

溝址１と重複し、全体形は不明であるが、確認された一辺は60㎝、深さ15㎝を測る。急な立ち上がりを示す壁であり、底面は東側が低くなっている。形状等から土坑の重複する可能性もある。

小型壷・甕片の他、溝址１出土の破片と接合した甕口縁部（第８図１）がある。

(54)　土坑54（挿図15）

溝址１と重複し、このため全体形・規模は不明である。検出面からの深さ25㎝を測り、東側が凹み、また壁はやや急に立ち上がる。出土遺物はいずれも小破片であり、弥生時代の壷・朱塗の波状文を施した甕がある。

(55)　土坑55（挿図15）

土坑52を切る。調査区外にかかり全体を調査していない。（180）×（160）㎝の不整楕円形を呈するものと思われ、深さ29㎝を測る。断面逆台形である。出土遺物は少なく、詳細時期は不明である。

(56)　土坑56（挿図15、第８図）

溝址１と重複し、平面プラン等不明である。深さ34㎝で南側は一段低くなっており、また東壁はゆるやかな立ち上がりを示す。第８図２の甕底部の他出土遺物は少なく、時期不明である。

㊼　土坑57（挿図15）

土坑46を切る。規模160×140 ㎝、深さ7㎝を測り、平面不整楕円形・断面皿状を呈する土坑である。坑内に40×35㎝の柱穴がある。若干の遺物が出土したのみで詳細時期は不明である。

㊽　土坑58（挿図15）

規模85×60㎝、深さ11㎝の不整楕円形を呈する土坑である。壁はややゆるやかに立ち上がり、底面中央が若干凹む。出土遺物は少なく、時期不明である。　（馬場保之）

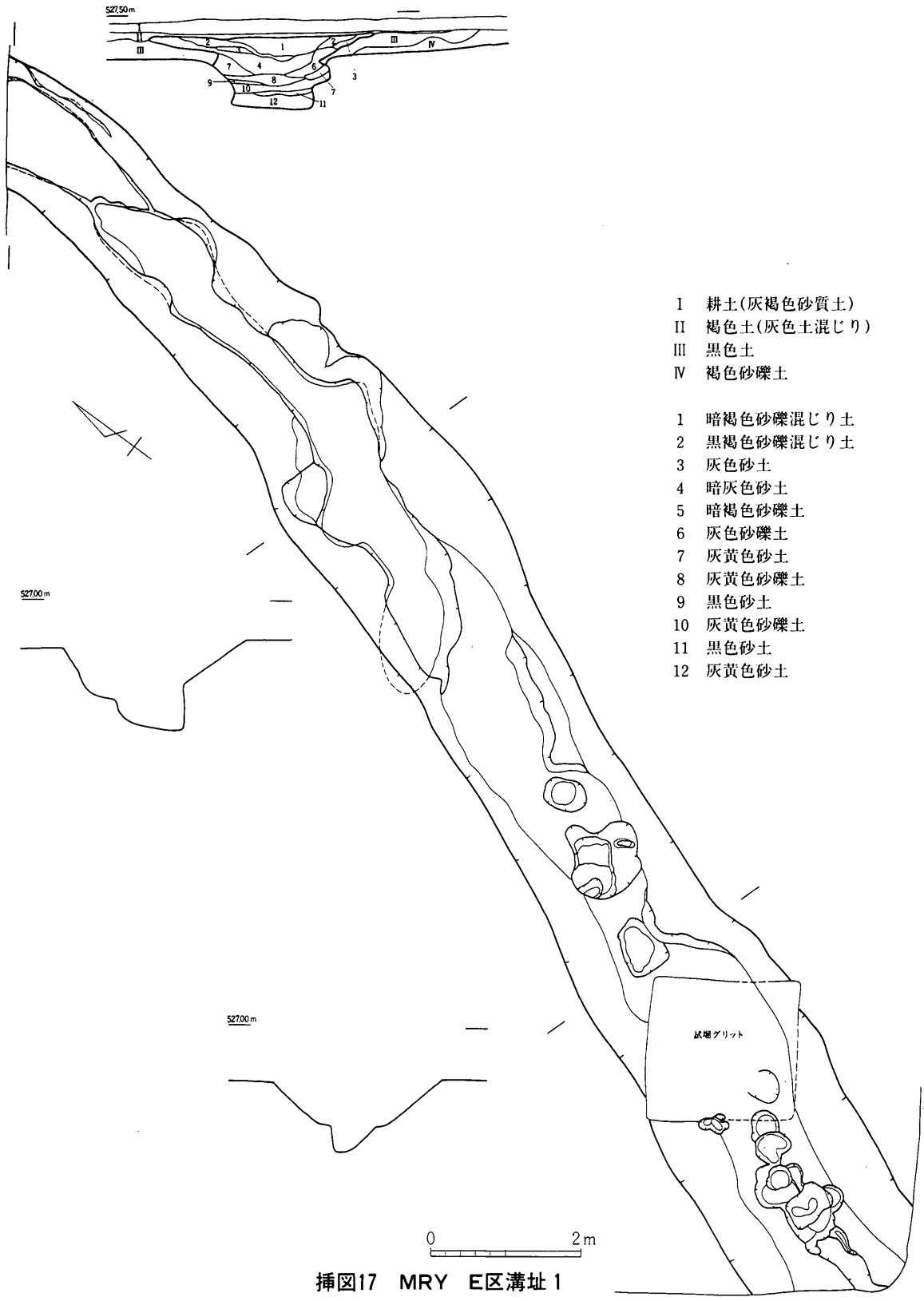
2）溝　址

①　溝址1（挿図17、第8図）

調査区をやや東へ湾曲しながら、ほぼ南北に横切って検出した。長さは調査部分で19.4m、幅2.4～1.6mで、深さは検出面から110～65㎝を測る。壁面は比較的ゆるやかに立ちあがるが、ところどころに稜があり、一部えぐり込むところもある。北より2m程南下したところで、一段深く落ち込み、深さがこの部分で最深となり、その状態で7m程南へ下る。そして再び一段高くなる。この一段低い部分では、湧水がみられ調査中にさえも20㎝程度の水をたたえていた。南側半分には水の流れによる凹凸が認められた。人為的な水路であるか、自然流路であるかの断定は困難であるが、集落地及び耕地（水田）に隣接すると判断される位置にあり、総合的に判断すれば、人為的な遺構である可能性が強い。覆土中、遺物が出土したのは、ほとんど上部に限られていたが、数はかなり多い。しかし破片であり、その器形を知るものはない。

弥生時代の遺物としては、横線文と波状文を組み合わせた壷（第8図9）、三段の斜走短線を持つ甕（同4）、波状文のみのもの（同6）、横線文と山形文を組み合わせたもの（同7）きざみのある口縁（同5）、同じく弥生時代の壷の底英（同8）、土師器小型の甕（同3）、土師器で円形のすかしをもつ高坏の脚部（同10・11）などがある。

本址の時代は掘り込み面が弥生時代から古墳時代遺物包含層下部と判断され、出土遺物と合わせ弥生時代末から古墳時代前期と考えられる。　（吉川　豊）



I　耕土(灰褐色砂質土)
II　褐色土(灰色土混じり)
III　黒色土
IV　褐色砂礫土

1　暗褐色砂礫混じり土
2　黒褐色砂礫混じり土
3　灰色砂土
4　暗灰色砂土
5　暗褐色砂礫土
6　灰色砂礫土
7　灰黄色砂土
8　灰黄色砂礫土
9　黒色砂土
10　灰黄色砂礫土
11　黒色砂土
12　灰黄色砂土

挿図17　MRY　E区溝址1

3) 柱　穴

E区で柱穴として把握した穴は溝址1より東側に集中する。34本を検出したが北側の穴のうち大形のものは掘り方壁面がゆるやかで土坑の可能性が高い。遺物は何も出土しなかった。掘り方直径90㎝の土坑状の穴を除くと直径が50㎝程のものと20㎝程の穴に別けられる。前者は深さ11～33㎝、後者が13～27㎝を測る。両者と規則性を持った並びは確認できなかった。しかし後者の中で6本がEQ98・99グリットに集中する。覆土も皆同じ黒色で、深さも15㎝前後と統一性があるが性格は不明である。

時期は磨滅した土師器小破片が出土した穴もあるが、穴に直接伴なう遺物とは考えられず時期を決定できるものは無い。（佐合英治）

4) 暗渠排水

C・D区と同様、本区でも明治・大正期に構築された暗渠排水が検出された。

EA95試掘坑では西辺に半分かかった状態で検出された。深さ50～60㎝の溝掘り方両側に小児頭大の扁平礫を立て、その上に天井部を架ける。上部に拳大円礫を敷きつめ、さらに黒褐色土を埋めている。

EU95及び本調査区北隅に検出された二本の暗渠排水は、その位置関係から繋がるもので、構造的にはEA95検出のものとほぼ同じである。ただ、埋め戻した土が上層に礫混り砂層、下層に砂層であった点異なる。溝掘り方は深さ約90㎝、幅約40㎝である。（馬場保之）

5) その他

①　遺構外出土遺物（第9～11）

E区全体は緩やかではあるが総体に南方のD区に向かって傾斜しており、耕土下に溝址及び土坑を検出した褐色砂土を覆って黒色砂土の層があり、傾斜地に堆積した包含層である。遺物の出土量は極めて多く、調査範囲全体に敷きつめたようである。

E区の出土遺物の大半が同層からの出土品であり、その内容としては弥生時代終末から古墳時代前期にかけてのものである。

主なものとしては、S字状口縁台付甕（第10図8・9）・壷（第9図11～20）・甕（同7～10、

第10図１～７）・小型器台（第11図５・７）などがある。

遺物の出土状態及び下部に土坑の集中する状況などから、隣接地に存在の予想される集落址に関連した廃棄物の投棄された場所の指摘も可能といえる。（小林正春）

② その他

ＥＡ95・ＥＵ95は先述のとおり、暗渠排水のみ検出された。

ＦＡ99は隣接するＥ区とは異なった土層堆積状況を示し、表土下40㎝で南東に向って急激に落ち込む。埋土が砂層ないし礫混りの砂層であることから旧河道である可能性もある。表土下１ｍよりは無遺物層で、小枝片・山桃の種子を多く包含し、水成堆積の様相を示す。遺物は耕土から近世の角型鉢等陶器片少量が、また以下から土師器小片、須恵器坏が出土した。

ＦＦ99では遺構は検出できず、打製石斧小破片１点の他、土師器甕片・須恵器坏等小破片が出土したにとどまる。（馬場保之）

Ⅳ　ま　と　め

丸山・羽場地区における発掘調査は中央自動車道建設時以来本格的な調査としては初めてであり、道路敷部分のみという限られた範囲の中で一定の成果があった。今次の発掘調査の結果、C・E区を中心に弥生時代後期から古墳時代後期にかけての遺構・遺物等が検出された。

C区では弥生・古墳時代の8軒の竪穴住居址・土坑及び中世の生活面が確認された。竪穴住居址は1・2・6号住居址以外は非常に出土遺物が少なく、詳細時期を把握することは困難である。

古墳時代前期から後期への移行期の1号住居址からは、良好な土器類のセットが出土した。これまで該期の調査例は少なく、土器群の内容理解も十分と言えないのが現状であるが、本址出土の一括した遺物は該期の土器研究を進める上で貴重な資料といえる。

火事に遭った2号住居址は南隅に遺物がまとまって出土しており、遺存度が高く、坏類が重なった状態で出土する等生活の痕跡を色濃くとどめている。検出状況から極めて一括性の高い使用時のセットであり、貴重な資料である。

5号住居址は懸隔した調査の中で規模・床面の状態等の整合しない点がある。覆土中より中世の遺物が出土し、また東西方向の規模が著しく短かい点、猿小場遺跡31号住居址（1980）、小垣外・辻垣外遺跡13・17号住居址（1973）、上の金谷遺跡4号住居址（1973）等と類似することから中世の竪穴住居址である可能性がある。とすれば、本址の北東隅を古墳時代の8号住居址が切っていることから複数の竪穴住居址の重複が考えられ、本址の検出状況の不整合性も納得される。

6号住居址と8号住居址は平面形・規模・主軸（長軸）方向・貼り床等の点で極めて類似する。8号住居址でカマドが確認されていないこと、出土遺物が少ない等の相違もあるが、6号住居址が初源的なカマドを備えていることから近接した時期に営まれたものと考えられる。

7号住居址は主柱を結んだ外側が一段高く貼り床されている。こうした形態の竪穴住居址は恒川遺跡群阿弥陀垣外地籍7号住居址（1986）等に類例がある。AMD7号住居址が古墳時代後期に比定されるのに対し、本址は弥生時代から古墳時代の移行期で所属時期は相違している。両者とも当該時期の集落の中で普遍的な存在ではなく、規模もやや小型であることから特殊な性格を有する遺構である可能性もある。

調査区の東側に寄った部分には焼土散布やたたき状の部分が存在することから、中世の生活面が調査区の東側に広がっていると考えられる。

C区は地形的には源長川にほぼ平行した微高地上に位置し、調査区西側から弥生時代後期の壷一個体が採取された等の点から、微高地上に弥生時代から古墳時代ならびに中世の集落が展開していたと考えられる。

D区は微高地のC区とE区の間にあって凹地状の低湿な地域に相当し、弥生時代後期、中世等の遺物が出土した。しかし、遺物量は少なく、地下水位も高いことから、水稲耕作の行なわれた

可能性が高い。

E区は弥生時代後期から古墳時代にかけての土坑58基と柱穴、溝址が検出された。検出面から土坑底部までのレベル差がそれほど大きくないことから上部は耕作によってかなり破壊されていると思われる。土坑の形態や長軸方向・出土遺物等に共通性は抽出できず、かつ営まれた期間が比較的長期に及ぶことから廃棄場的な性格も考えられる。

C区とE区は平行する微高地にあたり、ほぼ同時期の遺構が検出されている。両者の対照的な遺構の相違は意識的な土地利用状況を示しており、D区を含めて遺跡全体に調査の手が及べば該期の集落経営の実態がある程度解明されるものと考えられる。そして同時期の遺構が調査された恒川遺跡群や松尾清水（1976）等と比較検討していくことによって古代下伊那の地域史解明が進むといえる。（馬場保之）

引用参考文献

1973　日本道路公団名古屋支社・長野県教育委員会　「Ⅲ．調査遺跡　13.　小恒外・辻垣外遺跡」長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書飯田市地内その2　PP．65～73

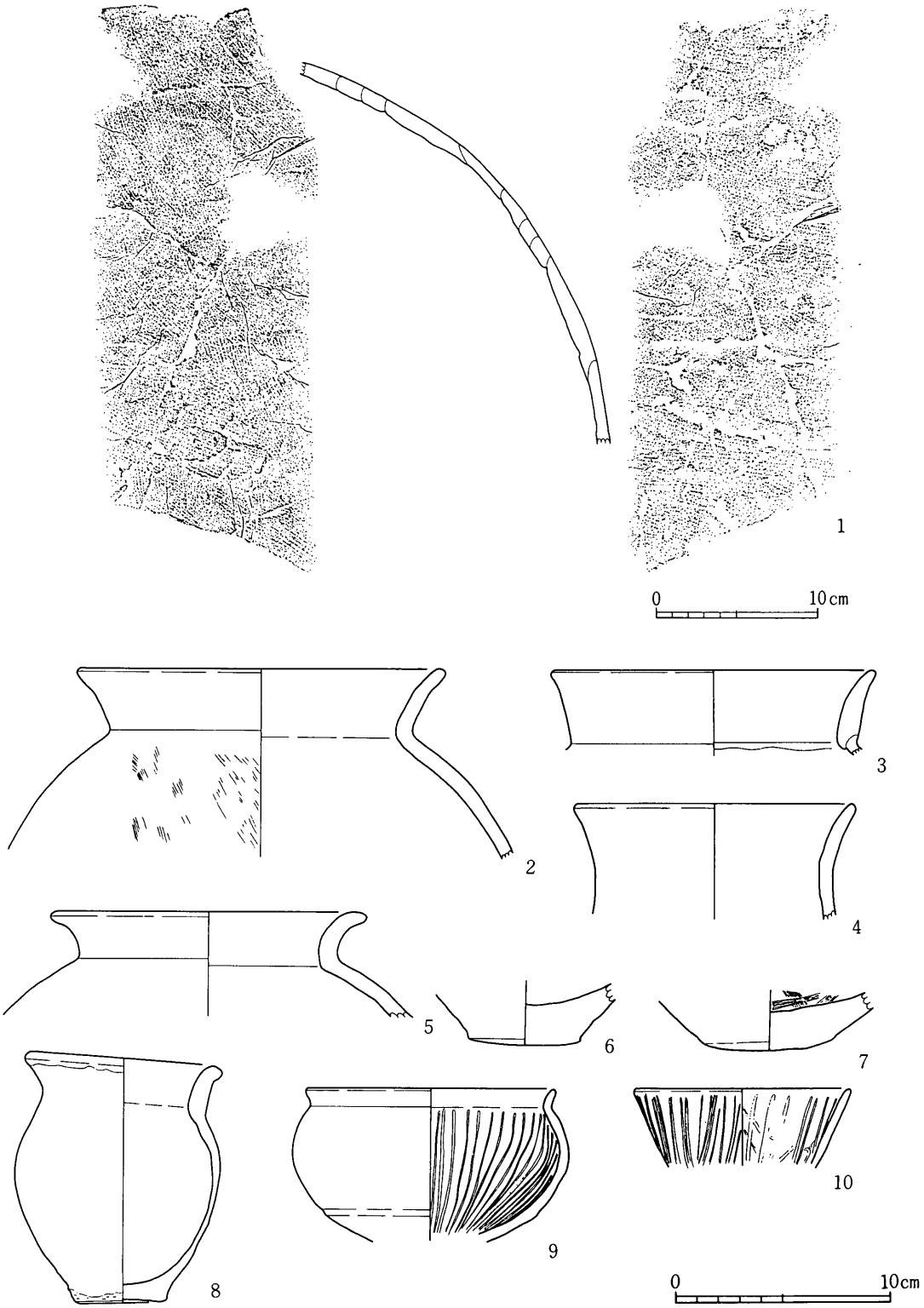
1973　同上　「Ⅲ．調査遺跡　15.　上の金谷遺跡」　同上　PP．76～81

1976　飯田市教育委員会　『清水遺跡』

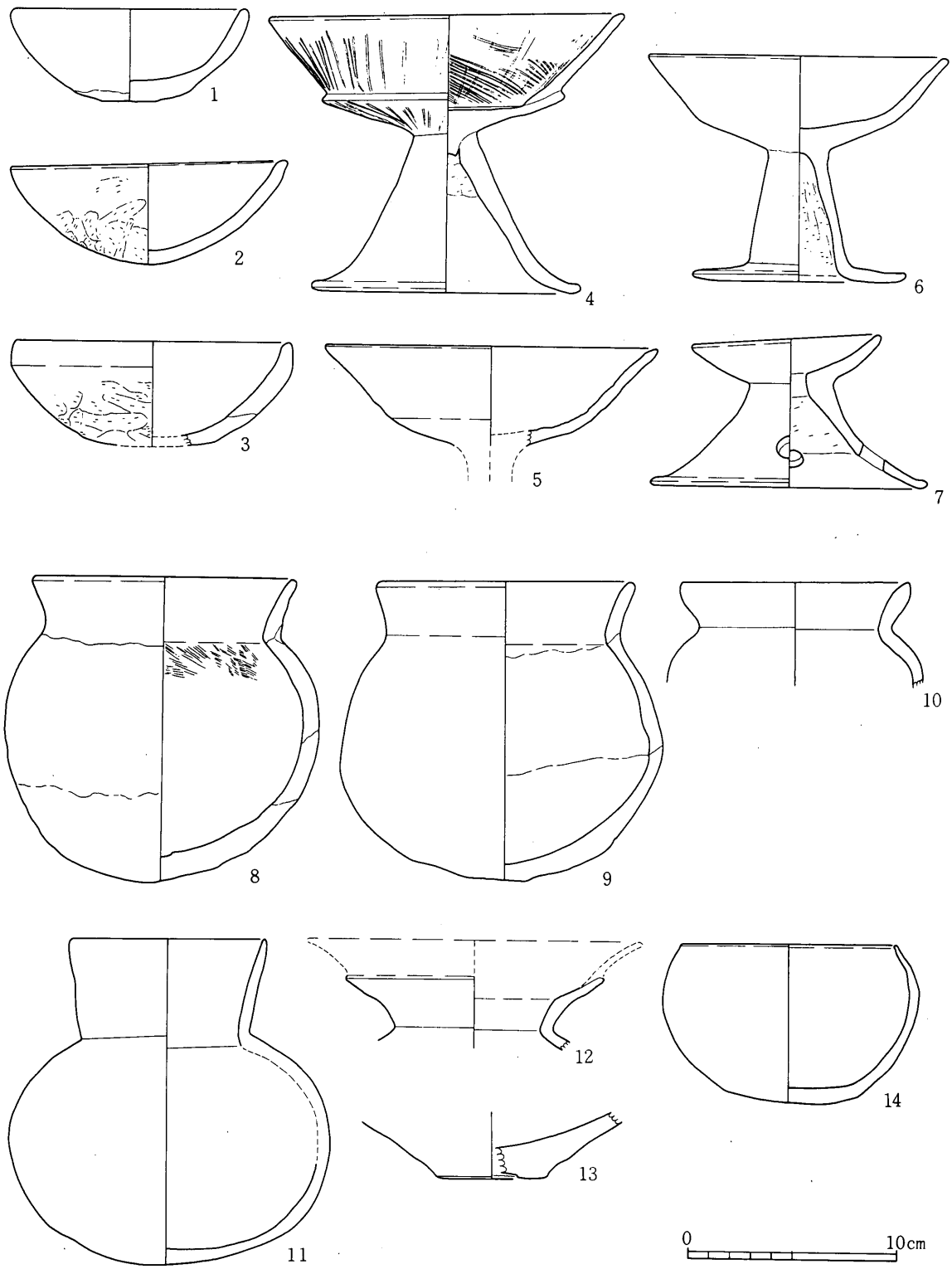
1980　長野県飯田長姫高等学校・飯田市教育委員会　『猿小場遺跡』

1986　飯田市教育委員会　『恒川遺跡群』

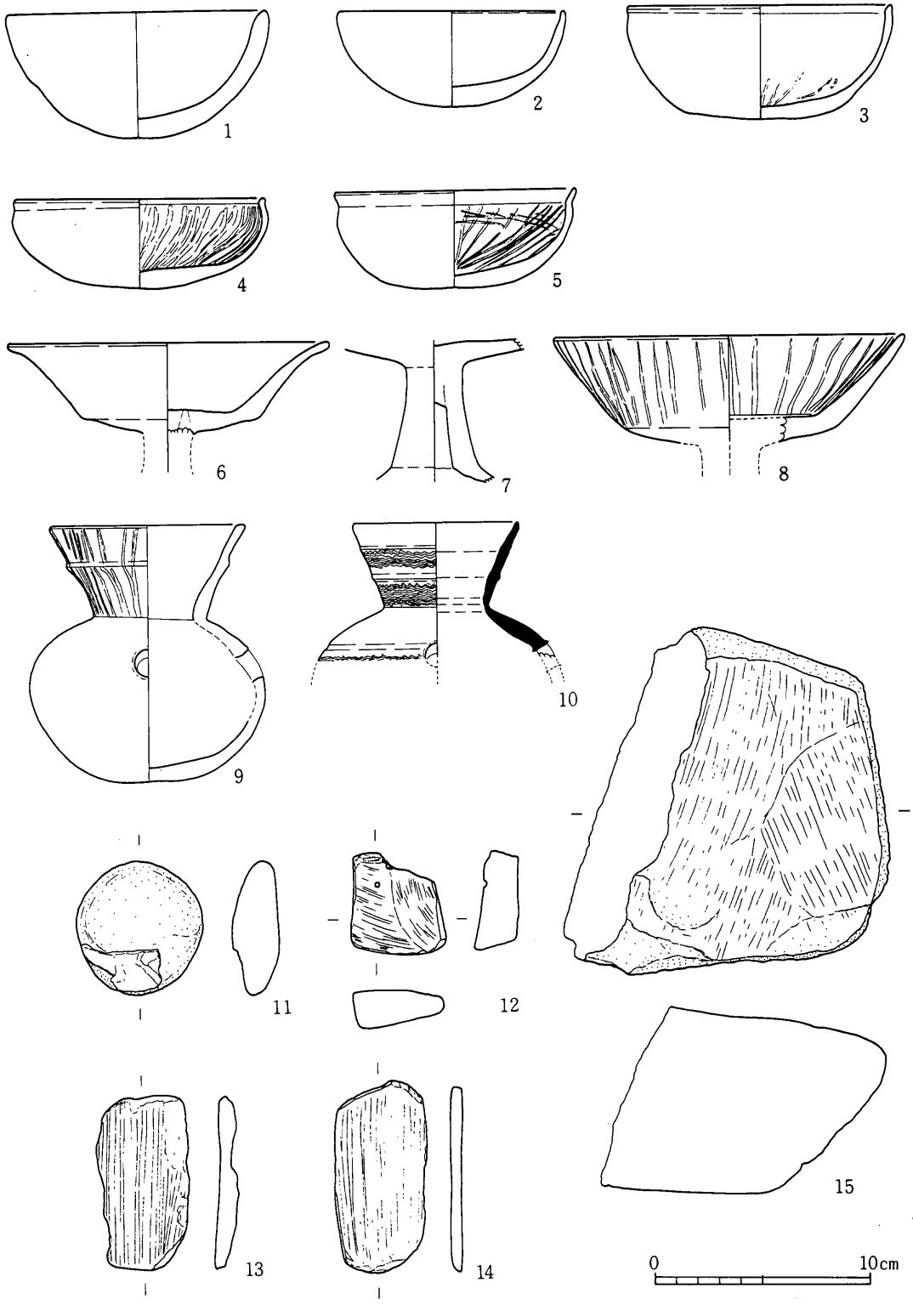
図　　版



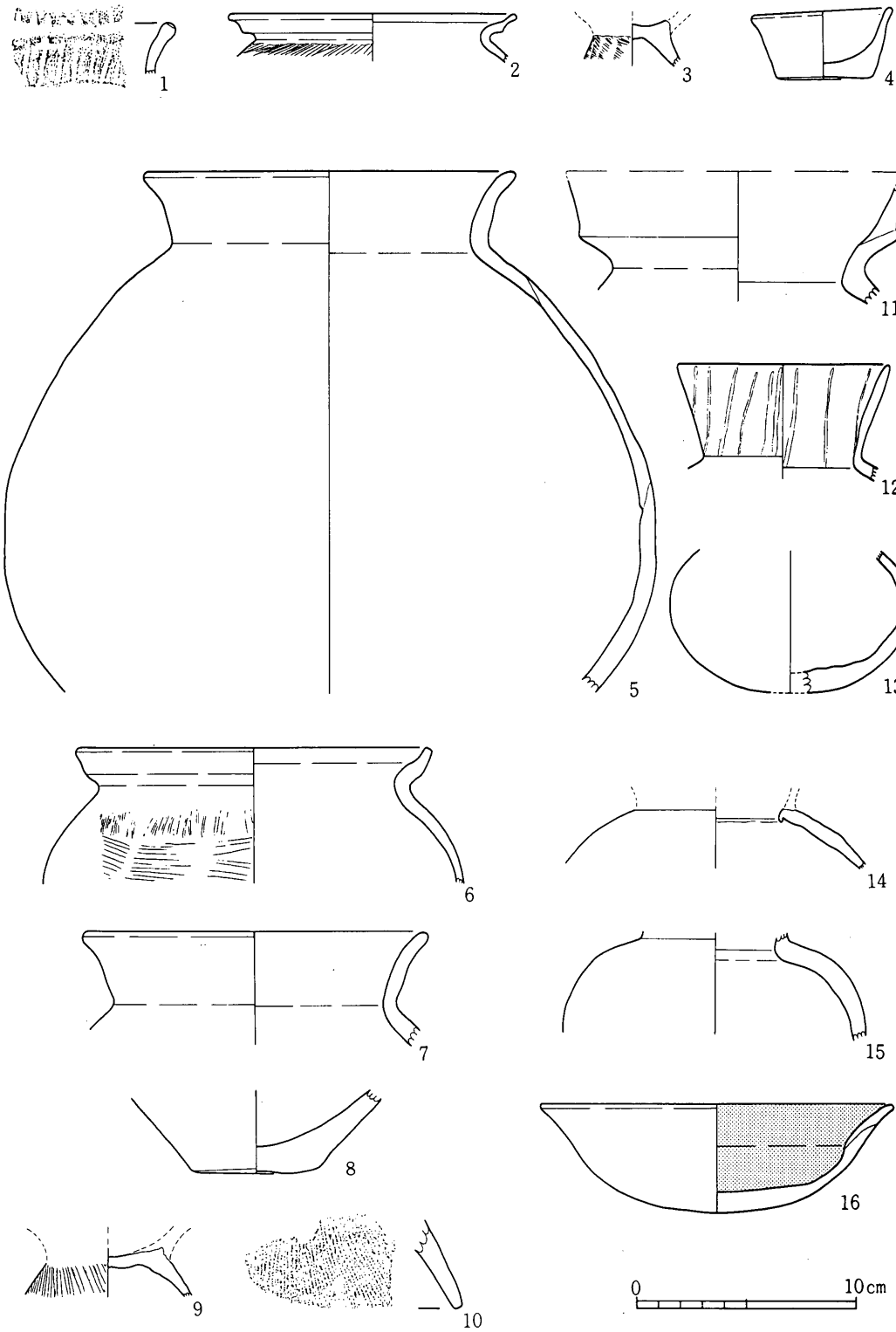
第1図　MRY　1号住居址出土遺物



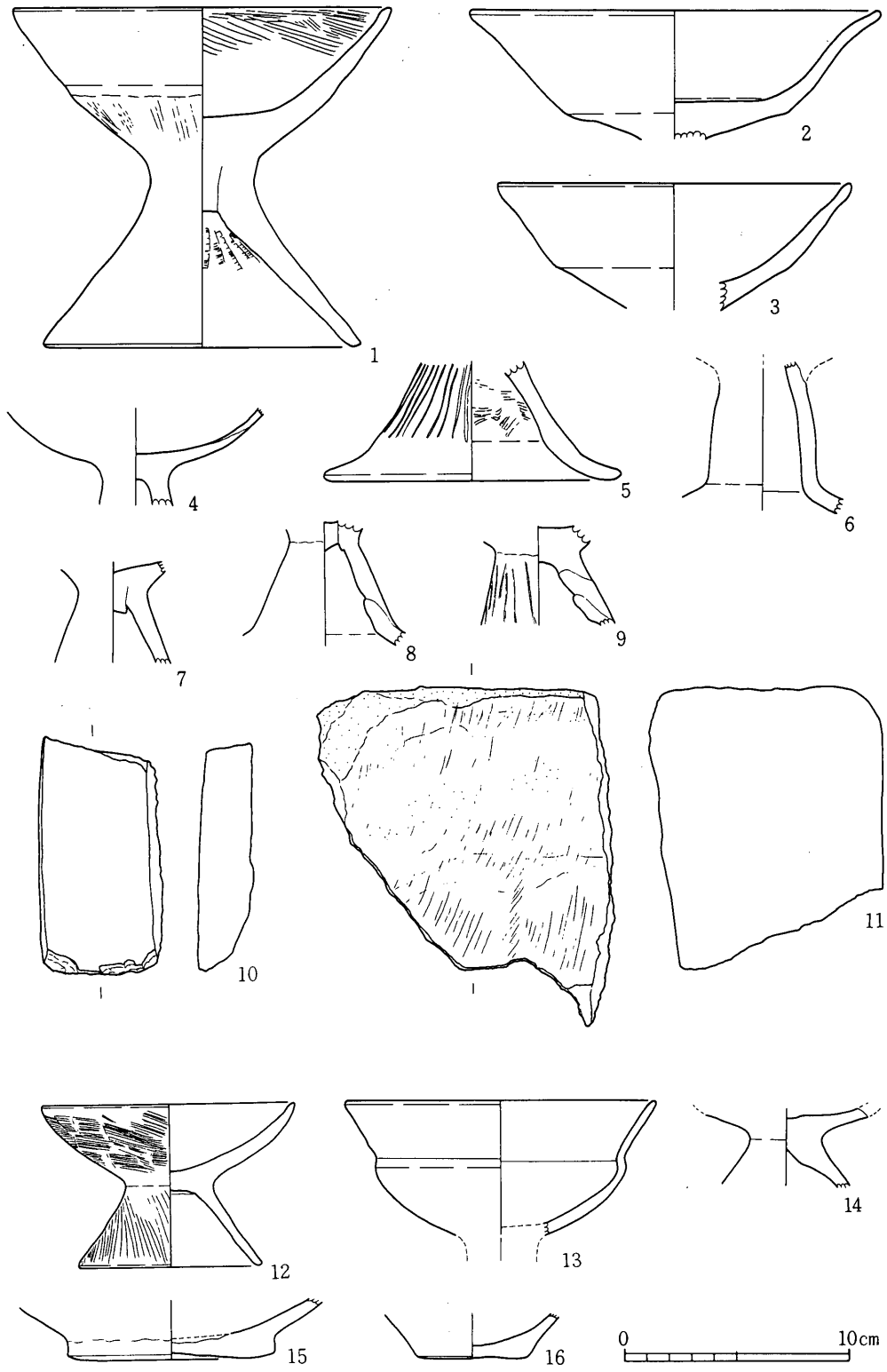
第2図　MRY　1・2号住居址出土遺物
（1~7　1住，8~14　2住）



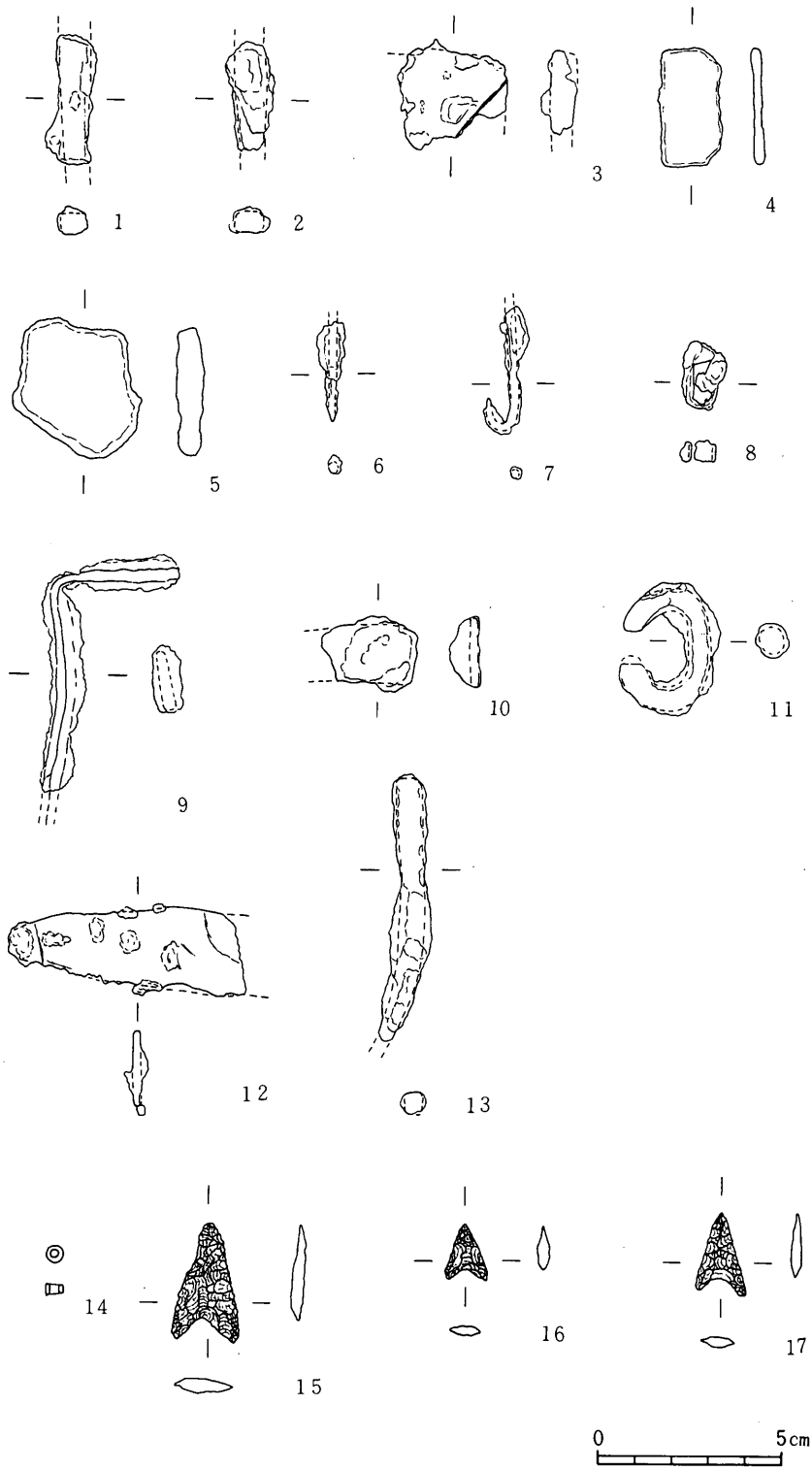
第3図　MRY　2号住居址出土遺物



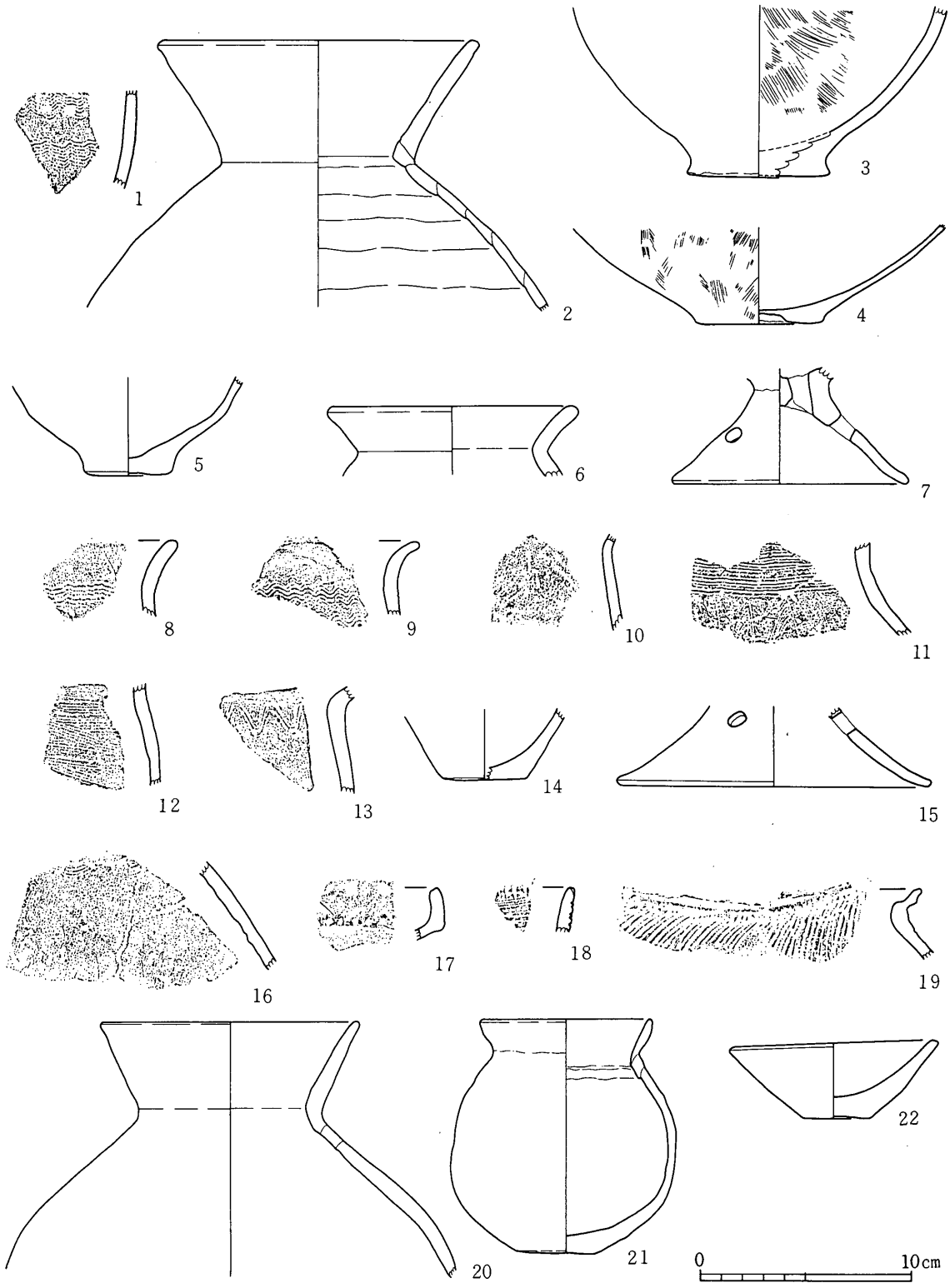
第4図　MRY　4・6号住居址出土遺物
（1~4 4住，5~16 6住）



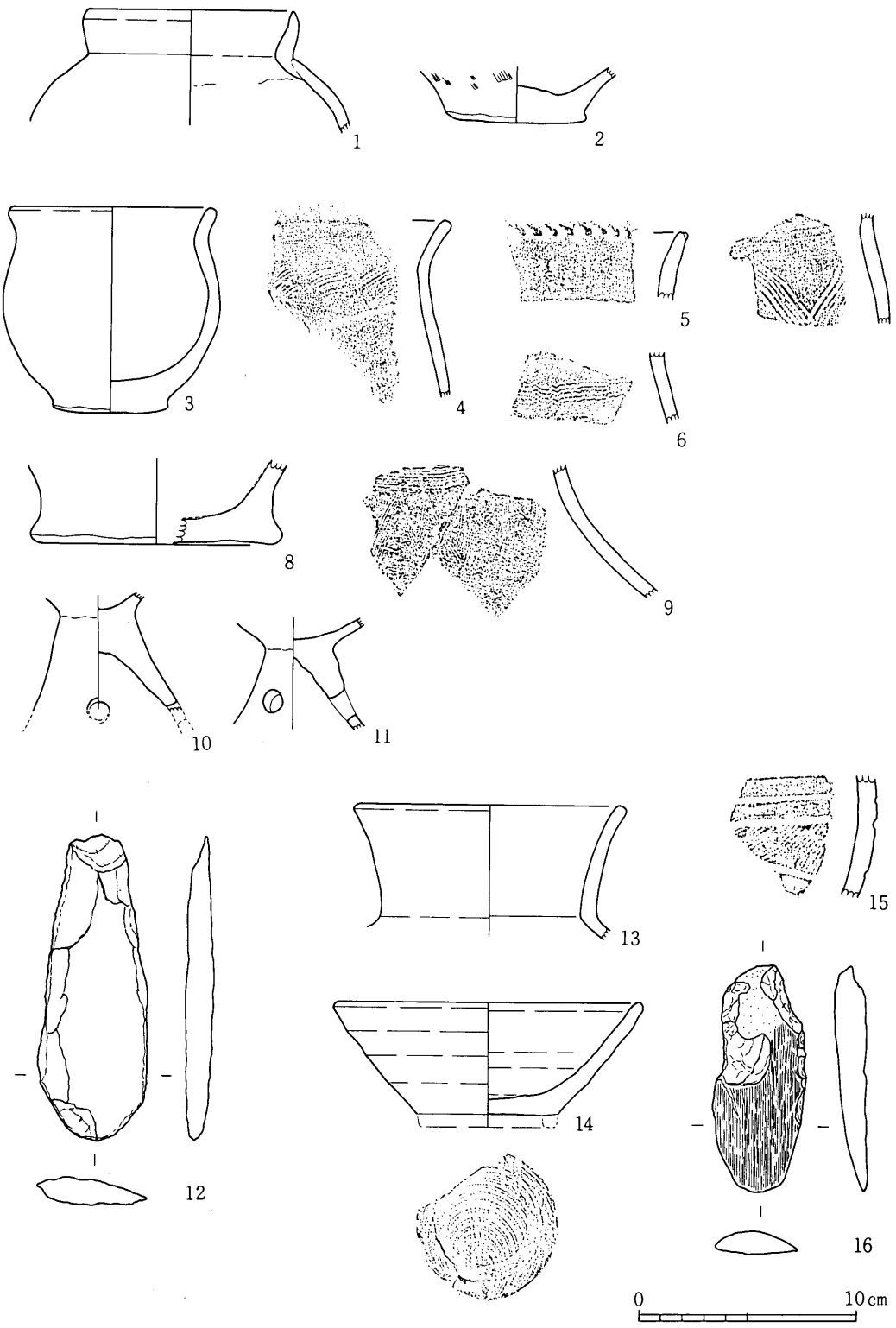
第5図　MRY　6・7号住居址出土遺物
(1~11 6住, 12~16 7住)



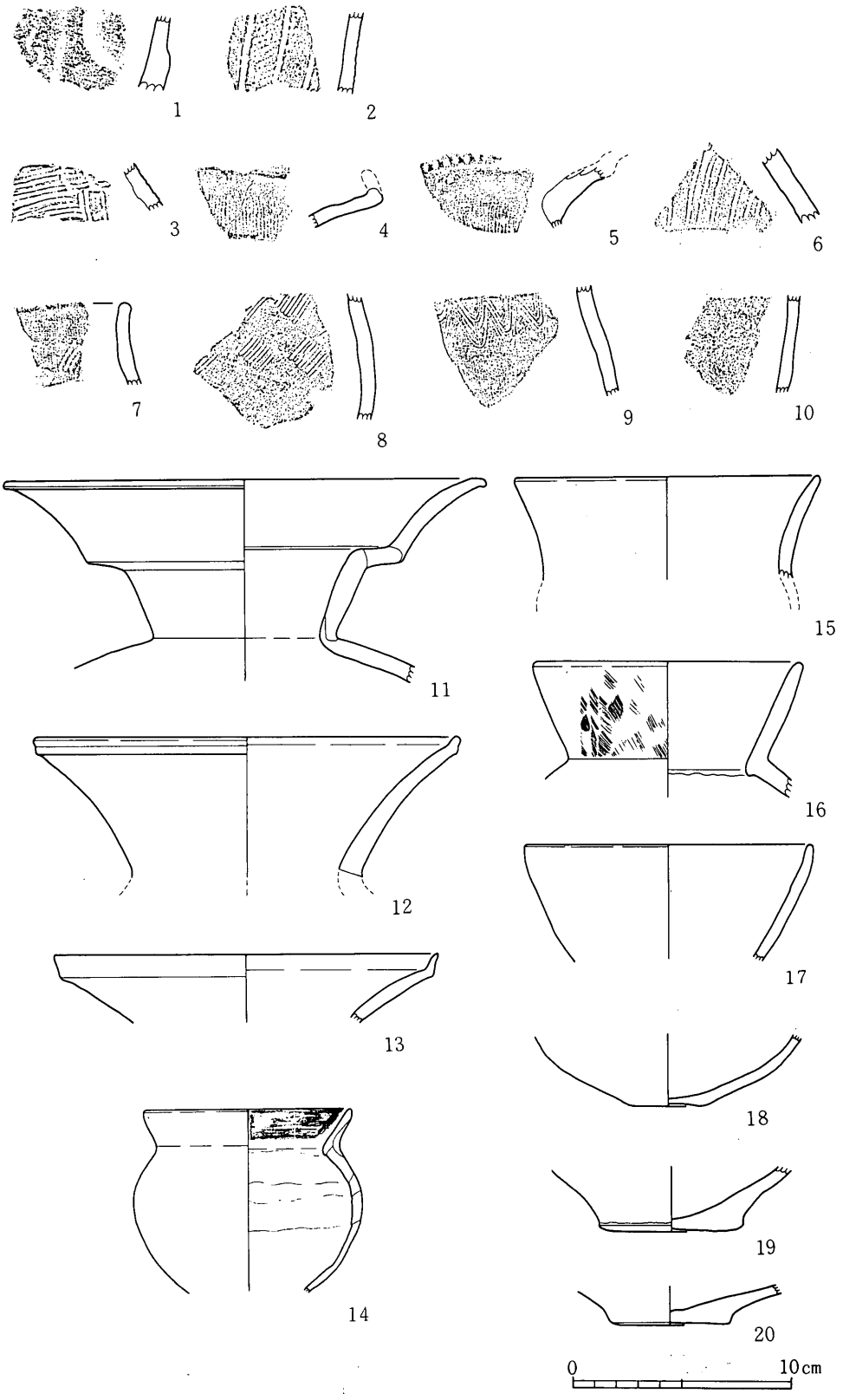
第6図　MRY　出土鉄製品・石製品・石器
(1~8 1住，9 2住，10・11 5住，12 6住，13 D区遺構外
14 2住，15 6住，16 土37，17 E区遺構外)



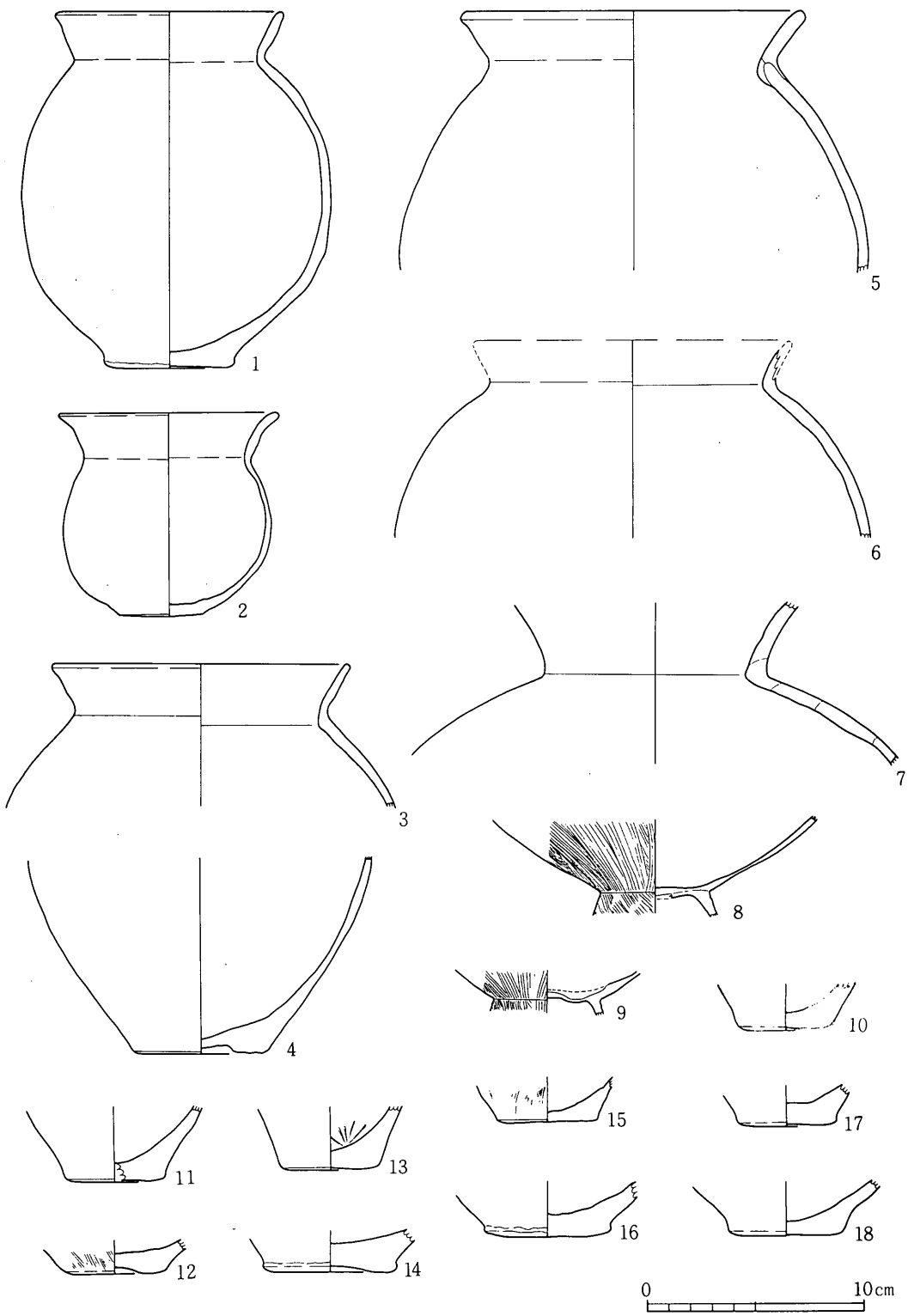
第7図　MRY　土坑，1・2・3・11・12・15・29・32・33・35・36・41・45・46・52出土遺物
（1 土1，2・3 土2，4 土3，5 土11，6 土12，7 土15，8・9 土29，10 土32
11 土33，12~15 土35，16 土36，17 土41，18 土45，19・20 土46，21・22 土52）



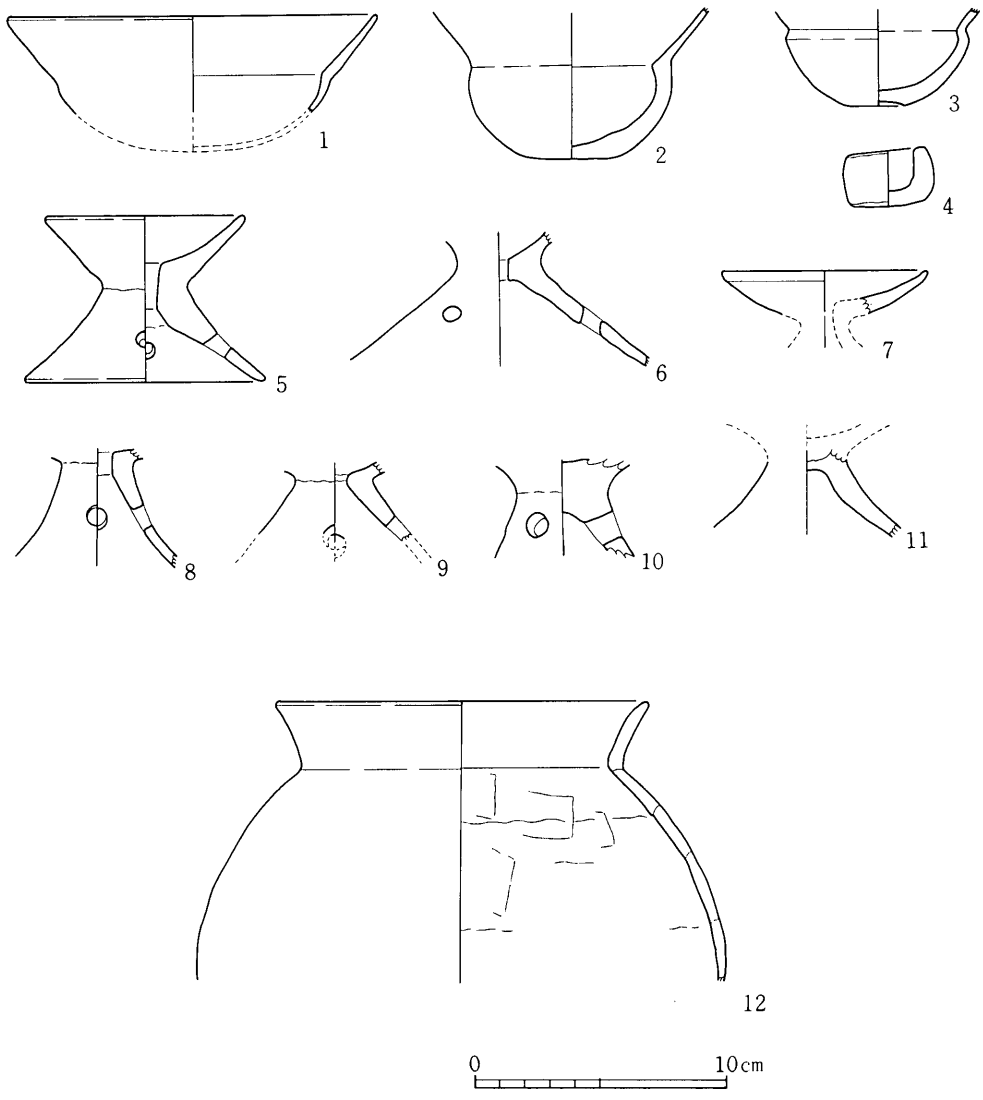
第8図　MRY　土坑53・56，溝址1，B・C区遺構外出土遺物
（1 土53，2 土56，3~11 溝址1，
12 B区遺構外，13~16 C区遺構外）



第9図　MRY　E区遺構外出土遺物



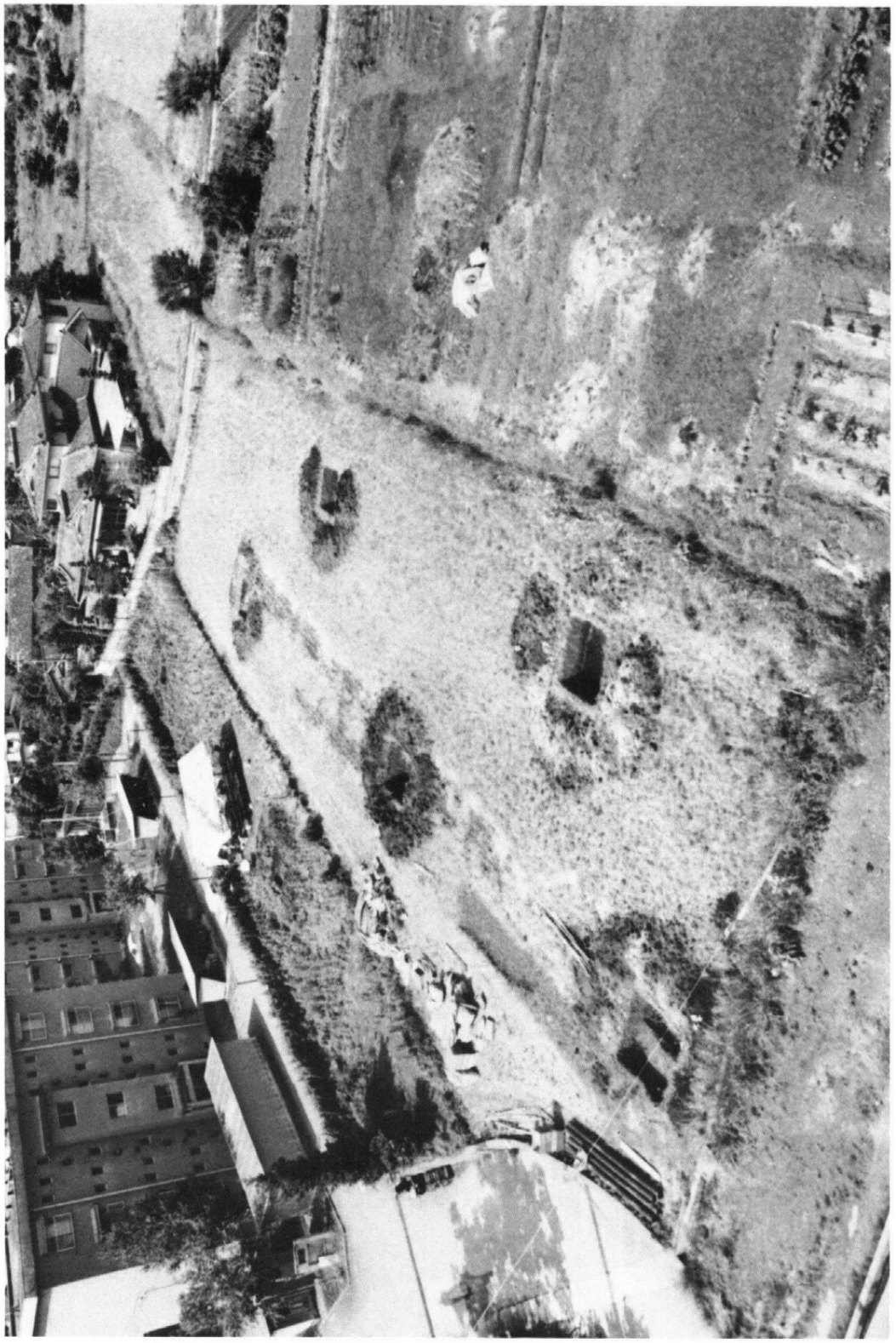
第10図　MRY　E区遺構外出土遺物



第11図　MRY 4 号住居址，E区遺構外出土遺物
（12　4住，1~11　E区遺構外）

写真図版

図版 1

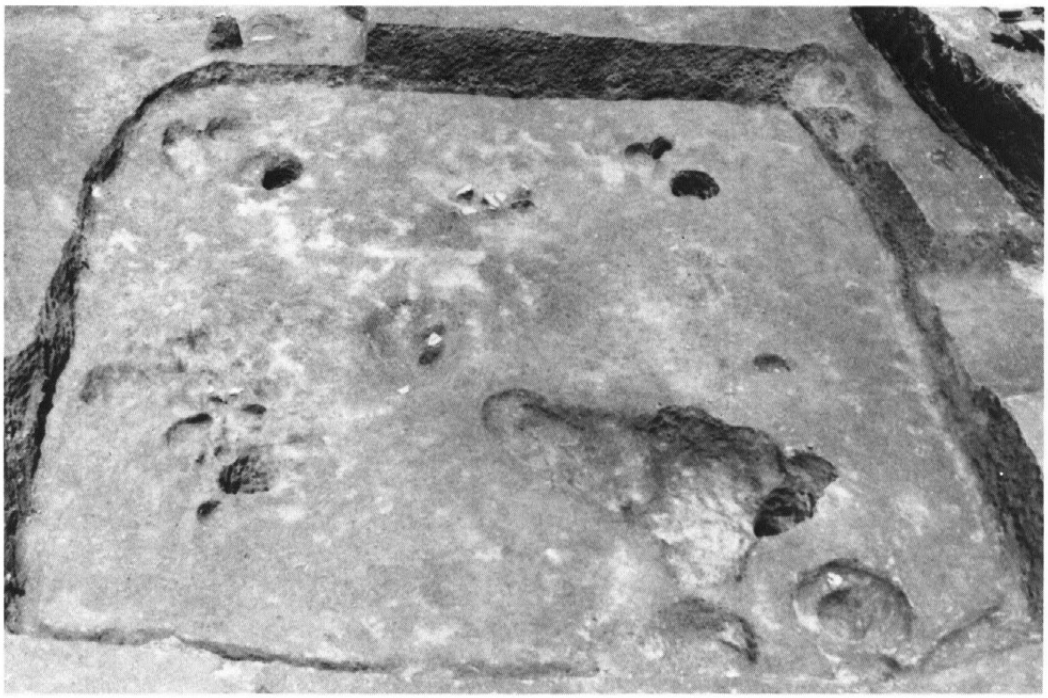


丸山遺跡全景

B区全景

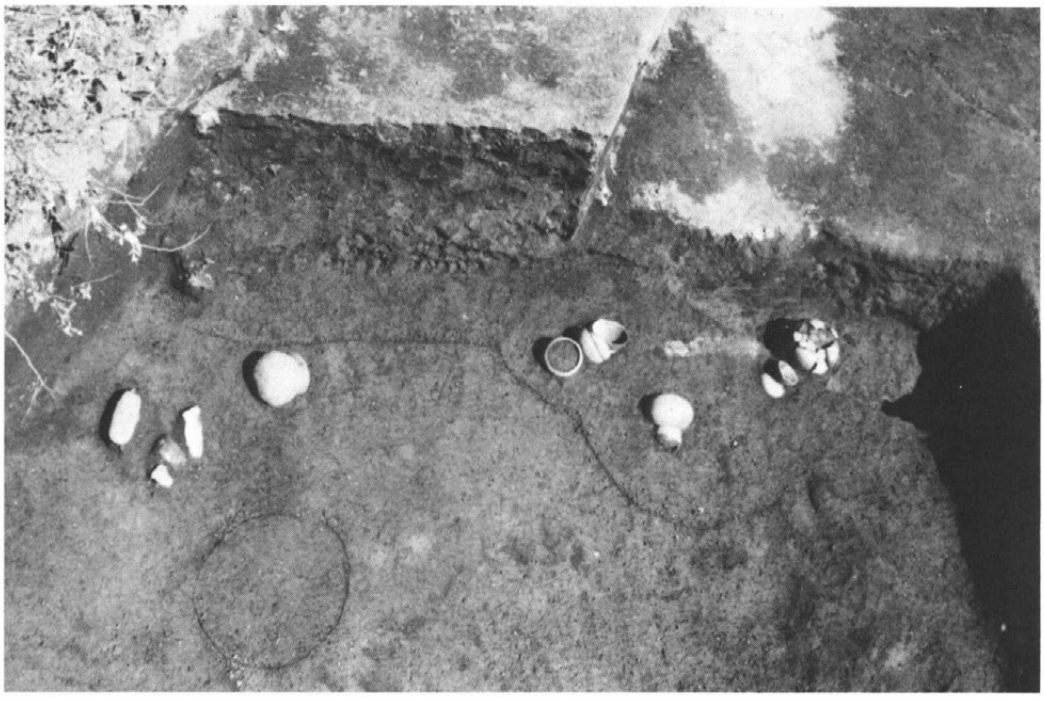
C区全景

図版 3

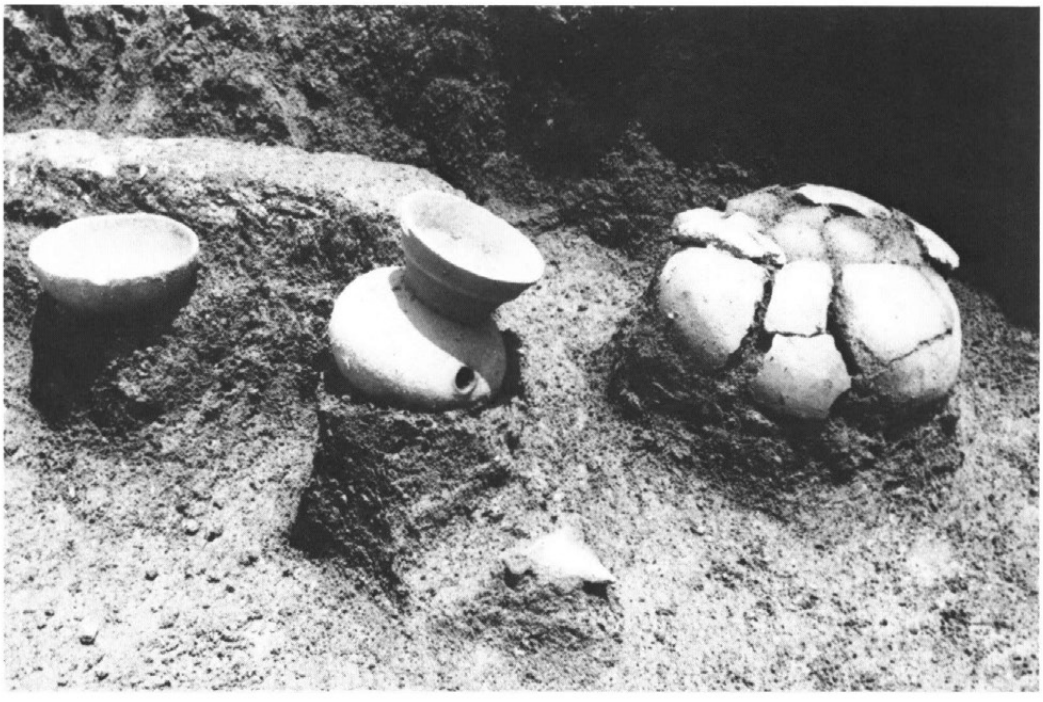


1 号住居址

同　遺物出土状況



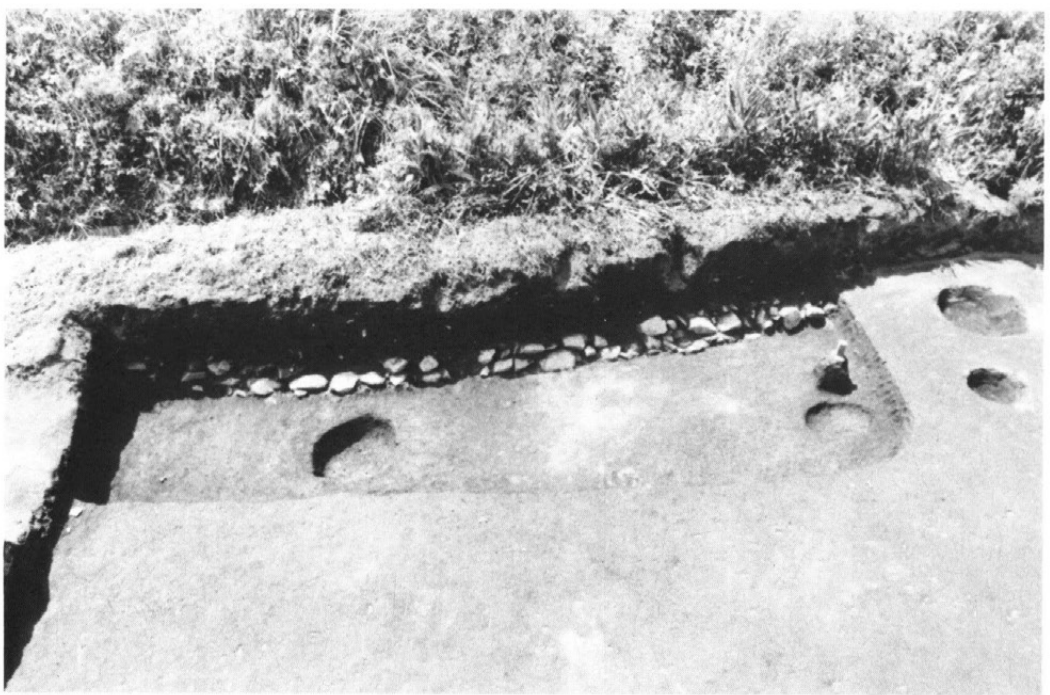
2号住居址



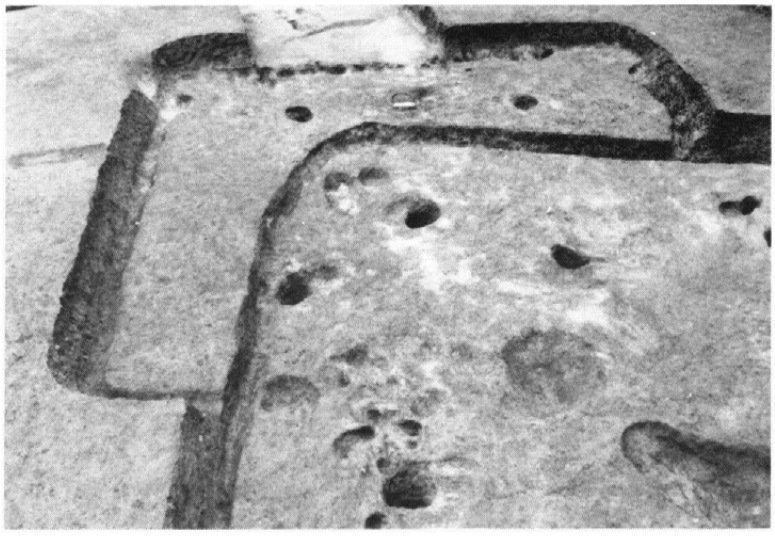
同　遺物出土状況

図版 5

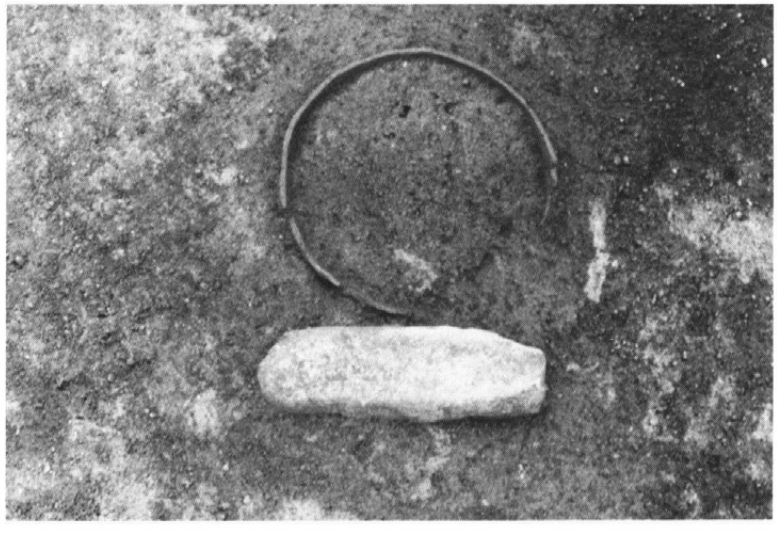
2号住居址 遺物出土状況



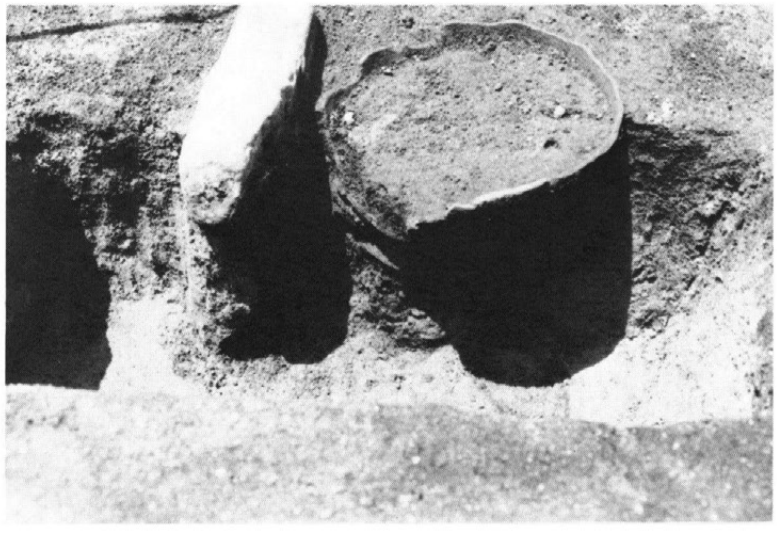
3号住居址



4号住居址



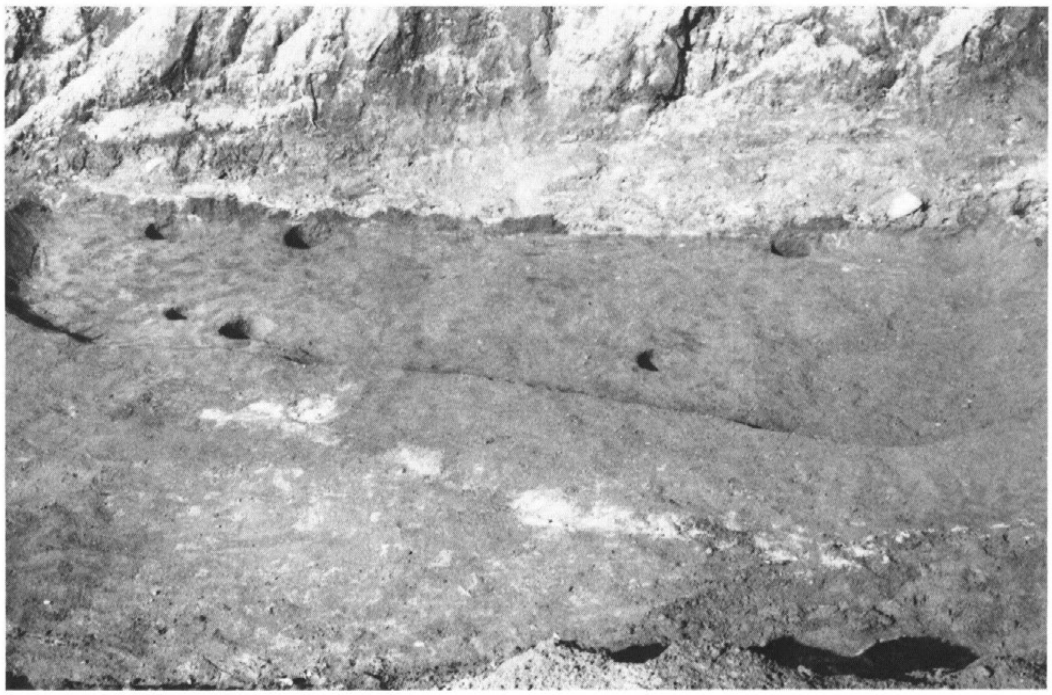
同　炉址



同　断面

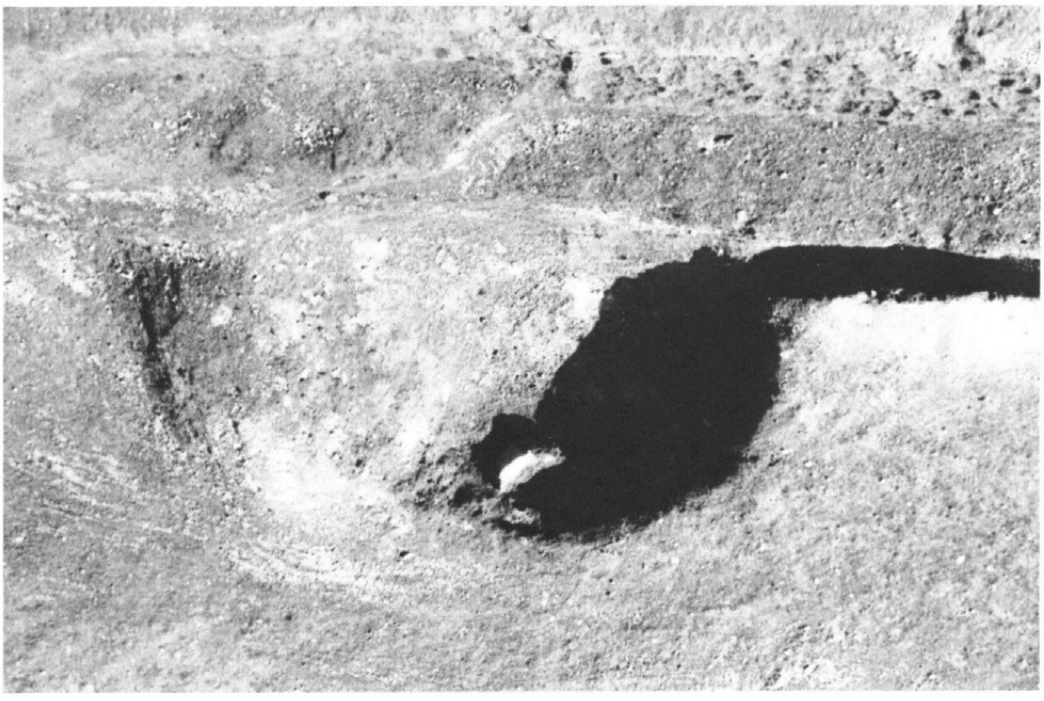
図版 7

5 号住居址



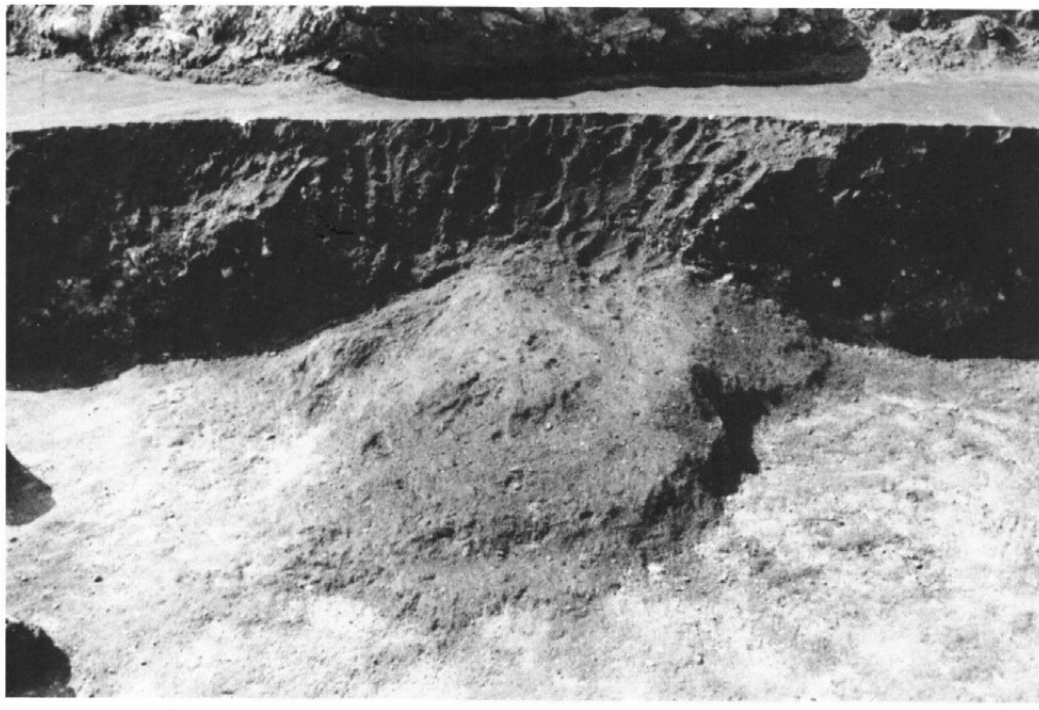
同

6 号住居址



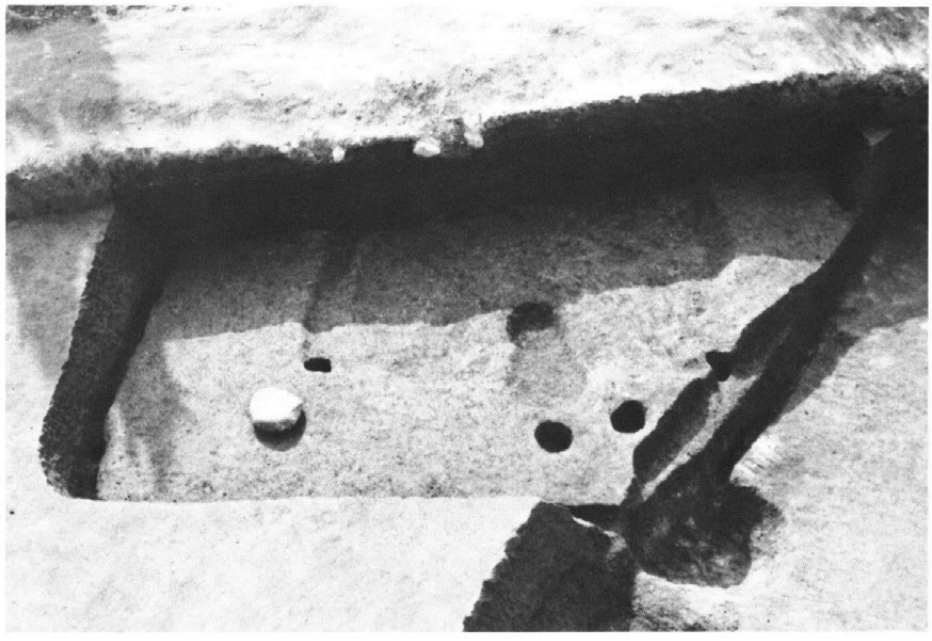
同　入口施設

図版 9



6号住居址 カマド

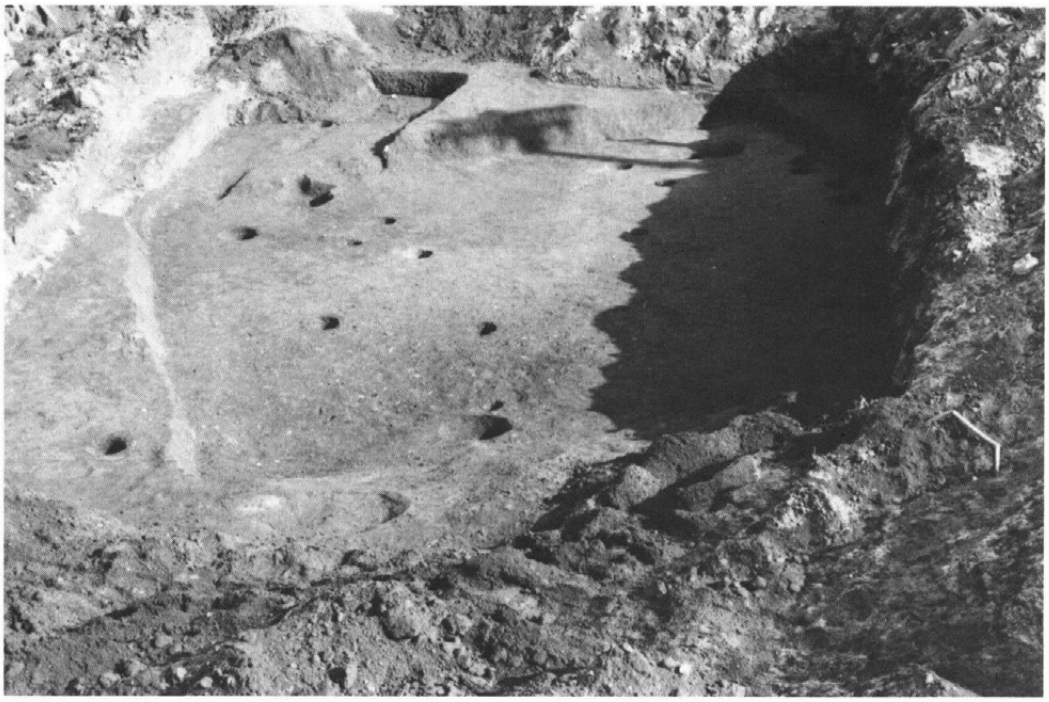
同　断面



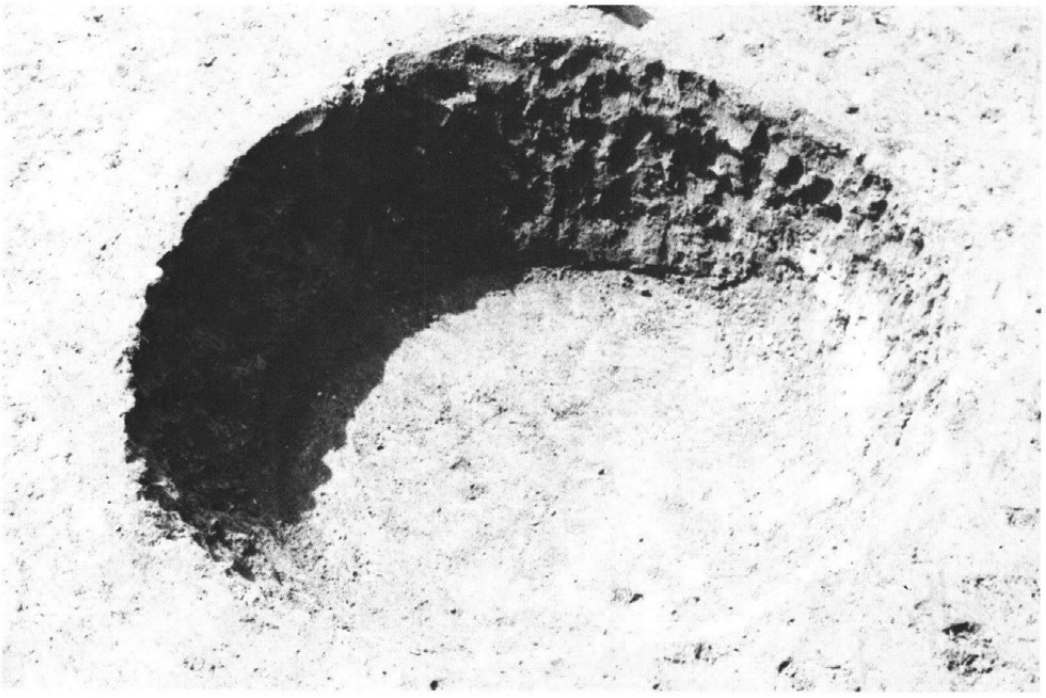
7号住居址

同

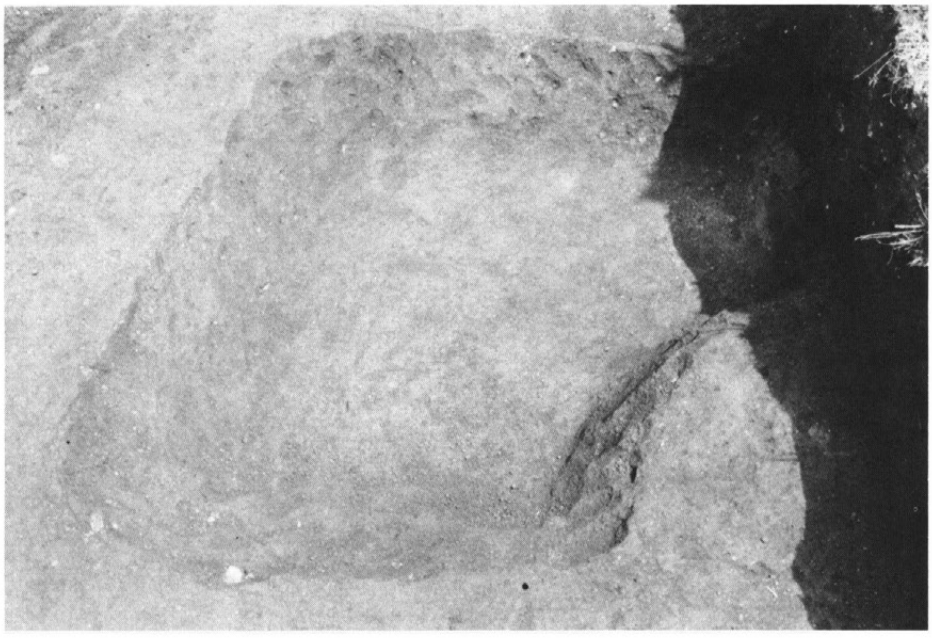
図版 11



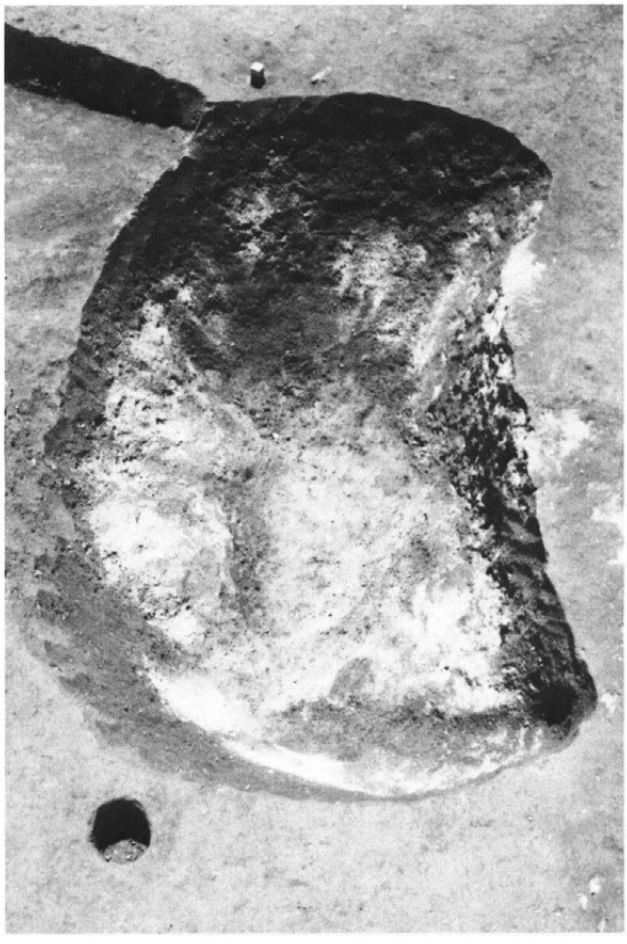
8 号住居址



土坑59

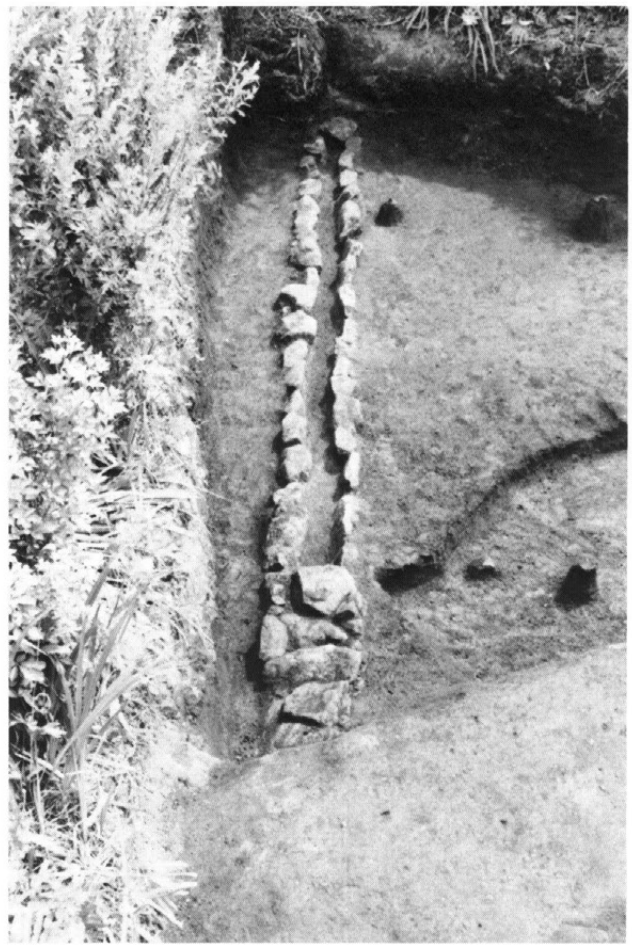


土坑60

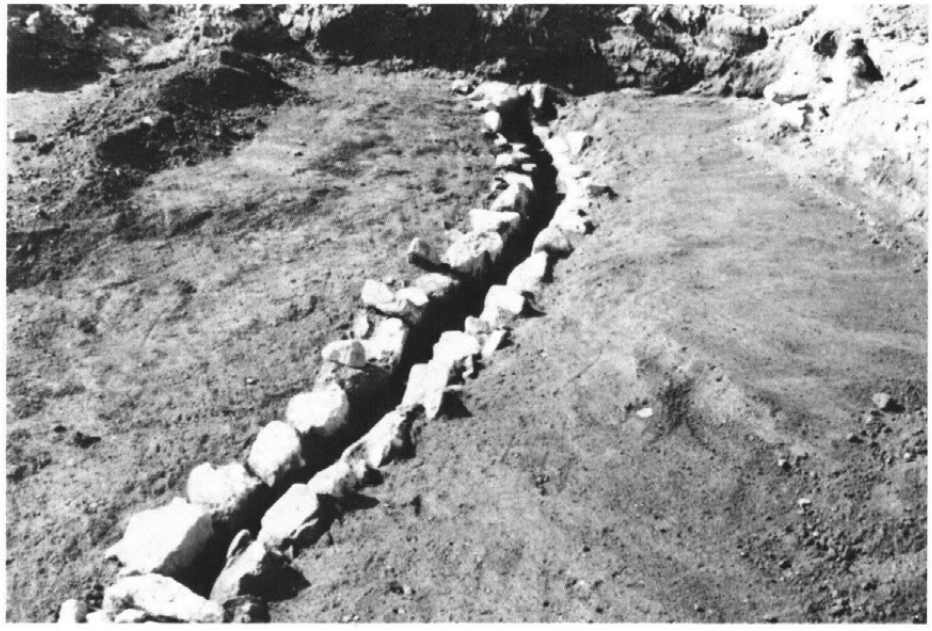


土坑61

図版13



C区暗渠排水

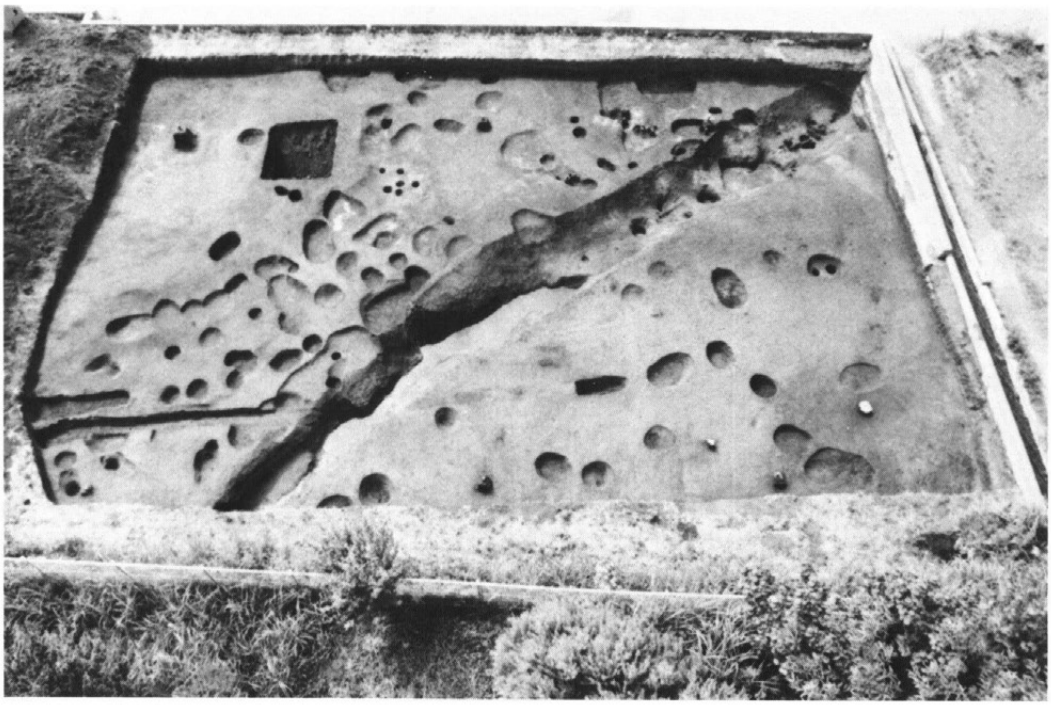


同

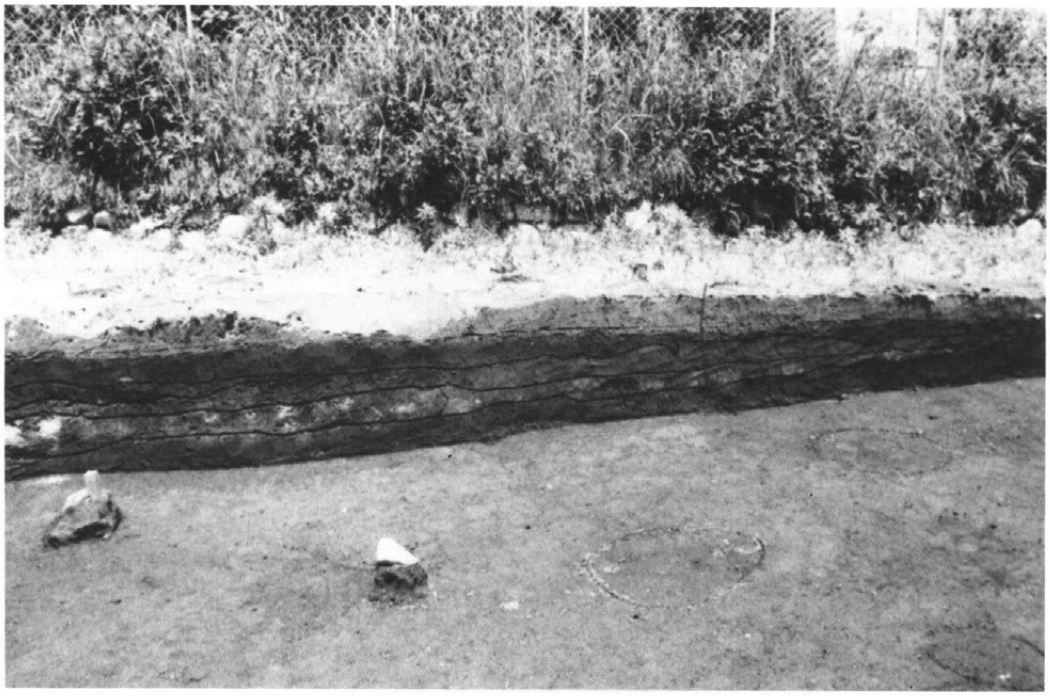
D区全景

DK99暗渠排水

図版15



E区全景



E区土層堆積状況

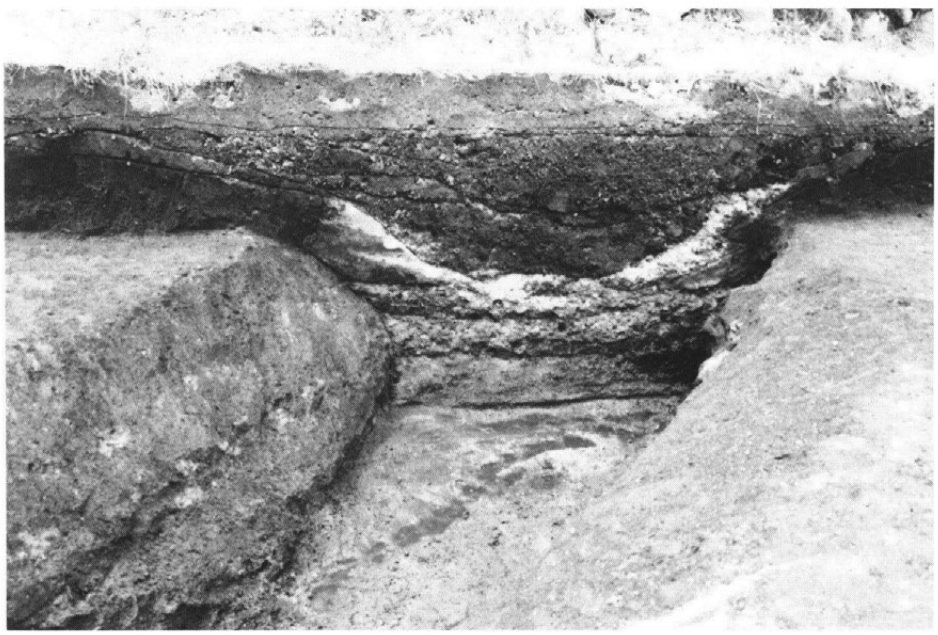
土坑1

土坑2

土坑52～56

図版 17

溝址1

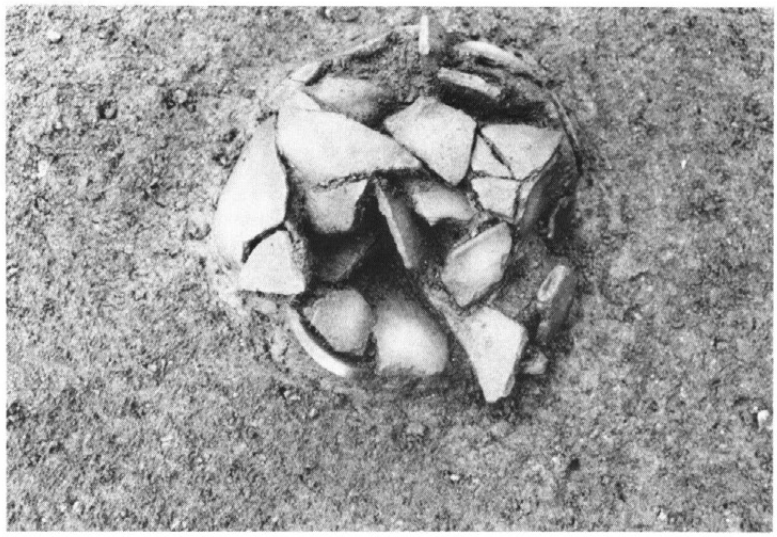


同 断面

ＥＡ95暗渠排水

Ｅ区遺構外出土遺物

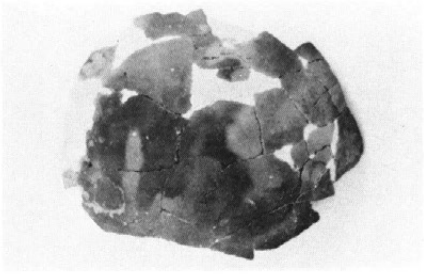
図版19

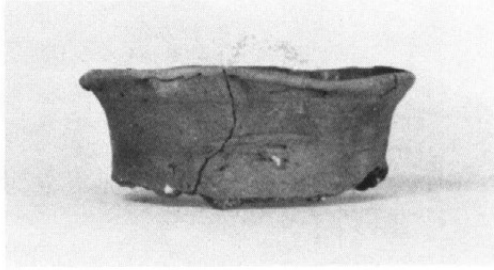


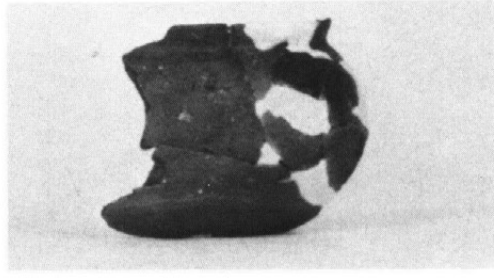
E区遺構外出土遺物

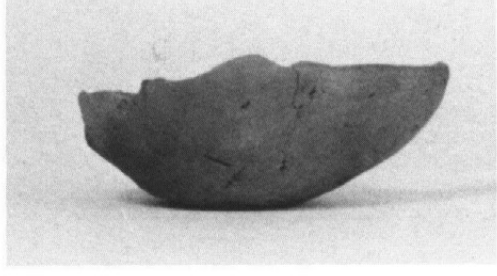
同

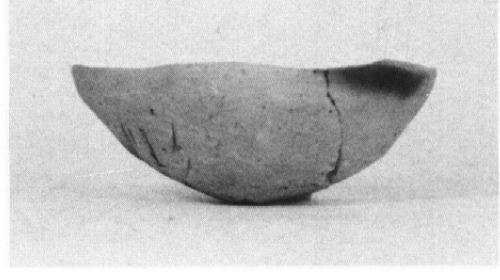
同





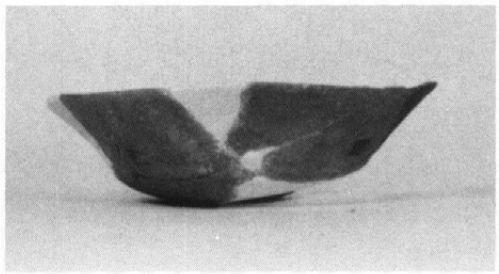




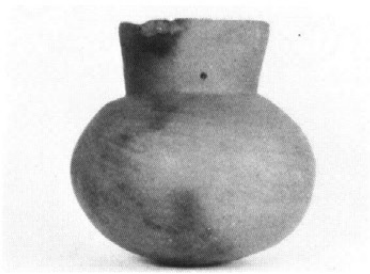


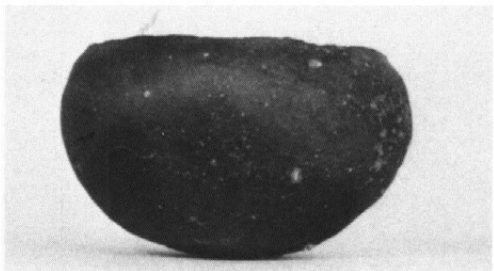
1 号住居址出土遺物

図版21

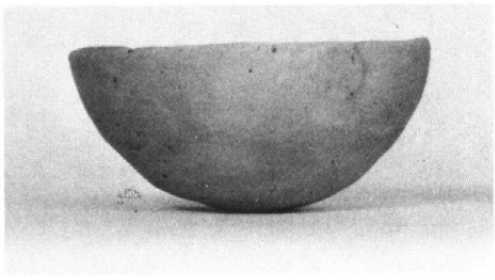
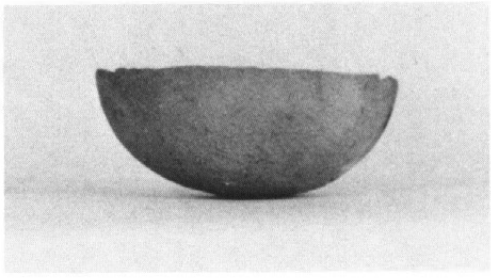
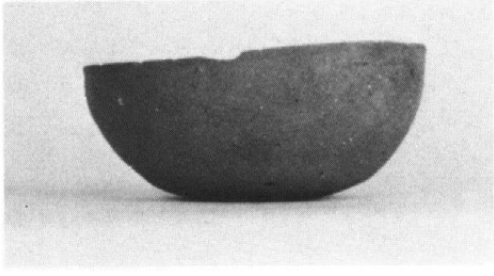
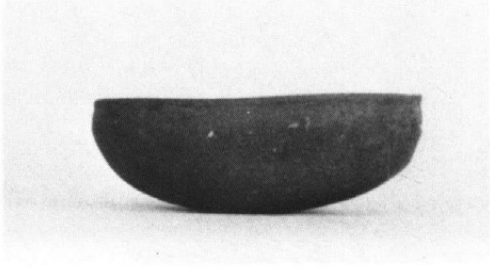
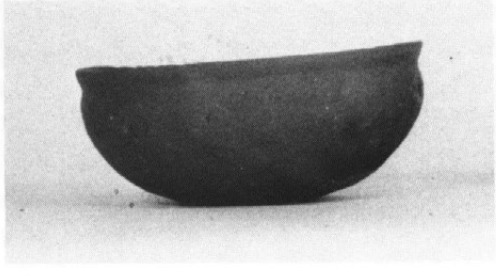
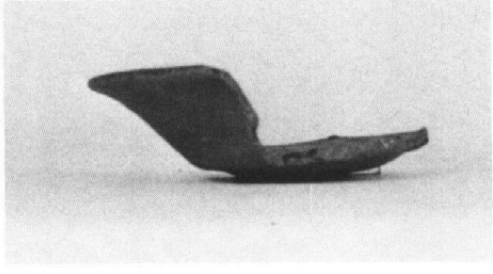


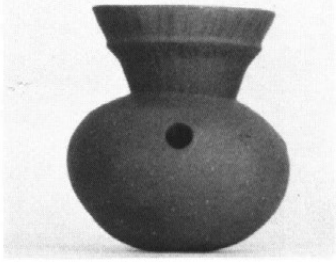
1号住居址出土遺物





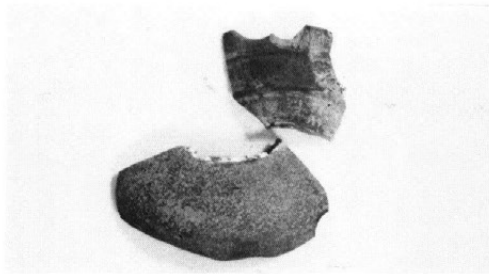
2号住居址出土遺物

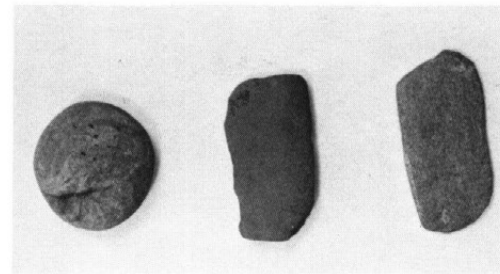







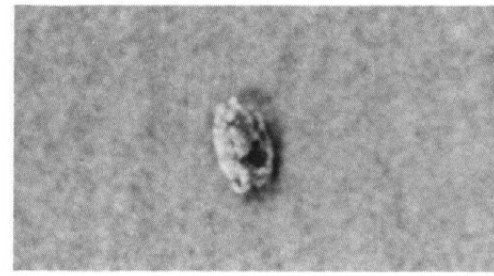


2 号住居址出土遺物

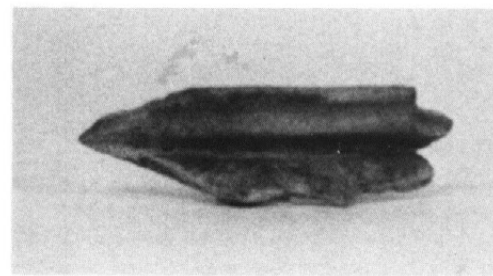
図版 23

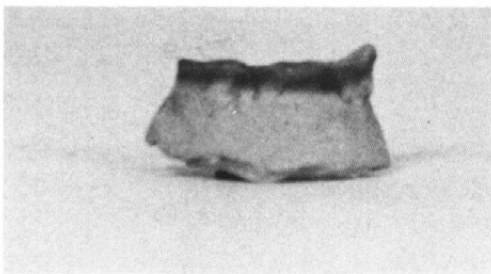


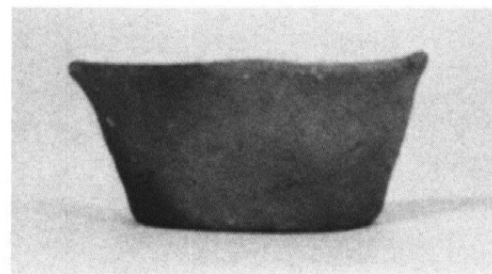




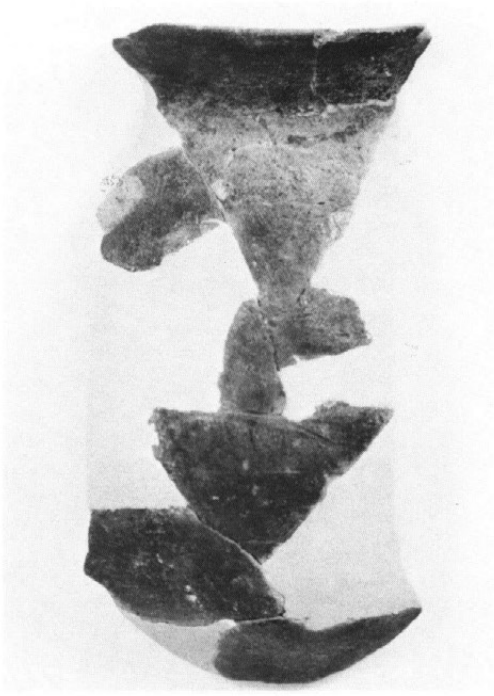
2 号住居址出土遺物

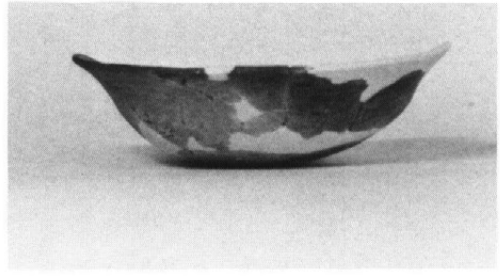


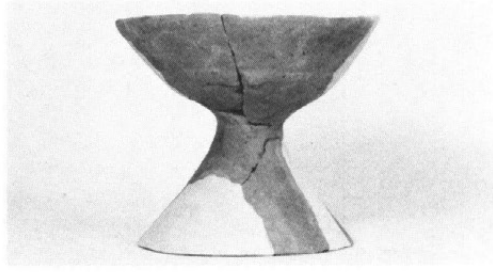


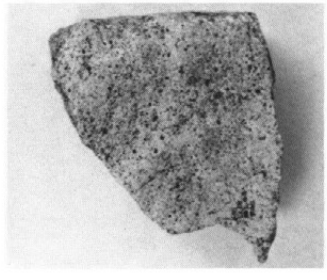


4 号住居址出土遺物

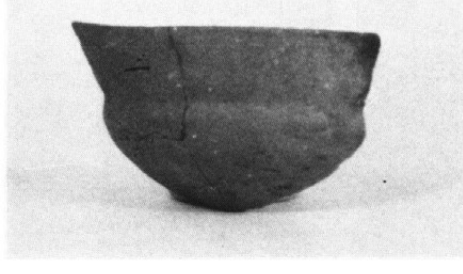






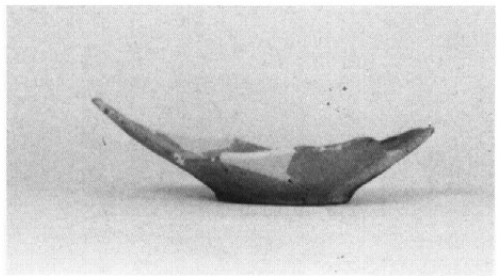


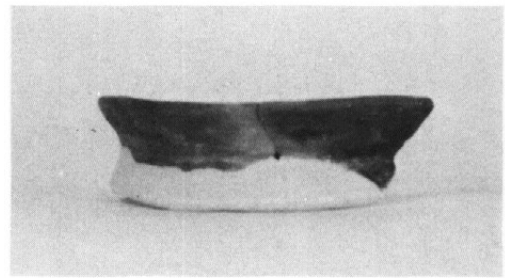
6 号住居址出土遺物

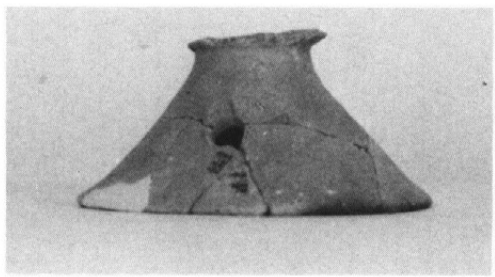


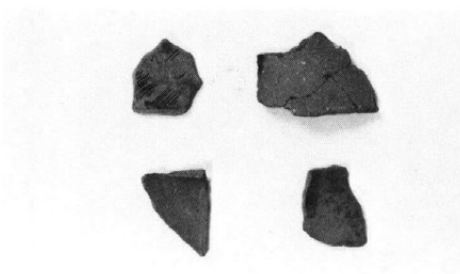
7 号住居址出土遺物

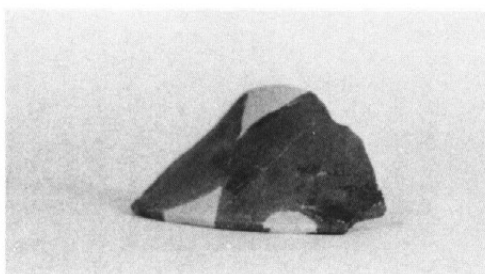
図版 25

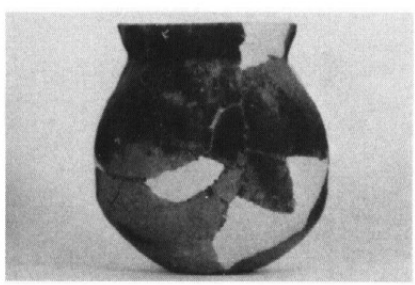


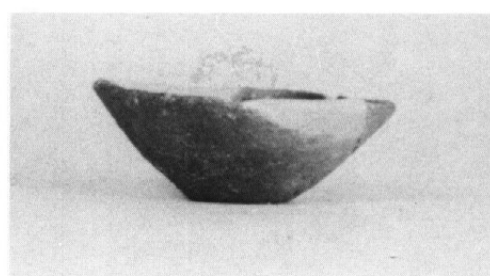




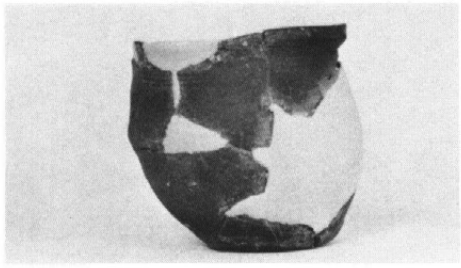


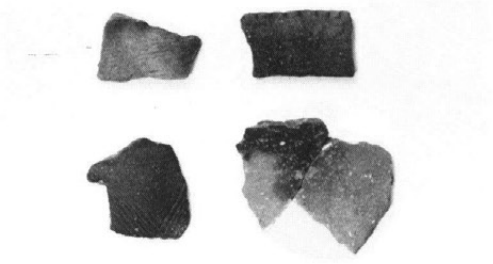




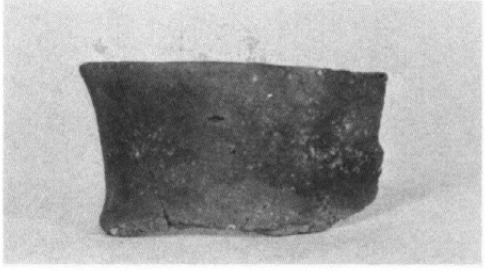


土坑出土遺物



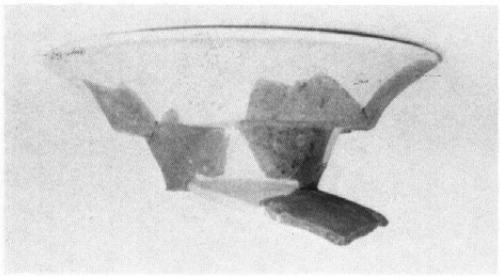


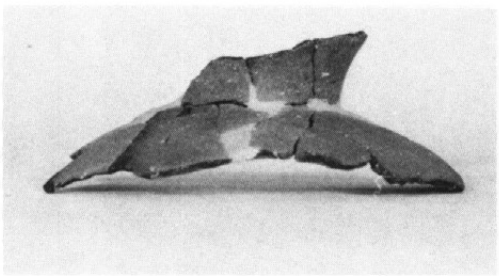
溝址 1 出土遺物

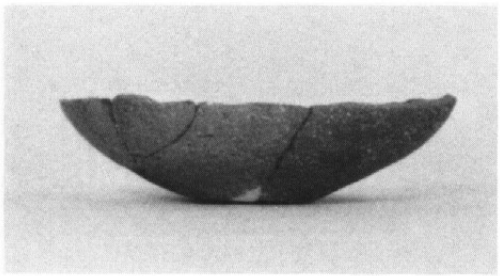


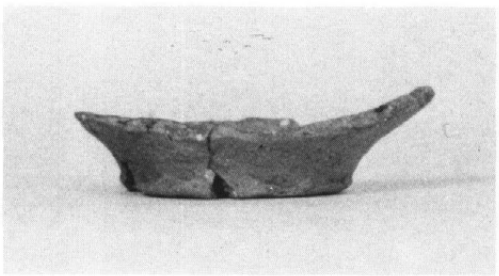
B・C 区遺構外出土遺物

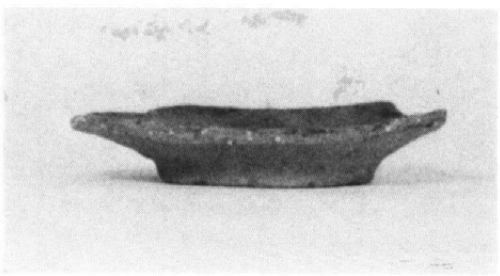
図版 27

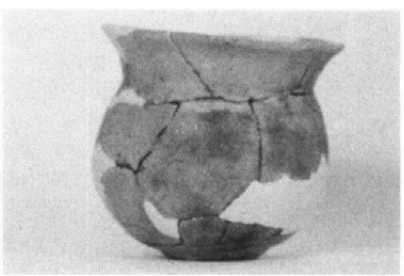


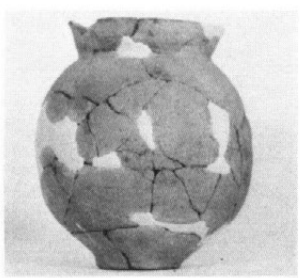


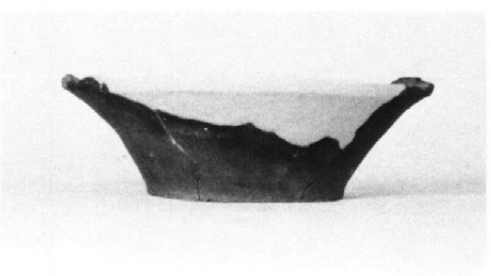




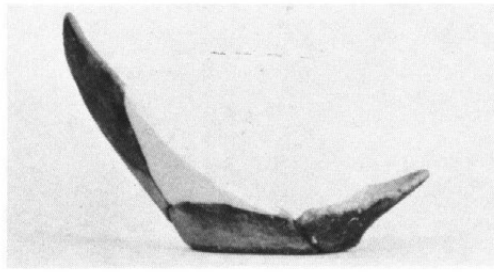


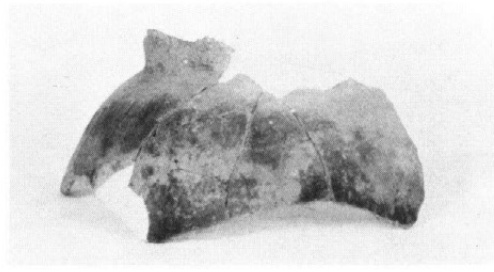


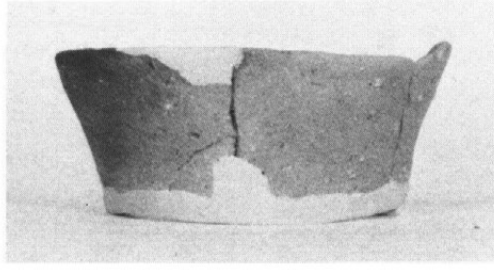


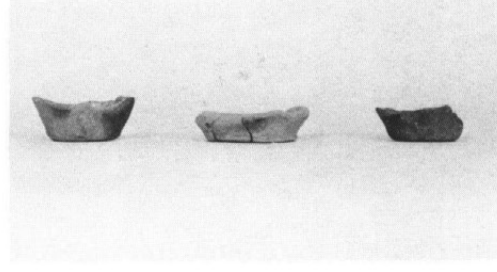


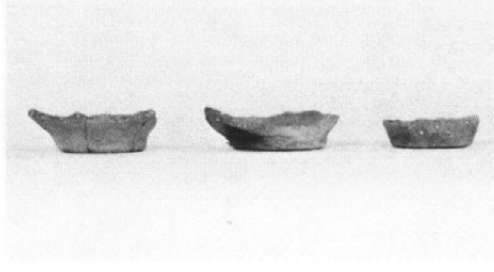
E区遺構外出土遺物

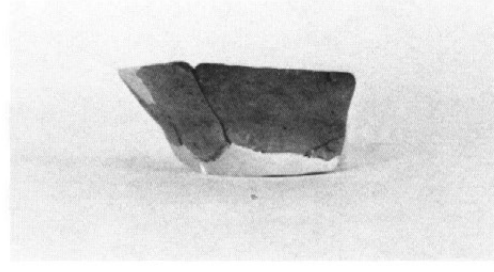


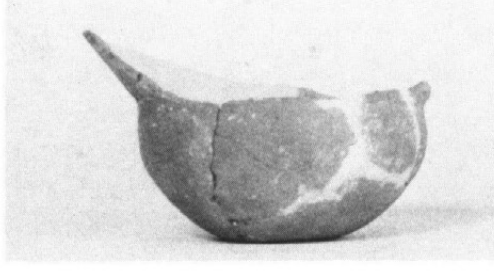


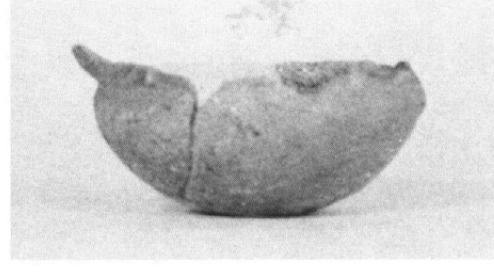






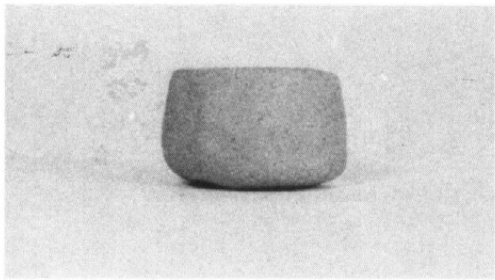


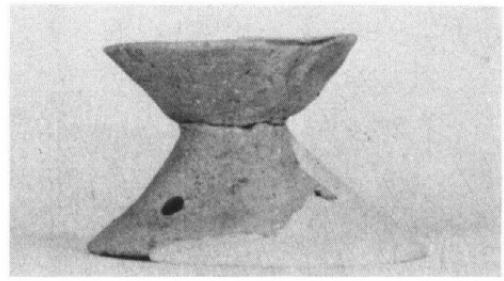




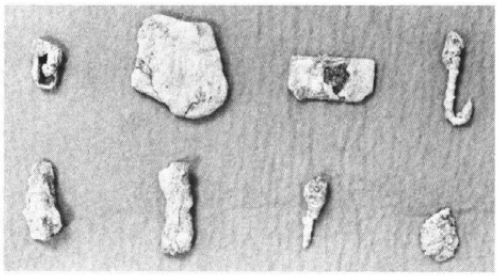
E区遺構外出土遺物

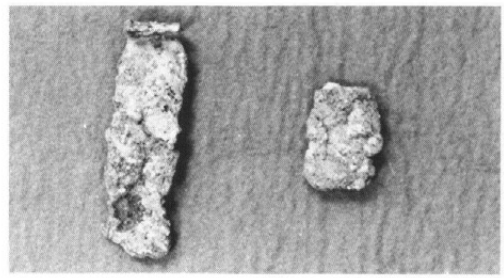
図版 29

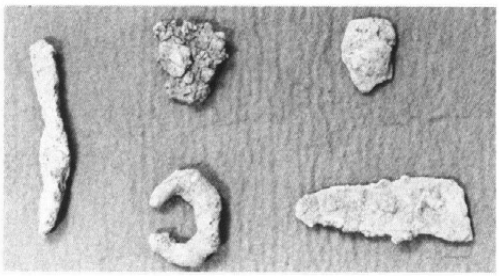


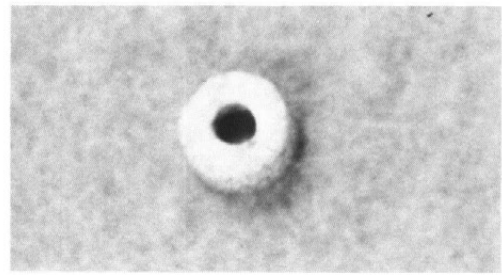


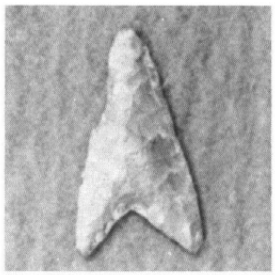
E区遺構外出土遺物

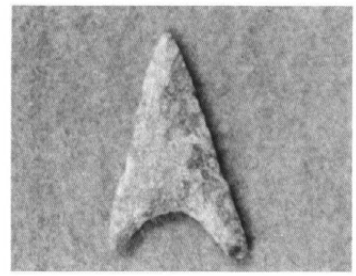






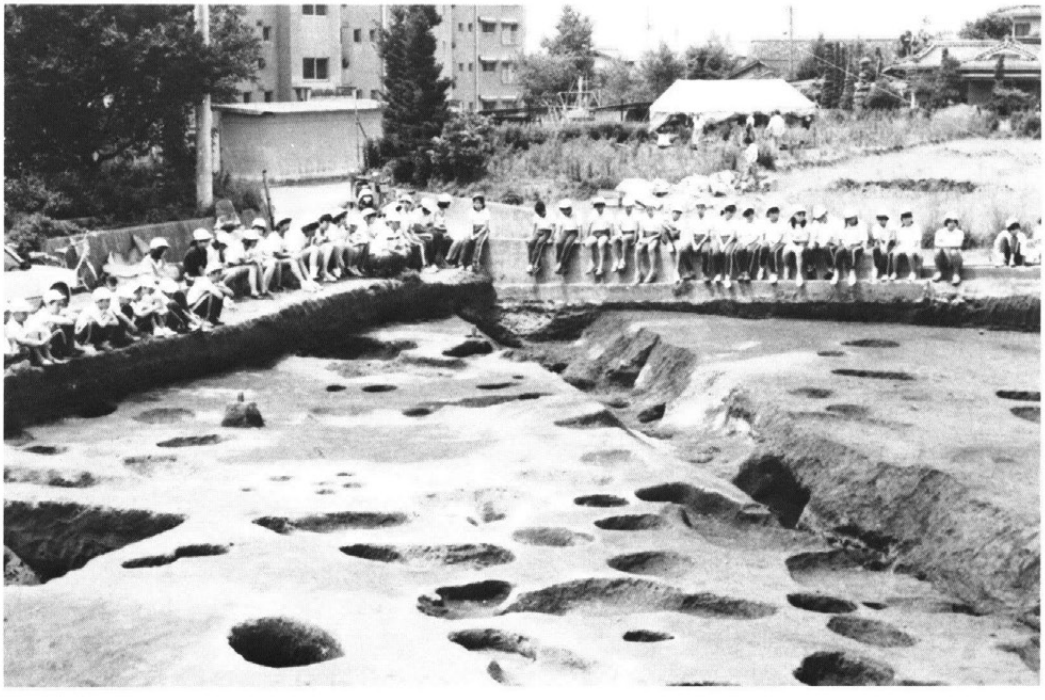






丸山遺跡　出土鉄製品・石器

調査風景



見学風景

図版30

調査風景

同

羽場丸山地区土地区画整理事業第１工区羽場―大瀬木線
建設に伴う　埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

丸　山　遺　跡

発　行　日　　昭和63年3月31日
編集・発行　　飯田市教育委員会
　　長野県飯田市大久保町2534番地
印　　刷　　（有）　飯田プリント